
銀魂 神々と氷空（そら）の時空へ

影夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 神々と氷空の時空へ

【Nコード】

N9461N

【作者名】

影夜叉

【あらすじ】

ある日、ピカチュウになってしまった銀時。

同じくニヤースになった桂とゾロアになった高杉。

ポケモンになった彼らの前に現れたのは、刹那と名乗るシェイミだった。

第1話 朝起きたら（前書き）

初投稿、銀魂&ポケモンです！

この話の銀魂キャラはポケモンを知っているとゆづ設定です。

第1話 朝起きたら

ある朝の万事屋。

「……朝か」

そう呟いきながら、坂田銀時は布団からのそのそと出てくる。

「確か、今日依頼があつたな」

ブツブツ言いながら、洗面所に向かう。と、何か違和感を感じた。

「あれ？なんか物が大きく見えるな」

目の前にある襖や、その向こうに見える廊下などが、いつもより大きかった。

「二日酔いか？昨日飲んでねエけど」

何か変だと思いつつ、銀時は洗面所に行く。

すると、普段は目の高さくらいある洗面所が、いつもの何倍もの高さで目の前にあつた。

「何だこれ！？なんで洗面所こんなにでけんだ！？」

両手を前に出した時、銀時は初めて自身の感じた違和感に気付いた。

「……あれ？腕が……黄色？」

体を見ると、着物は着ておらず黄色の体が見えた。

しかも、雷のような形の尻尾まではえている。

「いや…ない。こんなんありえないし」

そう言いつつ、銀時は洗面台によじ登る。

（夢だ…これきつと夢だって！）

自分に言い聞かせるようにして洗面台に上がる。

なんとか登れ、鏡を見た。

「夢だと言ってくれエエツッ！」

鏡に映っていたのは銀時ではなく、頭の左側の髪がはねた一匹のピカチュウだった。

第1話 朝起きたら（後書き）

ピカチュウになってしまった銀時。
果たしてどうなる！？

第2話 思わぬ再会（前書き）

第2話です。

神楽や桂が作中で話している人物は当然出てきません（笑）

第2話 思わぬ再会

兎のようにたった長く、先の黒い黄色の耳。

両頬にある赤い電気袋。

雷の形の尻尾。

どこから見てもピカチュウだ。

「夢だと言ってくれ……頼む……」

銀時は鏡に映った自分の姿を呆然と見る。

何故こんなことになってしまったのだろう……。

以前、猫の墓に立ちションして猫になったことがあったが、今回は心あたりがない。

「！そうだ、神楽、あいつはどうなってんだ！？」

洗面台から飛び降りると、銀時は神楽の寝ている押し入れに向かう。

「神楽ーっ！起きろ、おまえは無事かーっ！？」

押し入れを叩くと、戸がすーっと開き神楽が目をごすりながら顔を出す。

「何アルか？うるさい……」

「あれ？おまえは、なんともなってないの？」

神楽は、押し入れから下を見る。

そこには、髪のはなたピカチュウがいた。

「ピカチュウアル！私、初めて見たネ！！」

「え？ちょ、神楽？まさか、俺の声聞こえないの？」

「凄いアル！ホントにピカチュウって鳴いてる！」

銀時の声は聞こえていないらしい。

神楽は押し入れから出ると、ピカチュウを抱きあげた。

「おい、離せ！」

「おまえ何処から来たアルか？トレーナーはいるのか？」

「何処からって、万事屋に決まっててんだろ！トレーナーだっていねエよ」

銀時は言い返すが神楽には、「ピカ、ピカチュウ」としか聞こえない。

「おはようございまーす」

「あの声は、新八！」

「神楽ちゃん、おはよう」

志村新八が部屋に入り、神楽に声を掛ける。

「新八、見て！」

神楽は抱いているピカチュウを新八に見せた。

「わぁ、ピカチュウだ。どうしたの？」

「朝起きたら、部屋にいたネ」

「部屋に？銀さんが連れてきたのかな」

「新ハイイ！気付け、俺が銀さんだつて！！」

「まだ寝てるのかな？」

新八は、部屋を出ていく。

「銀ちゃんが拾ってきたんだつたら、私がおまえのトレーナーになるネ！」

神楽はピカチュウを高く上げて言った。

「勝手なことやってんじゃねエエッ！！おまえのポケモンになんかなりたくねエよ！」

「おかしいな、銀さんいないや」そう言いながら新八が戻ってくる。

「神楽ちゃん、銀さんいないよ」

「きつと、この口の餌とか買いに行ってるアル。そのうち帰ってくるネ」

「だから、俺ここにいてっ！！」

「それにしても、このピカチュウ野生なのかな？もうゲットされてるのかな」

「このピカチュウは私が育てるアル！宇宙一のポケモンにしてみせるネ！」

ピカチュウを見ながら、神楽は続ける。

「ピカチュウ、私達の目標はサトシネ。あいつら以上のトレーナーになることアル！」

「何がサトシだ！俺はおまえのポケモンにはならねエって！！」

銀時は神楽の腕から逃げ出すと、窓から外に出る。

「あ、ピカチュウが！」

「何処行くアルか、育江！」

「え？育江？ちょっと神楽ちゃん、何それ」

「あのピカチュウの名前ネ！」

「それ…止めた方がいいと思うよ……」

新八が言った時、玄関のインターホンが鳴った。

「誰だろっ」

新八と神楽は一緒に玄関へ行き、戸を開けた。
すると、そこにはエリザベスが立っていた。

「あ、エリ・アル」

「どうしたんですか？こんな朝早く」

エリザベスはプラカードを2人に見せた。

そこには、『桂さん来てませんか？』と書かれていた。

万事屋から飛び出してきた銀時は、宛もなく街を歩いていた。

「勢いで出てきちゃったけど、どうするか……」

ピカチュウになっている以上言葉も通じず、自分が坂田銀時だということも気付いてもらえない。

「……！あそこは……」

目線の先に、桂小太郎のいるアジトがあった。

（ツラなら気付く……分けねエか）

そう思いながらも、銀時はアジトの前に行ってみる。

「おーい、ツラア！いるかアッ！ー！」

入り口を両手で叩き叫ぶ。

「ヅラじゃない桂だ！……おまえ、銀時か！？」

後ろから桂の声がし、銀時は振り返る。

「ヅラ、俺のことがわかつ」

言いかけ、硬直する。

そこにいたのは、桂ではなく首に青いスカーフをしたニャースだった。

「ヅラ……か？」

「ヅラじゃない桂だと言っている！」

「おまつ、何でニャースになってんだ！？しかも猫になった時と同じスカーフしてるし！」

「うるさい。おまえこそ何故ピカチュウになっている？それもサトシくんではなく、ヒロシくんのレオンのようではないか！！」

「細けーこと言ってるじゃねェよ！何でおまえは、そんな姿になってんだって訊いてんの！！」

「俺にもよく分からん。何しろ朝起きたらこの姿だ。手掛かりを探しに出掛けてきた所だ。…そうゆうおまえは、心あたりはないのか？」

「ねエな。昨日は新八が帰った後、神楽と一緒にポケモンとナルト観てただけだし」

「ポケモン？それが原因じゃ」

「だったら神楽もなってるだろ。あいつなんともなってなかったぞ」

「そうかポケモンは関係なかったか。なら、俺が昨日観た『水の都まもりがみの護神のせいではないのだな」

「おまえ攘夷志士のくせにそんなん観てたの！？」

「黙れ。何を観ようと俺の勝手だ。残されたラティアスが可哀想だった……！」

「映画の感想なんかどうでもいい！手掛かり探してなんかあったのか！？」

「手掛かりか……。それが一つも……。ん？」

話しの途中で桂は、道の方を見た。

「ん？どうした？」

銀時も同じように道を見る。

すると、道の向かうから左目に包帯をしたゾロアが歩いているのが見えた。

第2話 思わぬ再会（後書き）

次回、ゾロアになったあの人がついに登場します！

第3話 ポケモンになった者達（前書き）

遂にあの人が登場！

後半は、キャラが壊れ、なんかぶっ飛んでいます。

それでもいいとゆう方はどうぞ。

第3話 ポケモンになった者達

銀時と桂は、顔を見合わせた。

「おい、あのゾロアはまさか……」

「いや、まだ分かんねーよ？あれ長谷川さんかもしんねーし、人気投票の時あいつの格好してたし」

ゾロアが近くなってくるのを見て、2人いや2匹は素早く隠れる。
ゾロアは、そのまま通り過ぎた。

「やっぱ、あいつだな」

「だが、どうする？奴とは、次に会った時『全力で斬る』と言ったんだぞ」

「斬るも何も…今の俺達は刀持ってないうえに、人間ですらねエ。それは、あいつも同じことだろ」

「……確かにそうだが、会ってどうするんだ？」

「訊くだけ訊いてみる。あいつの方がなんか知ってるかもしんないし」

そう言つと銀時は道に出る。
桂もそれに続く。

「行くか」

「そうだな」

「おい」

路地裏に入っていたゾロアを銀時が呼び止める。

ゾロアは振り返り、数メートル程離れた所に立つピカチュウとニヤ
ースを見る。

「おまえ…人間か？」

銀時の問いにゾロアは、黙っている。

「おい、答えろ」

するとゾロアはニヤリと笑い、口を開いた。

「人間に見えるか？」

ゾロアの声を聞き、2人は確信した。
目の前にいるのが誰なのかを……。

「やはり……！」

「てめーだったか、高杉」

包帯をしたゾロアは、決別したかつての仲間、高杉晋助だった。

「そうゆうおまえらは、銀時とツラか？」

高杉はククツと笑う。

「次に会った時は、全力でぶった斬るんじゃないかったのか？」

「そうしたい所だが、今はこんな姿だ」

「それより、てめーは何でそんな姿になった？ 言え」

「さアな。気付いたらこんな姿になってた。大方、おまえらと同じ理由かもな……」

「生憎、俺もツラも思いあたる節がねエ。朝起きたら、こうなってた」

「俺としては、エネコかニヤルマーになりたかったがな」

「馬鹿言ってんじゃないよ！」

銀時は桂を殴る。

「何をする！ おまえなどピカチュウになっても天パーではないか。もうちょっとましなポケモンになりたいと思わなかったのか！？」

「てめツ！！ 人が気にしてることを……！……って違う、ポケモンじゃなくて人間に戻る方法だ！」

じつとこちらを見ている高杉に銀時は言った。

「おい高杉！おまえ人間に戻れる方法なんか知らねーのか！？」

「知ってたとしても敵であるおまえらに言う気はねエよ」

それにな、と言い銀時と桂の前にくる。

「俺には、手立てがある」

そう言うと、高杉はその場でジャンプした。

すると、高杉はゾロアから元の人間の姿に戻った。

「な、何でエエエツ！？」

「そうか、ゾロアの特性『イリュージョン』か！」

イリュージョンは、様々なポケモンに姿を変えることの出来る特性だ。

「姿だけではなく、特性や技も使えるとゆうことが……」

桂が呟く。

「関心してる場合か！」

「さて…刀はねエが、今ならおまえらを捕まえて始末するのは簡単だな」

銀時と桂…いやピカチュウとニャースの前に高杉が立ち上がる。

(どうする……!?)

2匹が同時に思った時だった。
ふと、桂はすることに気付く。

「高杉。おまえ…尻尾が残っているぞ」

「ごまかそうとしても無駄だ」

「いや…本当にあるぞ。ゾロアの尻尾が」

2匹から目を逸らさず、高杉は手を後ろにやってみる。
……確かに尻尾が残っていた。

「な、何で尻尾が…!?!」

高杉が2匹から目を離れた瞬間、銀時は高杉の後ろに回り込み、尻尾にアイアンテールを放った。

「ぐあッッ!!」

技を受けた衝撃で、高杉のイリュージョンが解け、ゾロアに戻ってしまう。

「てっ、てめエ何しやがる!!」

「うつせエ!てめー一人抜け駆けなんかさせるか!!……てゆうか、俺今アイアンテール使ったし…!」

「やはり俺達は、完全にポケモンになっているとゆうことか…!」

自分の爪を伸ばし、桂が呟く。

「どうすんだ！人間に戻るところか、完全にポケモンなって！！」

「落ち着け。こんな時こそ冷静になれ」

取り乱す銀時に桂が言う。

「ゲームでは、世界を救うためにポケモンになったとゆうのがあったが…」

「俺はこの世界をぶっ壊すんだ。救う気なんかねエ」

「仮に救うとしても、こんなポケモン3匹で何が出来んだ？下手な探検隊くらいにしかならねーぞ」

「そうだな…。あまり考えたくないが、もし戻れなかったらどうする？」

「絶対元に戻ってやる！こんなふざけたピカチュウになるなら、まだ猫の方がましだ！！」

「俺もだ。不完全なイリュージョンじゃ元に戻ったなんて言えねエしな」

「いや万が一も考える。俺はいざとなったら、ムサシ殿とコジロウ殿の所に行こうと」

「だから、ムサシもコジロウもいねーんだよ！！」

「銀時、おまえはとりあえずサトシくんの所に行ったらどうだ？サトシくんならピカチュウが2匹になっても面倒をみてくれるはずだ」

「おい、無視か。10まんボルト食らいてーか？」

桂は気にせず、高杉の方を見る。

「おまえはゾロアークの所に行った方がいいな。見るからに怪我をしたゾロアなら、きつと世話をして」

「だから、話進めてんじゃねエ！！」

銀時と高杉が同時に叫ぶ。

「てめエ、なんやかんやでこの状況楽しんでるだろ！」

銀時は10まんボルトを放つ。

桂はそれをかわし、爪を伸ばしシャドークローを使う。

「フハハ！銀時イ、鼠であるおまえが猫である俺に勝てると思っているのか！？」

「うつせエ！ニヤースはいつもピカチュウにやられてんだろ！！」

桂のシャドークローをアイアンテールで受け止める。
衝撃で砂埃と破片が飛び、その一部が高杉にあたる。

「てめエら、やりやがったな！！」

高杉は幻影を使い、2匹に反撃をする。

路地裏は、あっという間に戦場のようになってしまった。

戦いに夢中になっていた3人、いや3匹は気付かなかった。

その様子を建物の上からじっと見ている者がいることを……。

第3話 ポケモンになった者達（後書き）

ゾロアだけ、技ではなく幻影です。

まだゾロアが、どんな技を使えるのか分からないので。

とりあえず、ポケモン達が使う技に制限はないことにします。
と言っても、覚えることの無い技は使いませんが。

第4話 刹那（前書き）

ポケモンですが、オリキャラが出てきます。
女の子です。

第4話 刹那

お互いに技を出しあう3匹のポケモン達を建物の上からじっと見ていた者は、やれやれ、と言うように路地裏に降りていく。

「あのー、ちょっといいですか？」

声を掛けるが、3匹は聞いていない。

「戦うのを止めて下さい！」

大きな声で言ったが、やはり聞いていない。

「話を聞けーッッ！！」

その声に驚き、3匹は漸く戦いを止めた。

「何だ？てめエ」

ボロボロになった銀時が訊いた。

目の前には、感謝ポケモンと呼ばれるシェイミがいた。

「やっと止めてくれましたね」

シェイミは、ため息をつく。

「……まさか、おぬしも俺達と同じポケモンになった者か！？」

傷だらけになっっている桂が言った。
シェイミは頷いた。

「はい、そうです。私は刹那せつなと申します。あなた達は？」

「…坂田…銀時」

「桂小太郎だ」

「高杉晋助だ…」

端から見ると、ピカチュウ、ニャース、ゾロアが名乗っている。
刹那は微笑んだ。

「やっぱりね」

「やっぱりって何だ！？おまえ、俺達のこと知ってんのか？」

銀時が叫ぶと、刹那は首を振った。

「いいえ。上から見ていた時、あなた達のやりとりを聞いていたの
で」

そう言うと、刹那は高杉の前に行く。

「何だ？」

刹那は後ろ脚だけで立つと、高杉の顔に触れる。

「おい、何す」

「動かないで下さい」

よく見ると、刹那は何かをしている。

「これでよし！」

刹那が離れると、高杉のほどけかけていた包帯がちゃんと巻かれている。

「包帯、ほどけてましたよ」

先程の戦いで、銀時か桂の攻撃で少しほどけてしまったのだろう。高杉は前脚で左目を少し触れ、刹那を見た。

「一応礼は言っておく」

「どういたしまして！」

刹那は微笑んだ。

「刹那殿、おぬしもポケモンになったと言ったな。何か知っておらぬか？」

桂が訊いた。

「刹那でいいですよ。残念ですが、私も何故こうなってしまったのかは分かりません」

ですが、と続ける。

「私達がこんな姿になった原因は、恐らく時空の乱れだと思うんです」

「時空の乱れ!？」

聞いたことの無い言葉に、3匹は同時に聞き返す。
刹那は続ける。

「時空…。つまり、時間と空間は絶えず変化を繰り返します。私は時空を観測する仕事をしていたのですが、どこかの時空が乱れてこなくなったのでは…と、考えています」

「その時空が乱れたままだと…どうなる？」

気になったのか、高杉は刹那に訊いた。

「はつきりとは言えませんが、1日は何日も繰り返されたり、朝が来なかったり…私達はずっとこのまま…と、なるかもしれません」

「おい、それじゃあどうすればいいんだ!? 朝が来なくなったり、俺達はずっとこのままって!…」

元に戻れないかもしれないとゆうことと、世界の危機に銀時は刹那に詰め寄る。

「お、落ち着いて下さい、銀時さん。あくまで仮説ですから、それにこの世界のこととまだ決まってません!」

「この世界? どうゆうことだ?」

刹那の言ったことに疑問を感じ、桂が訊く。

「さっき言いましたけど、どこかの時空とゆうのは、別の世界……つまりパラレルワールドのことです。別の世界での時空が乱れ、この世界に影響を及ぼした……のかもしれない」

「原因が別の世界だったら、その世界の奴らに任せるしかねえな。こっちじゃなんも出来ねーし」

銀時が呟くと、桂も言った。

「確かに。どうにかしたくても、パラレルワールドではな」
桂も、何とかしたいが無理だとゆう顔をする。

「だから、まだ断定出来ないんですって。……あれ？」

刹那は正面をじっと見ている。

3匹は、不思議に思い振り返る。
すると、黒みがかった紫色の渦のようなものが浮いている。

「何だ？あれ」

「あれは、『次元の渦』！？大変！早く逃げ」

刹那が言い終わるまえに、4匹は渦に吸い込まれてしまい、渦は消えてしまった。

第4話 刹那（後書き）

この後、ちゃんと話が書けるか微妙なところです。

第5話 不思議な世界（前書き）

なんか桂がやたらポケモン映画の話をしています。
あと、高杉がこの話から壊れていきます。

第5話 不思議な世界

「うわアアッ!!」

黒みがかった紫色の空間を抜けると、銀時達は深い森の中に出た。

「いてっ!」

「何だ?ここは」

桂は辺りを見回す。幾つもの大木が生え、木漏れ日で明るいが、木々が生い茂り空が見えない。

「おい、どこだ?ここ」

銀時が桂に訊く。

「俺が知るか!江戸じゃないことは確かだが」

「さっきのシェイミ、どこ行っただ?」

高杉が周りを見る。確かに一緒にいた筈の刹那がいない。

「私なら、ここですよ!」

上空から声がする。見ると、スカイフォームになった刹那が飛んでいた。

「おまえ、何で飛んでんだ!？」

銀時が言うと、刹那は近くに咲いている赤い花を差した。

「あそこに咲いている『グラシデアの花』を触ってフォルムチェンジしたんです」

「ここはどこなんだ？地球のどこかなのか？」

桂が訊くと、刹那は着地する。

「分かりません。さっきのが次元の渦なら、ここは過去か未来。または、別の世界となります」

「ここに来る前も言ってたな。次元の渦ってのは何だ？」

吸い込まれる直前に刹那が言っていたのを思い出し、高杉が訊いた。

「次元の渦は、今言ったように過去、未来、パラレルワールドのどれかに繋がるトンネルのような物です。私達が通ってきた物も恐らくそれでしょう」

「ならここは、過去か未来かパラレルワールドとゆうことが……
今にもセレビイが飛んできそうな森だな」

しみじみと森を見る桂を銀時が小突く。

「てめエ、またそんなこと言ってるのか!…まさか一昨日は『時を超えた遭遇』^{であいい}観てたとか言うんじゃないやねえだろうな」

「違う。一昨日は『蒼海^{うみ}の王子』を観ていた。『時を超えた遭遇』はその前の日に観た」

「あんま変わんねーだろ!!」

「いや、でも待て。映画の話ではないが、この森はセレヴィがいた森とよく似てるんだ」

「ツラ、映画の話じゃねえって言いながら、映画の話してんじゃねーかアツ!!」

銀時は桂をボコボコに殴る。

「あ、ちよつと来て下さい」

刹那の声がし、近くに行く。

「どうした？」

「あれ…何でしょう？」

刹那の視線の先には、石造りの古めかしい建物があった。

「何だあれ？遺跡か？」

「とりあえず、行ってみましょう」

4匹は、建物の近くに行ってみた。
建物は、銀時が言ったように遺跡だった。

「何か…出そうだな。スタンド…的な」

「スタンド？」

「何ですか？それ」

「いや、それは…あれ」

「先に行ってますね」

刹那と桂は先に入って行く。

「あ、ちよつと待て」

露骨にビビる銀時を高杉がすれ違いざまに鼻で笑う。

ゾロアになっているせいか、かなり馬鹿にしているように見える。

（あの野郎…！）

銀時はすぐに後を追ひ、遺跡に入る。

中は真つ暗…ではなく、ぼんやりとした明かりがある。

見ると、その明かりは刹那の頭上にある光る玉からだった。

「フラッシュで明るくしましたけど、ちよつと足りないです。誰かもう一人、やってくれませんか？」

「よし、なら俺がやろう」

桂は刹那と同じようにフラッシュを使う。

額にある小判が輝き、さつきよりも明るくなる。

「おまえがやると、やっぱり小判それが光るのか」

銀時が桂の光る小判をじつと見る。

「おまえがやったら、全身が光りそうだな。ピカチュウだけに」

「何がピカチュウだけにだ！」

「こつちに壁画とアンノーン文字があります」

刹那が壁の一部を差した。

行ってみると、何かが大量に描かれており、その説明のようにアンノーンとゆうポケモンをかたどったアンノーン文字が書かれている。

「何て書いてあるんだ？おい、ヅラおまえちょっと読んでみる」

「俺に振るな！読める訳ないだろう！！」

「『全ての命は別の命と出会い、何かを生み出す』…」

「おまえ、読めるのか？」

高杉が訊くと、刹那は頷く。

「少しだけなら。多分そう書かれているんだと思います」

刹那は壁画から目を離し、3匹の方を向く。

「路地裏でのあなた達の会話は、全て聞いてしまいました。元は仲間だったけど、今は敵対している。」

でも、今はそんなことは言わず、協力しあった方がいいと思います」

3匹はお互いに見つめあう。

「元の世界に戻るまでも、人間に戻るまでもいいです。……ずっと仲の悪いままなのは見たくないです」

「……人間に戻ったら、すぐぶつた斬るからな」

銀時は高杉に言った。

「銀時……」

「俺もだ。今は四の五の言っている場合ではないしな」

桂も言っと、高杉は息をつく。

「しょうがねエ。人間に戻るまで協力してやるよ」

「良かった。ちょっとした仲直りしてくれ」

「てめエ、高杉！さっき俺のこと鼻で笑っただろ！！」

「露骨にビビってるおまえが面白かったからな」

本物のゾロアのように高杉が笑う。

「ふざけんな！この包帯ゾロア！！」

「何だと、天パーピカチュウ!!」

2匹は喧嘩を始める。
桂はそれを見ている。

「あの小太郎さん、止めなくていいんですか？」

「ああ、あの2人ならほっといても平気だろう」

「そうなんですか？」

「それより、この遺跡の中を見た方がいいのではないか？」

「……そうします」

刹那はやや複雑そうな顔で遺跡の壁画やアンノーン文字を見ると、次第に表情が消えていく。

「ん？どうした？」

刹那は答えず、壁画を見続ける。
やがて、見終わったのか顔を背ける。

「皆さん聞いて下さい」

3匹に刹那が言った。

「この世界は、過去でも未来でもないパラレルワールドのようです」

「別の世界とゆうことか」

桂が呟き、刹那は続ける。

「ただ、この世界は争いがあるみたいです」

争いとゆう言葉に3匹は反応する。

「神と呼ばれる者達による……争いが」

第5話 不思議な世界（後書き）

もう銀魂じゃなくてポケモンじゃん。
って感じになっていきそうです。

第6話 神々の戦い（前書き）

不思議なダンジョン的になってきました。

第6話 神々の戦い

「神と呼ばれる者…?」

突飛した話に3匹は困惑する。

「順番に説明しますね」

刹那は壁画の前に行き、話し始める。

「この世界は、ずっと昔に人間が滅びたらしく、代わりにポケモンが繁栄をしているそうです」

壁画が指すと、それらしきことが描かれている。

「人間がいなくなっただけでしばらくした後、時の神と呼ばれるディアルガと空間の神と呼ばれるパルキアがお互いの領地を巡り、争いを始めた……。やがて、その2匹に賛同するように他のポケモン達も戦いだした…と、あります」

「ディアルガとパルキアが戦いだして、他のポケモン達も戦う…か」

桂が呟くと、刹那は頷いた。

「ディアルガとパルキアが今も争っているなら、全てのことに説明がつきます」

「説明？」

「そう、ディアルガとパルキアはそれぞれ時と空間を司っています。しかし、2匹が争ったことにより時と空間、つまり時空が捻れ、歪み、もつれた為、この世界だけではなく私達がいた世界にも影響を与えたのだと思います」

「じゃあ何か？俺達がこんな姿になって、こんな世界に來ちまったのは、そいつらのせいってことか？」

銀時が訊くと、刹那は「そうなりますね」と答える。

「賛同したポケモン達の中には、ディアルガ派とパルキア派に別れたり、戦いにまったく参加しないポケモンもいたようです」

別の壁画を見る。

「『時と空間はどちらもなくてはならない物。私達はどちらも選ぶことは出来ない、この争いはいつになったら終わるんだろう……。永遠に戦い続けるのか？』と、書かれています」

「いつになったら…とあるが、まだ争いは続いているのか!？」

桂が疑問に思った。

「外に出て確かめるしかねエだろ。本当に戦いがあるってんならな」
そう言うと、高杉は遺跡から出ていく。

「あいつの言う通りだ。確かめるしかねエな」

銀時も出ていき、桂と刹那も一緒に行く。

「戦いつつても、そんな感じなもん全然してねーな」

銀時は周りを見る。

相変わらず、深い森があるだけだ。

すると刹那は、おもむろに目を閉じる。

「おい、何してんだ？」

「波導はどうで見えます」

「はどう？って何だ？」

「後で言います。……見えた！」

刹那は目を開けて振り返り、遺跡の方を見た。

「この先、数キロ程に戦っているポケモンが沢山います！争いはまだ続いているみたいです」

「向こうか」

桂と高杉はその方向を見た。

「で、はどうって何？」

「波導とゆうのは、全ての人や物質が放つ気やオーラのような物です。私はその波導を感じることが出来るんです」

「へえ、便利だな、そうゆうの」

「じゃあ、皆さん行きますか？その戦場に」

「当然だ」

「時空が乱れているのがディアルガとパルキアのせいなら、2匹の争いを止めれば全て元に戻るはずです」

「なら、なおさらだな」

高杉が呟くと、銀時も言った。

「ああ、神だろうが何だろうが勝手なマネしやがって、ぶっ飛ばしてでも元に戻させてやる」

「神をぶっ飛ばすとゆうのは気が引けるが仕方ない」

桂も続いた。

「分かりました。では、行きましょう」

4匹は戦場に向い、森を歩き出す。

第6話 神々の戦い（後書き）

次回、4匹が戦います！

第7話 志士再び（前書き）

ポケモン達の使う技はゲームにあやかって全て平仮名とカタカナです。

技ではないものは漢字表記にしています。

見づらいかもかもしれませんが、よろしくお願いします。

第7話 志士再び

「着いたみたいですね」

刹那達は、丘の上から戦場となっている場所を見た。

先程の遺跡から、この戦場までは数キロしか離れていないが、ポケモンになっていてるためかなり時間がかかってしまい日が傾いてきている。

「ディアルガとパルキアはいないようですね。とりあえず、この戦場を突っ切って正面にある森まで行きましょう。……ポケモン達と戦いますけど」

「まるで攘夷戦争の時みてーだな」

銀時が戦場の状況を見て言った。

数え切れない軍勢、倒れたポケモン達、そして血……。
立場は違うが、あの時と同じだ。

「今度の相手は天人ではないぞ」

桂も戦場を見つめ言う。

「下手すりゃ、神サマって呼ばれてる奴らと殺りあうんだしな」

ニヤリと笑いながら、高杉が呟く。

「じゃあ、行くか」

「戦いは、あくまで二の次にして下さいね。正面に見える森まで行くだけなんですから」

「ああ、わーってるよ！」

そう言うてすぐ、銀時は丘を駆け下り、戦場に向かう。桂と高杉も続き、その後ろから刹那が飛ぶ。

「うおおオオツー!!」

銀時は近くにいたヘルガーにアイアンテールを放ち、その勢いで辺りにほうでんを出す。

「銀時、貴様！そんな技を出して、俺達のこと考えるー!!」

ハッサムをシャドークローで倒した桂が叫ぶ。

「当たったら、そんな時はそんな時だ！ポケモンの技は複雑みてエだな」

コドラにいわくだきを使い倒す。

「確かにそうだな！」

目の前に来たガラガラにつばめがえしを放つ。

「あいつらには、負けられねエー!!」

高杉はみだれひっかきでバクダを倒し、背後にいたレントラーを

だましうちで蹴散らす。

「皆さんなかなかやりますね」

上空から刹那は呟き、エナジーボールやエアスラッシュを地上と空中にいるポケモンに放つ。

「何だ、あいつら？」

「どつちの味方だ？」

銀時達を見て、他のポケモン達が口々に言った。
目に付いたポケモン達を次々に倒していく4匹……。

「あいつらは、きっとどこにも属していない反乱者達だ！」

誰かが叫ぶ。

「先にあいつらを倒せ！！」

ポケモン達は一斉に4匹の元に向かって来た。
攻撃が自分達に集中しはじめてきた為、戦況は苦しくなってくる。

「あぢぢッ！！」

かえんほうしゃをかわそうとした銀時だが、尻尾に当たってしまった。

「ちっ、火傷か……！ッラ、おまえは無事か！？」

「ヅラじゃない桂だ！はつけいを受けたせいで、腕が麻痺している」

「これ以上は無理そうだな……」

この戦いは勝つ為ではなく、潜り抜ける為のもの。

元から戦場（こ）にいるポケモン達を全て倒すことが目的ではない。

「刹那と高杉の姿が見えねエな」

「先に森に行ったのかもしれん。俺達も行くか」

「そうだな」

銀時と桂は、それぞれ火傷と麻痺がある体で技を使い、走る。

桂はちらつと銀時を見た。

傷だらけになりながらも荒々しく戦い続けている。

（姿は違えど、この戦い方はまさしく白夜叉……！！）

「ヅラ、先に行け！」

「何をする気だ銀時！？」

「こうすんだよ……！」

銀時は地面に向かって渾身の力でアイアンテールを放った。砂煙が上がり、視界が悪くなる。

「逃がすな！捕まえろ……！」

砂煙が晴れると、銀時と桂は既になくなっていた。

「なんとかこれだな…」

森の中で息を切らせながら銀時が言った。

「それより、高杉と刹那を探すぞ」

歩きだそうとした桂は突然うずくまる。

「ヅラ。どうし…ぐっ！」

尻尾が焼け付くように痛んだ。

「腕が動かん…。おまえも火傷が悪化してきているようだな…」

「そうみてーだ。くそっ、高杉と刹那…どこいんだ」

銀時が心配？している高杉と刹那はまだ戦場にいた。

高杉は攻撃を受けるが、なんとか着地する。

が、尻尾と右後ろ脚が凍りついている。

「し、晋助さん…大丈夫…ですか…？」

刹那は、息も絶え絶えに訊いた。

先程受けた、どくどくのキバで猛毒状態なため、どう見ても刹那の方が重症だ。

「大丈夫なわけねエだろ。てめエの方が今にもぶっ倒れそうじゃねエか」

「私は大丈夫です…。それより、さっき波導で見たんですけど…銀時さんと…小太郎さん…もう森へ行ったみたいです……」

「そうか。だが、俺達はどうする？おまえは毒でフラフラになって俺は片足が凍りついてる」

「それなんですけど…」

視界がぼやけ、刹那は目をこする。

「あれ…？よく見えない。晋助さん、ちょっといいですか？」

刹那は高杉の耳元で何かを言った。

「おまえ…俺より小さいのに何」

「心配いりません。私、いざって時は結構やるんです」

そう言うと、辺りに漂う煙を首に付いている花びらから吸い込む。

「目…閉じてて下さい」

言いつつ、刹那も目を閉じる。

その瞬間、刹那の体が淡い緑色に輝く。

「閉じたままでいて下さいよー!!」

「わかってる！！」

刹那の体は更に輝いた。

「シードフレア！！」

刹那は叫び、辺りに緑色の光と共に強い衝撃波が発生する。

衝撃波により、周りにいたポケモン達は吹き飛ばされた。

高杉も飛ばされそうになるが、素早く刹那が受け止め、そのまま森へ飛び立った。

「くっ……！」

森に入った直後、刹那は落下してしまう。

「おい、平気か？」

高杉は凍りついている脚を引きずりながら、刹那の近くに行く。

「平気……です。その氷と私の毒、なんとかしますね」

再び目を閉じると、刹那の体が緑色に輝く。

前脚を高杉の後ろ脚にあてると、氷が溶けていった。

「っはあ！これで大丈夫です。アロマセラピーを使いました」

刹那も毒が消え、顔色が少しよくなっている。

「早く銀時さん達を探しましょう。動けなくなってる筈です」

「ああ。……ちょっと待て」

高杉が辺りを見回す。

「どうしました？」

「何かいる……」

高杉の言った通り、2匹をじっと見ている者が先程からいる。

第7話 志士再び（後書き）

次回、映画で活躍したポケモンが出てきます。

第8話 霧の村（前書き）

途中で、映画を観てなきゃ解釈出来ないような所があります。

第8話 霧の村

「誰だ？出てこい」

高杉が辺りを見回しながら言う。

「そこ！？」

波導で周りを見た刹那は、近くの木の上辺りにマジカルリーフを放つ。

「はあッ！」

木の上から、一匹のポケモンが飛び降りてくる。
黒い体に赤黒いたてがみが印象的なポケモンだ。

「何だ、てめエは？」

警戒しつつも、高杉は相手の出方を窺う。

「晋助さん、これゾロアークってゆうゾロアの進化系のポケモンです！」

「これがあれになるのか……」

思わず自分の姿とゾロアークの姿を見比べる高杉。

「おまえ達、さっき戦場にいたな」

ゾロアークが口を開いた。

「だったら何ですか？」

2匹の前にゾロアークが立つ。

「怪我…してるな」

刹那と高杉を見る。特に高杉の左目をじっと見つめた。

「これは元からだ。さっき受けたモンじゃねエ」

「…そうか。それより、その怪我の手当てをしたい。こい」

「そう言っただけで俺達を殺るつもりか」

ゾロアークを高杉は睨み付ける。

「待って下さい、ゾロアークから悪意の波導は感じられませんでした。本当のことを言っています」

「感情もわかんのか？その波導ってのは」

刹那は頷く。

「少しは信用してくれたか」

ゾロアークは手を伸ばし、高杉を掴む。

「おい、離せ！」

「おまえはさっきまで凍っていただろう。この中にいる」

そう言うのと、自分のたてがみの中に高杉を入れた。

次に刹那を抱き上げる。

「あ、ちょっと待って下さいゾロアーク。向こうに仲間のピカチュウとニヤースがいて、動けなくなってると思うんです！」

刹那は反対の方向を指す。

「わかった。すぐに行こう」

「くっ……！痺れが全身にきたか……」

桂はうつ伏せになったまま呟く。

「銀時、おまえは大丈夫か？……銀時？」

返事が無く、桂は震える体で銀時の方を見た。

すると、大量の汗を流し、荒く呼吸をして倒れている銀時がいた。

「銀時！しっかりしろ！！」

這いながら銀時の近くに行き、桂は叫ぶ。

「おい、死ぬな！」

「か…、勝手に殺してんじゃねーよ…。火傷くらいで、俺がくたばるかよ……」

銀時は弱々しく答えるが、体の傷よりも尻尾の火傷のほづがずっと痛かった。

「先に、おまえをなんとかしたいが…。すまん、俺も動けない……」

「いいよ…。あと」

言いかけた時、2匹の前にシェイミを抱いたゾロアークが現れた。

「誰…だ？」

「刹那！」

桂は抱かれているシェイミが刹那だとわかった。

「銀時さん、小太郎さん！大丈夫ですか！？」

ゾロアークに抱かれたまま刹那が言った。

「これが…大丈夫に見えるか…？それより、そのゾロアークは？」

「ゾロアークはゾロアの進化系。まさか、高杉！進化したのか！？」

「してねエよ！」

ゾロアークのたてがみの中から高杉が顔を出す。

「酷い火傷と麻痺…！すぐ治しますね」

ゾロアークから降り、刹那は銀時と桂の前に行く。

銀時は倒れたままゾロアークのたてがみの中にいる高杉を見る。

「高杉…まるでおまえら、親子みてーだな」

普通に見れば、進化前と進化後のポケモンが一緒にいる。

映画で似たような風景を見たことがある為、銀時はニヤニヤしている。

「おい、刹那。その天パー電気鼠は、ほっとけ。このままでも平気だろ」

明らかに冷やかしている銀時に、本気で治療するなと言わんばかりに高杉が言った。

「いや、平気じゃないから。刹那ちゃんお願い、早くして…！」

「その前に、晋助さんに謝った方がいいんじゃないんですか？」

「あーえつと、悪イ高杉。この前神楽達と『幻影の覇者』観たからつい…」

「銀時…俺には、あれだけポケモン映画を観て、と言いながら貴様も観ているではないか…！」

「うつせえ！おまえ程観てねーよ…！」

「あの…ちょっと静かにしてくれますか？」

刹那は2匹が体の痺れと火傷の痛みで大人しくなるのを待ってから、アロマセラピーを使った。

「あゝ痛かった。…でもまだ痛い」

銀時は尻尾を押さえる。

「俺もまだ体が痺れている…」

「無理をしすぎたんです。アロマセラピーでも、完全に治りませんでした」

「なら、私の村に來い。元々私は、おまえ達を手当てする為に來たからな」

ゾロアークが静かに言った。

「だが…」

「行きましょう、ゾロアークは私達を助けてくれましたし」

「取って食ったりはしないよ」

念を押すように言った。

「それに、余所者は狙われやすいだろう」

「で、どこにあんだ？その村」

銀時が訊いた。

「信用するのか？」

桂は半分、ゾロアークを警戒している。

「まあな、早くこの尻尾どうにかしてもらいてエシ」

「なら、急げ」

ゾロアークは、銀時と桂をたてがみの中に入れる。

「おまえも引つ込んだ方がいい」

肩越しに、たてがみから顔を出している高杉に言った。
仕方なく高杉は、たてがみの中に潜る。

「おまえは抱いて行こう」

刹那を抱くと、銀時が顔を出す。

「おい、何で刹那^{そいつ}は出てるんだよ！」

「毒を受けてたんだ。なるべく空気を吸わせないと」

ゾロアークは歩き出し、森の奥へ進む。

「私の住む村は、ディアルガにもパルキアにも属していない。いわば、反乱者達の住む村だ」

「反乱者…」

「私達はそうは思っていない。ディアルガとパルキア、時と空間はどちらもなくてはならない物だとゆうのに…」

「なくてはならない物…。あの遺跡にも書かれていたな、そうゆうことが」

たてがみから、桂と高杉も顔を出す。

「おまえ達『ハテノ遺跡』に行ったのか？」

「あの遺跡、ハテノ遺跡ってゆうんですか？」

「ああ。あの遺跡は、私達の祖先が作った物だ。……着いたぞ」

ゾロアークは立ち止まる。
辺りは、何も無い。

「何もねエぞ」

すると、霧が立ちこめてきた。
そのままゾロアークは歩く。

「ここだ」

数分歩いた後、ゾロアークは再び立ち止まる。

「ここが村か？」

そこは霧に包まれた、朽ちた廃墟が数件と洞穴が幾つかある村とは
言い難いような村だった。

第8話 霧の村（後書き）

ポケモンになつての最初の夜が訪れます。

第9話 療養（前書き）

タイトル通り、療養です。
ちよつと直しました。

第9話 療養

村に着いた銀時達は、ゾロアークの住んでいる洞穴に來た。入り口はやや狭いが、中は意外と広くつばやビンが幾つかと寢床、釜戸らしき物がある。

「まずは、おまえ達の手当てが先だな」

刹那を下ろし、たてがみの中にいた3匹は自分で出てくる。

「ここにゾロアークは住んでいるのか…」

洞穴の中を桂が見回す。

ゾロアークは包帯とつばを2つ持ってくる。

「一番酷いのは、おまえだな」

銀時の尻尾や体につばから出した薬を塗り、包帯を巻いた。

「おまえ達はこれを食べろ、傷は大したことなさそうだ」

もう一つのつばから、クラブのみを桂にモモンのみを刹那に出す。

「最後はおまえだ」

銀時と同じように、高杉にも右後ろ脚と尻尾に薬を塗り、包帯をした。

「これで大丈夫だ。……だが、2、3日は大人しくしていた方がいい」

「ちょっと辛いな。…ん？痺れが消えたぞ！」

クラブのみを食べ、桂の体の痺れが治る。

刹那も、モモンのみを食べる。すると、体が輝きランドフォルムに戻る。

「どうした？姿が」

「多分、夜になったからだと思います」

洞穴から外を見ると霧が晴れ、日が沈んでいる。

「さて、そろそろ訊いてもいいか？おまえ達は何者だ？無茶な戦い方をして、ディアルガとパルキア、どちらの味方とゆう訳でもなさそうだし」

ゾロアークの疑問は、尤もだ。

4匹は顔をあわせ、頷くとゾロアークに説明した。自分達は人間で、別の世界から来たこと、そして、原因はディアルガとパルキアのせいかもしれないとゆうことを。

「……そうか。人間だったから、あんな戦い方をしていたのか」

「信じるのか？この話し」

包帯を巻いて、伏せた姿勢で銀時は訊いた。

「ああ。おまえ達から、ポケモンの匂いの他に嗅いだことの無い匂いがあった。別の世界から来た人間だとゆうのなら、説明がつく」

ゾロアークは立ち上がり、木の実が沢山入った籠を持ってくる。

「何も食べてないんだろう？ご飯にしよう」

微笑みながら言った。

「おまえ達の傷が治るまで、私は協力するよ」

「マジでか！？」

「それは助かる」

銀時と桂がそれぞれ言う。

「さあ、食べな」

4匹は木の実を食べ始め、ゾロアークも一緒に食べる。しばらくして、木の実は全部無くなった。

「木の実って美味しいんだな」

最後の一口になったマゴのみを口に入れて銀時は呟く。

「よく食べたな。木の実が空になっちゃった。…ちょっと、取りに行ってくるね」

空になった籠を持ってゾロアークは外に出て行く。

「あゝ、昨日の頃は神楽とポケモン観てたのに、なんで次の日にピカチュウになんかなっちゃったんだろっ……」

やたら長く感じた1日が終わり、銀時はぼやく。

「俺だってそうだ。本当なら今頃、『氷空^{そら}の花束』を観ていた筈なのに……!」

「だからてめエは、ポケモン映画観ること以外することねーのか! っーか、観る順番めちゃくちゃだな!!」

銀時と桂のやり取りを見た刹那は高杉の方を見る。

「ポケモンになってなかったら、晋助さん今頃何してました?」

「さあな。……おまえは何してたんだ?」

「私はいつもと同じことをしていたと思います」

時空を観測する仕事をしていると言っていた為、それをしていたのだろう。

…具体的にどんなことをするのかはわからないが。

「時空が乱れてるって言ってたが、この世界もそうなのか?」

「まだ、ちゃんとこの世界を見てないので、はっきりしたことは言えませんが、時空は乱れていると思います」

とは言え、昼があつて夜になるから時は流れているようだ。この日が何日も続いていたら、話は別だが……。

「早く全て元に戻って氷空の花束を」

「うるせエんだよ、さつきから!」

銀時と桂はまだ言い争っている。

「てめエが一番うるせエよ!」

高杉が怒鳴ると、すかさず銀時も言い返す。

「いや、てめエもうるさい! 黙れ!」

「なんだと!?? てめエらが最初に騒ぎ出したんだろうが!」

「あゝもう、止めて下さい! 傷に響きますよ!」

刹那は半分呆れて、しかし騒いでいる3匹を楽しそうに見ながら言った。

「おまえは黙つてろ!」

銀時と高杉が同時に叫ぶ。

「言いましたね! 私はあなた達の体を気遣つて言ったのに!」

言い争いに刹那も加わり、誰が何を言っているのかわかりずらくなる。

それでも4匹は、言い争うのを止めない。

「おまえ達、いい加減にしろ!!」

帰ってきたゾロアークの一言で漸く言い争いは終わり、ポケモンになった者達の最初の夜は更けていった。

第9話 療養（後書き）

ゾロアークとの交流は、まだ続きます。

第10話 ふれあい（前書き）

第9話、言い争いのシーンを間違えてました。

すみません、直し方が上手く出来ないのです、このままにしておきます。

ホントすみません。

第10話 ふれあい

鳥の鳴き声を聞き、銀時は目を覚ます。

「朝か……」

被っている毛布から、顔を出す。

（あれ？ここどこだ？）

一瞬、自分がどこにいるのかわからなかった。
自分の黄色の手を見て、すぐに思い出す。

「そうだ…俺ピカチュウになってるんだった」

目の前には、うずくまって寝ているゾロアークがあり、その近くに毛布を掛けて寝ている桂がいた。勿論、ニヤースの姿で。
その少し離れた所で、包帯をしたゾロア…高杉が同じように毛布を掛けて寝ている。

「もう一眠りするか…」

そのまま毛布に潜り込もうとした時、体に何かが当たる。

「なんだ？」

毛布をめくると、シェイミが寝息を立てて寝ている。

「ぎゃああああッ!!」

その声に全員目を覚ます。

「どうした？」

起き上がりながらゾロアークが訊いた。

「いや、この針鼠が俺の毛布の中に…!」

「ふあゝ…、何でしゅか？銀時さん、私のこと針鼠って。私は刹那でしゅよ……」

寝ぼけているのか、舌足らずな口調で話す刹那。

「そんなこと訊いてんじゃねエ!なんで、てめーが俺んここで寝てんだよ!!」

刹那はキョロキョロと周りを見た。

「あゝごめんなさい。私、寝相が凄く悪いんです」

苦笑いを浮かべ、刹那は毛布から出る。

「ったく。目エ冴えちまった」

「こっちのセリフだ!」

桂と高杉が同時に言った。

「まあ、おまえ達。せつかく早く起きたんだ。一緒に来てくれるか？」

ゾロアークが4匹に言った。

「ディアルガとパルキアについて、わかることがあるかもしれないよ」

「本当か？」

高杉が訊くと、ゾロアークは頷く。

「おまえ達が昨日行ったってゆう、ハテノ遺跡…。あそこには、私達の一族しか読めない字で書かれていることもある。もしかしたら…だけどね」

「それでも、連れて行って下さい。お願いします！」

刹那が言うと、ゾロアークは伏せる。

「では、行くとするか。たてがみに入れ」

「なんで、そんなか入るんだよ」

銀時が不思議そうに見る。

「この村は霧に包まれていて、知らない者が来たら簡単に出入りが出来ないようになってるからだ」

「そうなのか…」

「さあ、入りな」

4匹はたてがみの中に入り、ゾロアークは落ちないかを確かめてから洞穴を出る。

「今日も天気が良さそうだ」

早朝の空を仰ぎ、ゾロアークは村を出て、遺跡へ向かう。

「走るから、少し揺れるぞ」

たてがみの中にいる4匹に言い、走り出す。

「少しどころじゃねーだろ、これ！」

たてがみをしっかりと握り、銀時が叫ぶ。

飛ぶように走り続けるゾロアークは、しばらくしてから止まる。

「着いた、出ていいぞ」

「あゝ…目エ回った」

銀時のみふらつく足取りで出てくる。

「大丈夫か？」

ゾロアークが声を掛ける。

「うん…平気」

あまり大丈夫そうに見えないが、ゾロアークは遺跡に入り、4匹達も着いて行く。

「やっぱり真っ暗ですね」

中に入ってすぐ刹那が言った。

「いや、問題ない」

ゾロアークは、手探りで壁のある場所を叩く。すると、遺跡の内全体が明るくなった。

「お、明るくなった」

「これだ…」

ある壁面をゾロアークが見る。それを4匹も見る。

そこには、見たことの無い文字で書かれた地図があった。

「地図？と、なんだ、この文字は…」

桂は不思議な文字をじつと見る。

刹那も読めないのか、首を傾げている。

「これは『星しるべ』とゆう古代文字だ」

地図を指しながらゾロアークが言う。

そして、説明を始める。

「ここが私の住む村」

地図の真ん中よりを指す。

そこから、左斜め上の島を指した。

「この島の名は『テンガン島』^{とつ}。その島の中心に、『時空の霊峰』^{れいほう}と呼ばれる山がある。そして、その山頂にディアルガとパルキアの住む空間があると言われている……」

「ディアルガとパルキアが……」

「その島の山にいるのか」

銀時の呟きに高杉が続けた。

「だが、海まで行くには何日も歩くし、島の周囲は波がとても荒く、天候も不安定らしい」

「そんなに遠いのか!？」

「神と呼ばれる者が住むだけに、険しい所みたいですね」

「どうする?それでも行くか?」

振り返り、ゾロアークは訊いた。

「俺は行くぞ」

高杉が言った。

「俺には、やることがある。その為にも、何がなんでも元に戻らなきゃならねエ。…どれだけ掛かってもな」

銀時と桂は、高杉をじつと見る。

「理由は違うが、俺も元に戻りてエし、遠くても行つてやるよ」

「俺もだ。海だろうが山だろうが行つてやる」

銀時と桂が言うと、刹那も頷く。

ゾロアークは「そうか」と答える。

「私の知り合いに、テンガン島まで行くことの出来る者を探してみる。これは、大きな手掛かりだからね」

「他に何か書かれていませんか？」

「無い。この地図とその説明だけだ。…帰るか？」

4匹は頷き、出て行く。最後にゾロアークは、壁を叩いて明かりを消し、外に出る。

「ところで、傷の具合はどうだ？」

「ああ、だいぶ良くなってきた」

銀時は尻尾を軽く動かす。

「この近くに、治癒効果のある温泉がある。テンガン島に行くなら、

万全な状態で行った方がいいだろう。行くか？」

「え、マジで？行く！」

尻尾を早く治したいのか、銀時が真っ先に言った。

「おまえも行った方がいいんじゃないか？」

桂は高杉に訊いた。

「その後ろ脚と尻尾、凍っていたんだろ？」

「この位は平気だ」

「いや、ポケモンの技を人間が受けると副作用が起きると、言い伝えにあった。人間に戻ったら、その後ろ脚が動かなくなるかもしれないぞ」

高杉は、肩越しに自分の後ろ脚を見る。すると、ゾロアークに掴まれる。

「おい！」

「これから、歩き続けるんならしっかり治しとけ」

そう言いながら、たてがみの中に入れようとする。

「入れるな、自分で歩く！」

ゾロアークの手を振りほどき、地面に着地する。

「そうか？なら、行くか。こっちだ」

数分歩き、温泉特有の硫黄の匂いがしてくる。

「あそこだ」

森の中に、天然の露天風呂が見えた。

「傷をあてるより、全身を浸けた方が効果がある」

「そうか、よし！」

「ただし、包帯は外して入れよ」

そのまま入ろうとする銀時を、ゾロアークがすかさず言った。

「なんだよ……」

銀時は尻尾の包帯を、高杉は後ろ脚と尻尾の包帯を外す。

「やっぱり、左目の包帯は外さないんだな」

温泉にそのまま入っていく高杉を見て、ゾロアークは呟いた。

（訊かれたくないようだし、そっとしておこう……）

温泉に入ろうとした時、ゾロアークは上を見た。
同じ村に住む、ヨルノズクが近くの木にいる。

「ヨルノズク、ちょっといいか？」

うたた寝していたヨルノズクは、ゾロアークの声を聞き、目を開ける。

「ゾロアーク？何か用？」

「うん。ちょっと手紙書くから、それを届けてもらいたいんだけど」

「宛先は？」

「『流星の山』」

宛先を聞き、ヨルノズクは顔をしかめる。が、すぐに引き受ける。

ゾロアークは、大きめの葉っぱに樹液を使つて、手紙を書いた。

「星しるべを使つてことは、あの人宛か……」

「読むなよ」

「オレは、星しるべ読めないんで」

「そうだったな。…じゃあ、頼むぞ」

手紙をヨルノズクに渡すと、口に加え、飛び立っていった。

「さて、私も入るとするか」

ゾロアークが温泉に入った時だった。

「おい、さつきから刹那が動かないぞ」

温泉に浮いている刹那を銀時が指差す。

「あれのぼせてるんじゃないのか!？」

桂は急ぎ、刹那に寄る。

案の定刹那は、のぼせており真っ赤になっていた。

「しっかりしろ、刹那! 銀時、高杉おまえ達も手伝え!」

「刹那は軽いんだから、おまえ一人で運べるだろ」

「そうだぞゾラ。ランドフォルムのシェイミは結構軽い部類のポケモンだ。おまえがやれ、おまえが」

「貴様らアア! 何俺一人にやらせてるんだアアツ!」

「あゝ、私も『はなはこび』するでしゅゝ…」

「まずい! 謔言を言ってる」

桂はすぐに刹那を引き上げ、熱を冷まさせる。

ゾロアークは葉っぱで扇ぐ。

「そついや、おまえはいつまで入ってんだ?」

桂達を見ながら、銀時は高杉に訊いた。

「俺のは、凍傷だ。しばらく入ってれば治るだろ。…そつゆつてめ

「エもいつまで入ってたんだ？火傷なら早く出る」

「うっせエ、俺の勝手だろ。つか、おまえが出る」

「おまえが出たらな」

「俺だって、おまえが出てから上がるよ」

「さっさと上がれ、電気鼠」

「おまえが上がれ、包帯狐」

「何時までやってる気だ。早く上がれ」

ゾロアークが2匹を掴んで出す。

2匹の体は、熱くなっており、のぼせる一歩手前だったとか……。

第10話 ふれあい（後書き）

ポケスの用語をいくつか入れてみました。
テンガン島の由来は、テンガン山です。
ついでに、ハテノ遺跡は『時を越えた遭遇』のハテノ村からです。

第11話 流星の山（前書き）

もう映画やらゲームやらで活躍したポケモンだらけです。

第11話 流星の山

温泉から上がり、休憩をした後、ゾロアークと4匹は村へ戻った。

「うゝ、体がポカポカしてますー」

「のぼせるまで入ってたんだから当然だろ」

たてがみから出た刹那に銀時が言った。

「銀時さん達だったのぼせそうになってたって、小太郎さん言っていましたよ」

ムツとした様子で、刹那は言い返す。

「ツラの野郎、余計なことを…！」

銀時と刹那のやり取りを聞きながら、ゾロアークは洞穴に向かう。すると、入口にヨルノズクが立っているのが見えた。

「ヨルノズク！」

「届けてきたよ、ゾロアーク。返事も貰ってきた」

ヨルノズクは返事の手紙である葉っぱをゾロアークに渡すと、飛んでいった。

「どれ…」

手紙を広げると、やや長い文章が星しるべで書かれている。

「……そうか」

読み終わり、手紙を畳む。

「おまえ達！」

ゾロアークは4匹を呼んだ。

「なんだ？」

「明日、『流星の山』に行く。『テンガン島』まで案内してくれる者に会いにな」

「マジでか!？」

「流星の山とは、どこにあるんだ？」

驚きの声を上げる銀時とは逆に、桂は冷静に場所を訊く。

「流星の山は、この村から東にある山だ。歩いて行くと1日掛かるから、朝迎えが来ることになってるよ」

「島まで案内するのは誰だ？」

相手がポケモンだとゆうのはわかっているが、高杉はどんなポケモンが来るのか気になった。

「それが、わかんないんだよ。現地に着かないと」

手紙には、誰が案内をするとは書かれていなかった。

「アブソルめ、重要なことを省いて…！」

「手紙の相手ってアブソルか？」

アブソルは自然災害を予知する能力を持つ長命のポケモンだ。

「私の昔馴染みで、兄とも師とも言える者だ」

最後の言葉に、銀時は反応する。

ゾロアークは遠い眼差しをし、微笑んだ。

（もうどれだけ会ってないだろう…）

「明日は、早いから準備しておけ」

「嬉しそうな顔をしているな、ゾロアークは」

ゾロアークの表情の変化を見て、桂は呟く。

「そうだな…」

羨望と寂しさの混じった表情で銀時は答える。

同じ頃、流星の山の山頂からアブソルは西の方向をじっと見つめていた。

「ゾロアークに… なったんだな。… 俺も早く会いたいよ」

アブソルの手元には、ゾロアークの手紙が広げてあった。

次の朝。

「うわッ!？」

この日は、高杉の声に全員が目覚めます。
見ると、高杉の背中に刹那がしがみつくようにして寝ている。

「今度は高杉の所に行ったか」

今日は自分の所にいなくて良かった、と思いながら銀時は高杉を見る。

「おまえ、早く降りろ!」

「うーん、晋助さんの首のがふわふわ…」

「寝ぼけるな、起きろ!」

高杉は刹那を振りほどく。

刹那は落ちると、漸く目を覚めます。

「あれ？私、落ちた？」

状況がわからず、刹那は周りを見る。

「起きたか？おまえ達」

洞穴の入口から、ゾロアークが顔を出す。

「迎えが来た、急げ」

外に出ると、ラティアスとラティオスがいた。

「この2人が、流星の山まで連れて行ってくれるよ」

「おお、ラティアスとラティオスだ……！」

ポケモンになる前の日に『水の都の護神』まもりがみを観ていた桂は興奮気味だ。

「おまえ達は軽いから、私が支えるよ」

刹那と桂を抱えると、ゾロアークはラティオスに乗る。

「あなた達は、私に乗って！」

ラティアスは体を低くし、銀時と高杉の前に行く。

「よし、俺前に」

「なんででめエが前に行くんだ！」

「今は、俺の方が小せエんだ。バランス考えろ！」

「何がバランスだ！てめエは単に前に行きてーだけだろ！」

「どっちでもいいから、早く乗って」

そのあと、仕方無くじゃんけんで決め、高杉が前に乗ることになった。

「あ、ホントにおまえの首の毛、ふわふわしてる」

後ろになった銀時は、高杉の紺色のたてがみに顔をうずめる。

「離れろ！くつつくな！！」

「そろそろ行くぞ」

ラティオスはそう言うと、飛び立つ。
ラティアスも続いた。

「テンガン島に行くのは、おまえ達か？」

ゾロアークは、飛ぶラティオスに訊いた。

「いや、僕達じゃない。テンガン島までの空と海は、僕達の力じゃ飛ぶことも泳ぐことも出来ない」

「じゃあ、どうやって行くんですか？」

重要な所がわからず、刹那が訊く。

「着いてから言っつてアブソルが言ってた」

「あいつめ……」

ゾロアークは呆れ顔をする。

そんな姿を銀時は見つめた後、高杉のたてがみに再び顔をうずめる。

「おい、いい加減にしろ」

「ふわふわ……」

「人間に戻ったら、真っ先に斬ってやる」

「見えた」

ラティオスが遠くに見える岩山を見て言った。

「あれが流星の山よ。夜になると、流れ星がよく見えるの！それが山の由来なんだけどね」

ラティオスとラティオスは、山にある洞窟の前でゾロアークと4匹を下ろした。

「来たか」

洞窟からアブソルが出てくる。

「久しぶりだな、アブソル……」

「おまえも、大きくなったな」

口数は少ないが、ゾロアークとアブソルは再会を喜んでいる。

「早速だが、テンガン島までの行き方を」

「まあ待て。その前に、会わせたい奴がいる」

アブソルの言う、会わせたい奴にゾロアークは心当たりがあった。

「おい、まさか…」

「とりあえず、中に入れ」

アブソルに案内され、全員洞窟の中に入る。

そのまま地下へと進み、松明の焚かれた広間に通される。

「最後に会った時と変わらないよ」

アブソルはゾロアークにそつと言った。広間には、寢床のような所があり、誰かが寝ている。

近くに行き、眠っている者を見る。

「おまえも、久しぶりだね。ジラーチ」

ジラーチは1000年に一度、7日だけ目覚めるポケモンだ。

本来、眠っている間は紫色の繭の中にいるのだが、このジラーチは体に付いている羽衣のような物を巻いているだけだ。

「本当なら、あと320年したら目を覚ますけど、最近は数年から数十年に一度少し目を覚ますよ」

「なんで…繭に入っていないんですか？」

繭に入っていないことを疑問に思い、刹那が訊いた。

「繭には入っていたよ。でも、500年前から続くディアルガとパールキアの争いのせいなのか、繭から出てきてしまったんだ」

「やっぱり、時空が乱れていたのね」

「最後に会ったのは、私がゾロアだった時だ」

ジラーチを撫で、ゾロアークは呟く。

「たった2回しか会ってないけど、また会いたいよ…」

その時だった。

外から、大きな音が聞こえたのは。

「なんだ！？今の…」

刹那は目を閉じ、波導を見た。

そこには、山に攻撃をするヨノワールとその攻撃を防ごうとするフライゴンの姿があった。

第11話 流星の山（後書き）

もうすぐ、ゾロアークとお別れです…。

第12話 ヨノワール襲撃（前書き）

今回、ポケモンになった4匹があまり登場しません。
ジラーチ争奪戦スタート！

第12話 ヨノワール襲撃

「外で、ヨノワールとフライゴンが戦っています!」

刹那は目を開けて言った。

「フライゴン?あのビブラーバのことか?」

ゾロアークはアブソルに訊くと、「そうだ」と答えた。

「ラティアス、ラティオス。おまえ達はジラーチを連れて、裏から逃げる。ヨノワールの狙いは、恐らくジラーチだ」

そう言うのと、アブソルは走り、外に出て行く。

「アブソル!」

ゾロアークも後を追おうとする。

「ゾロアーク、俺も行くぞ!」

桂が言うと、ゾロアークは立ち止まる。

「駄目だ。おまえ達は、傷が治ったばかりだ。行かない方がいい」

「でも、さっき波導で見た時あのヨノワール、凄く強い悪意の力がありました。大勢で行った方がいいと思います!」

ゾロアークは刹那をじつと見た後、仕方無いとゆう顔をする。

「無理な戦い方はするなよ」

「わかっている」

桂は答え、外に向かう。成り行きで、他の3匹も一緒に行く。

「くっ…。ここから先は通さない！」

苦戦しつつも、フライゴンはヨノワールに攻撃を続ける。

「りゅうのはどう…！」

「シャドーボール！」

2つの技がぶつかりあい、爆発が起きる。
これで何回目だろう。力の差は歴然だった。

（私が…私がやらなきゃ…！）

「すなじごく！」

砂嵐を発生させ、ヨノワールを閉じ込める。

「エアカッター！」

風の刃をぶつけ、距離を取る。
が、すぐに打ち破られる。

「随分とぬるい攻撃だな。今のが本気か？」

フライゴンは舌打ちをする。

「攻撃とは、こつやるものだ!!」

威力のある、あくのはどうを放つ。

フライゴンが身構えようとした時、目の前に白い影が現れる。

「あくのはどう」

眩きと共に、同質のあくのはどうを放ち相殺する。

「『流星の番人』か…」

「アブソル！」

ヨノワールとフライゴンの前に立ったアブソルをそれぞれ見る。

「おまえの目的はなんだ？ヨノワール」

「分かっているのだろう？ジラーチだ」

「やはり…!!」

「ジラーチの能力を使い、パルキアを倒し、ディアルガ様をただ一人の神にする為に……!!」

「ジラーチは、この数年目を覚ましていない。何時目覚めるかは、

俺でも分らない」

「だが、稀に1日だけ目覚める時があるのだろうか？」

その言葉にアブソルとフライゴンは反応する。

「何のことだ？」

「惚けても無駄だ、調べはついている。…さあ、ジラーチを渡してもらおうか」

「そこまで知っているなら、余計渡す訳にはいかないな」

「あんたはここで、私達が倒す！」

アブソルとフライゴンはヨノワールに向き合う。

「ならば、力づくで奪う！！」

ヨノワールはシャドーパンチをフライゴンに放つ。

「うぁッ…！！」

先程からのダメージの蓄積もあり、フライゴンは倒れてしまう。

「フライゴン！」

「よそ見をしているのか？」

ヨノワールの声を間近に聞き、アブソルは素早くみずのはどうを打

っ。

「こんなもの……、む？」

視界がぼやけ、物がよく見えなくなる。

「くっ…混乱か」

みずのはどうの追加効果が発動したようだ。

「あくのはどう！」

ヨノワールにあくのはどうを叩き込む。

「アブソル！大丈夫か！？」

洞窟から、ゾロアークと4匹が出てくる。

「誰に物を言っている。それより、フライゴンが倒された。頼む」

「分かった」

ゾロアークはフライゴンを担ぎ、安全な場所に運ぶ。

「ゾロ…アーク？」

「久しぶり。でも、話は後だ」

少し離れた所に運び、アブソルの隣に行く。

「なんでガキ共までいるんだ」

「連れてって欲しいって言われて、根負けした」

「まったく、昔のおまえみたいだな」

呆れながらも、アブソルは小声で言った。

「奴の弱点は悪とゴースト。おまえのナイトバーストと俺のあくのはどつがあれば勝てるだろう」

「分かった」

「くっ、舐めるな!!」

ヨノワールはアブソルにがんせきふうじ、ゾロアークにチャージビームを出す。

「ちっ…!!」

「アブソル、私が奴の近くでナイトバーストを放つ。引き付けてくれないか？」

「ああ、慎重に行けよ」

頷いた後、アブソルは角を光らせ、かまいたちを放つ。砂煙が上がり、ヨノワールは腕で顔を覆う。

「はあアアアッ!!」

砂煙の中からゾロアークが現れる。

「ナイトバースト！」

ヨノワールの目前で、ゾロアークはナイトバーストを放った。

「どうだ！」

「…な、なかなかの威力だな」

息を上げさせ、ふらつきながらもヨノワールは立ち続ける。

「だが、私は倒せんぞー！」

叫び、かわらわりを出す。

（まずい、避けきれない…！）

そう思った時、ゾロアークの体が消え、ヨノワールの攻撃は空振りになる。

「な…！？」

「大丈夫か？」

ゾロアークはラティオスの背中にいた。

「ラティオス…おまえ…」

「かわされたか…」

ヨノワールが呟いた時、体にマジカルリーフが当たる。

「よし、当たった」

刹那が少し前に出る。

その後ろに、ジラーチを抱いたラティアスがいる。

「おまえ達！逃げると言っただろ！！」

アブソルが言うと、ラティオスは答える。

「僕達だけ逃げることは、出来ない。僕達も戦う！」

「何匹集まろうとも無駄だ！」

ヨノワールは辺り一帯にナイトヘッドを放つ。

「きゃっ！」

「やりやがったな！」

銀時はヨノワールに向かって走り出す。すると、徐々に電気を纏い始める。

「あれは、ボルテッカー！？」

アブソルは驚きの表情を見せる。
銀時はそのまま突進した。

「ぐあッ!!」

「ナイトバースト」

低い声に振り返ると、両前脚を赤く光らせた高杉がいた。
高杉はヨノワールの顔面にナイトバーストを放った。

「高杉：おまえもゾロアークの技、使えたのか？」

「見様見真似でやったら出来た。それより、おまえこそさっきの技はなんだ？」

「知らね。走ってたら、いきなり電気が出た」

「貴様らアッ!!」

ヨノワールは、血走った目で睨みつける。

「遊びは終わりだ!」

ヨノワールは辺りにあくのはどうを放つ。
周りにいた者は、全員吹き飛ばされる。

「ジラーチを寄越せエエッ!!」

「させるか!!」

ゾロアークが飛びかかる。

「邪魔だ!!」

ヨノワールはきあいパンチを出す。

その瞬間、2匹の間にアブソルが割り込み、ゾロアークの楯になる。

「アブソル！」

ゾロアークはアブソルに駆け寄る。

「ジラーチは頂くぞ」

サイコネシスを使い、ラティアスからジラーチを奪い取る。

「ジ、ジラーチ…」

アブソルは立ち上がろうとするが、倒れる。

「離しやがれ!!」

銀時も飛びかかるが、サイコネシスで動きを止められ、そのまま投げ飛ばされて高杉にぶつかる。

「これで、ディアルガ様が勝つ…!!」

ヨノワールはジラーチを片手に高笑いをする。

「……ん？」

その声のせいなのか、ジラーチが目を開けた。

第12話 ヨノワール襲撃（後書き）

銀時と高杉に大技使わせたけど、桂もといニヤースは凄い技とか無いから、ツラからクレームがきそつです。

第13話 ジラーチの目覚め（前書き）

ちよつと長かったな…。

やっと、半分くらいになりました。

第13話 ジラーチの目覚め

『ジラーチ、今日から俺がおまえを守っていくからな』

アブソルと初めて会った時だ。

この時ぼくは、一緒に遊ぶお兄ちゃんが出来たみたいで嬉しかった。

『私とおまえは、ずっと友達！私が大きくなっても、…いなくなっても…ね』

これはゾロアと最後に会った時のだ。

縁起でもないこと言うなって、ビブラーバが笑ってたっけ……。

「…うん」

ヨノワールに掴まれたままジラーチは目を覚ます。

「ジラーチが…」

「起きた…！」

アブソルが呟いた後をヨノワールが続けた。

「だーれ？」

ジラーチは、自分を掴むヨノワールに訊く。
状況が分かっていないようだ。

「遂に目覚めた…！これで我らの、ディアルガ様の勝利だ！！」

ヨノワールは、ジラーチの声を無視し、目的を達成出来たことに喜んでいる。

ジラーチは訳が分からず、周りを見る。すると、倒れているアブソルとその近くにうつ伏せになったゾロアがいた。

「アブソル…ゾロア……？」

呟いた時、ジラーチの姿が消える。

「なっ…！？」

離れた所で、ジラーチを抱えた桂がいた。

「物では無いが、どろぼうさせてもらったぞ」

「貴様……ッ」

「アブソル…、ゾロア…！」

桂に抱えられたまま、ジラーチは泣きそうな声を出す。

「離して、ぼくのお兄ちゃんのアブソルと友達のゾロアが…ッ！！」

倒れている高杉を友達のゾロア、現ゾロアークだと思っているジラーチ。

「落ちてけジラーチ。お主の兄、アブソルと友のゾロアを傷つけた

のは、あいつだ!!」

桂はヨノワールを指差す。

その前に高杉を敢えてゾロアと言ったが…。

「アブソルとゾロアを…?」

それを聞き、ジラーチの目つきが鋭くなる。

「許さない!」

ジラーチは桂から離れると、ヨノワールの前に出る。

「アブソルとゾロアを傷つけて…。ぼくは、おまえを許さない!!」

「おまえごときに何が出来る? おまえは、我々の為に働いてくれればいいのだからな」

「ぼくを物扱いするな!」

両手からエナジーボールを出し、ヨノワールにぶつける。

「ジラーチ、そいつはおまえを狙ってる! 早く逃げろ!!」

ゾロアークに支えられながら、アブソルが叫ぶ。

「いやだ! アブソルやゾロアをこんなにした奴を許せない!!」

「ジラーチ……」

「あいつ…。あそこにいるチビをおまえと勘違いしてるな…」

ゾロアークは倒れている高杉を見て、複雑そうな顔をする。

「この山から出てけーっ！」

目を一瞬光らせ、でんげきはを打つ。

「こんな技が効くか！！」

ヨノワールはでんげきはを弾き、ジラーチを掴む。

「うわっ！」

「手こずらせおって」

「ジラーチ！」

ジラーチはアブソルの方を向き、ふっ、と笑った。

「何が可笑…ぐはアッ…！」

ヨノワールに強い衝撃波が当たる。

ジラーチは、その隙に逃げ出す。

「はめつのねがい…。何時の間に…！」

「あの時だな…」

アブソルが呟くと、ゾロアークも頷く。

「でんげきはを打つ瞬間に放っていたな」

「銀時、起きろ！高杉は…起きなくていいか」

2匹に駆け寄り、桂が言う。

「てめエヅラ…、起きなくていいってどうゆうことだ…！」

顔を上げた高杉は、不快そうに言った。

「いや、それがな、ジラーチがおまえを友達だったゾロアと勘違い
していてな…」

勘違いさせた原因が自分にもあるとゆうことに桂は気付いていない。

「それより、どうすんだ！？ジラーチ一匹で！」

ヨノワールと対峙するジラーチを銀時は見る。

「大丈夫。ぼくに任せて」

ジラーチは振り返り、銀時に言う。

再びヨノワールに向き直ると、ジラーチの体が輝き始める。

「なんだ？何をする気だ…！？」

ヨノワールは身構える。

ジラーチは両手を天に向けた。

「りゅうせいぐん!!」

空に向かって光の球を打ち、そこから無数の光弾がヨノワールに降り注ぐ。

「ぐあアッ!!」

「そのまま…!!」

頭にある水色の短冊が光る。

「どっか行けーっ!!」

次の瞬間、ヨノワールの姿が消える。

「瞬間移動させたか…」

ふらつく足取りで、アブソルが近くに来る。

「ヨノワール、どこにいったんですか？」

刹那が訊くと、ジラーチは笑った。

「この山からずっと離れた海に落としてやったよ!!」

「見かけによらず、随分大胆なことしたな」

銀時が呟くと、「当然の報いだよ!!」とジラーチは答える。

「ジラーチ…」

傷つきながらも、フライゴンが飛んでくる。

「え？誰…」

「私よ。ビブラーバだよ」

「え！？ビブラーバ？」

「あなたが眠った後で、私とゾロアは進化したの」

「じゃあ、あそこにいるゾロアークがゾロアだったの？」

「ああ、そうだ。おまえ、ずっと勘違いしてたぞ」

やや呆れながら、アブソルが言う。

ジラーチはゾロアークの前に飛んで行く。

「ごめんね、ゾロアーク。久々だったから分かんなかったよ」

「いや、気にしないでいい。それより、おまえの能力で、みんなの傷を治してくれないか？」

「うん。分かった」

ジラーチは目を閉じ、手を合わせる。

（ねがいごと）

白い光が輝き、全員の傷が癒えていく。

「これで大丈夫だよ！」

「すげーな。傷が治ってる」

「ジラーチは『ねがいごとポケモン』。どんな願いも叶えることが出来ると訊く」

「それだ！」

桂が言ったことを銀時が指した。

「ジラーチ！俺達を今すぐ人間に戻して、元の世界に帰してくれ！」

銀時が叫ぶと、事情を知らないポケモン達が「え！？」「人間？」と、口々に言う。

「そうだ、テンガン島までの行き方！それを訊こうとしたんだ」

ゾロアークは、当初の目的を思い出す。

「あなた達、人間だったの？」

「別の世界から来たって本当か…？」

「どうして、ポケモンになっちゃったの？」

ラティアス、ラティオス、フライゴンがそれぞれ言った。

「知らねーよ！」

「朝起きたら、こうなっていた」

「早く人間に戻して、元の世界に帰せ。それから、その世界をぶっ壊せ」

銀時と桂が話している間に、高杉がジラーチに言う。

「あーてめ、勝手に…！」

「分かった」

「ジラーチ、止めろ…！」

桂は止めようとするが、ジラーチは目を閉じ、短冊が光る。

「てめエ、なんてことしやがんだ…！」

銀時は高杉に詰め寄る。

高杉はニヤリと笑う。

「言った筈だ。俺は全てをぶっ壊すつてな。おまえらも、人間に戻れるんだから別にいいだろ」

「てめエ……！」

「あれ…？」

ジラーチは目を開ける。

「ごめんね。その願い、叶えられない」

「何…!？」

「^{ちから}ぼくが何かに邪魔されて、どっちの願いも叶えることが出来ない」

人間に戻ることは出来なかったが、元の世界の危機は回避することが出来た。

「とりあえず、てめーの野望は止められたな。……人間には戻れなかったけど」

「それより、島への行き方だ」

ゾロアークは、銀時達のやり取りを聞いておらず、アブソルと話している。

「どうやって行く気だ？」

「ルギアやカイオーガに頼むつもりだったが、ジラーチが目覚めたんなら、ジラーチに頼もうと思ってる」

「ジラーチね。それなら、安全か」

ゾロアークは空を見る。

日は傾き、夕闇が訪れる。

「ほら、流れ星！あそこにも！」

ラティアスは、いくつも見える流星を楽しそうに見る。

「流星の山の由来は、流れ星が沢山見えることだけど、りゅうせいぐんを使うジラーチがいることが一番の理由なの」

ラティアスとラティオスの隣で、フライゴンが説明する。

「島には、何時行く？」

アブソルが訊くと、銀時が答える。

「行けるなら、すぐに行く」

「そうか……。時空の霊峰^{れいほう}は、様々な時が入り組んだ山だと聞いたことがある。例えば、一部分が夏だったり冬だったり……。あるいは、時間が止まっていたりするらしい」

「神の住む山らしいな」

桂が呟いた。

「おまえ達が挑むのは、神と呼ばれる者達だ。一筋縄では、いかないぞ」

4匹は頷く。

「私は一緒に行くことは出来ないけど、おまえ達が必ず元に戻る
と信じている」

ゾロアークはそう言うと、葉っぱで出来た袋を出す。

「中に薬とかを入れておいた。持っていけ」

「ありがとうございます」

袋は刹那が受け取る。

「準備はいい？」

ジラーチが訊いた。

「ゾロアーク、色々と」

「礼はいい。気を付けてな」

桂の言葉を遮り、ゾロアークが言った。

「ちゃんと寝てないから、頂上には連れて行けないけど、なるべく高い所に送るね」

ジラーチは目を閉じ、短冊を光らせた。

次の瞬間、4匹の姿は消えた。

「行っただか…」

「寂しいか？」

アブソルはゾロアークに訊いた。

「少し…ね」

ゾロアークはテンガン島のある方向を見つめた。
そして、小声で言った。

「さようなら。元気だな……」

第13話 ジラーチの目覚め（後書き）

りゅうせいぐんを使うジラーチ。

去年配信されたので、持っている方もいると思います。

私も、持っています。

次回、遂にテンガン島に上陸！

第14話 テンガン島（前書き）

ちょっと短いです。

この後から、話が重くなります。

少し直しました。

第14話 テンガン島

山道の上らしき所に、4匹は現れた。

「ここがテンガン島…」

銀時は辺りを見回す。

「いや、時空の霊峰だろう」

桂も辺りを見て言った。

立っているのは、山道。眼下には、荒れた海と荒れ地のような島。

そして、背後に聳える大きな山……。

そこは、紛れもなく時空の霊峰だった。

「この上に、ディアルガとパルキアがいるのか…」

雲の掛かった山頂を見上げ、高杉は呟く。

「とにかく、山頂^{さんてい}を目指しましょう」

刹那は袋を背負い、歩き出す。

「ジラーチが願いを叶えていたら、俺は元に戻ってすぐおまえを斬った」

桂は歩きながら、高杉に言う。

「俺もだ。どさくさに紛れて言いやがって」

銀時と同じように言った。

「願いを叶えるポケモンがいるんなら、俺の願いは、ただ一つ。
…壊すだけだ」

歩きながら肩越しに振り返り、高杉は答える。

「壊して…どうするんですか？」

立ち止まり、刹那は訊いた。

「全部壊して、何になるんですか？そんなことをして、何かになる」

「黙れ！！」

高杉は刹那を睨み付ける。

「てめエには、関係の無いことだ。知ったような口利くんじゃねエ
…！」

「刹那、もうよせ」

桂は刹那を止めようとするが、尚も食ってかかる。

「確かに、私には関係の無いことです。晋助さんが何をしようと、
私かとやかく言う資格はありません。…でも、全部壊して何になる
の？って訊いてるんです。虚しさだけが残るんじゃない」

「それ以上…言うな!!」

爪を刹那の喉元に向ける。

「高杉、止める!!」

「止めないで下さい。銀時さん」

刹那は上目遣いで高杉を見つめる。

「私を殺したければ殺して下さい。それで晋助さんの気がすむんなら」

爪を向けたまま、高杉は刹那をじっと見る。

「でも、その前にやる必要があります。全てが終わったら、この命…あなたの好きにして結構です」

「その言葉…忘れんなよ……」

高杉は爪を下げ、歩き出す。

「刹那…おまえ…」

「何で、あんなこと言っただ…!!」

桂と銀時は刹那に詰め寄る。

刹那は答えずに、歩く。

（刹那の奴、会ってそんなに経ってねエのに何であそこまで言った

んだ…)

銀時はふと考え、刹那を呼び止める。

「…何ですか？」

「おまえ…、どこかで会ったりしなかったか？」

その一言に刹那は勿論、桂と高杉も反応し、立ち止まる。

「どうしてそう思うんですか？」

振り返り、首を傾げる。

「私があなた達と会ったのは、一昨日が初めてです。それに、知っていれば名前を訊いたりはしませんよ」

「確かにそうだが…」

「そーいや、おまえ。名前乗った時、刹那としか言わなかったな。名字なんて言うんだ？」

フルネームなら、何か分かると思い高杉が訊いた。

「名字ですか？おいかわ及川です。及川刹那ってゆうんです。私の名前」

おいかわせつなとゆう名前を訊いたが、3匹にその名の心当たりは無い。

「聞いたことねーな。そんな名前」

「銀時、おまえの勘違いじゃないのか？」

「それより、早く先を急ぎましょう。暗くなってきましたし」

この島にも、夕闇が迫ってきた。
夜の山道は、危険が多くなる。

「…ここに来るな…」

どこからか、低い声がした。

「誰だ！」

桂が叫ぶと、山道に黒い影が現れ、不規則に動いた。

「なんだ、あれ！？スタンドか!？」

「だから、何ですか？それ…」

不規則に動く影は、4匹の数メートル前で止まり、姿を現した。

「ここから、立ち去れ」

それは、あんこくポケモンと呼ばれるダークライだった。

第14話 テンガン島（後書き）

刹那ちゃんについて、軽く触れました。
次回、ダークライが出現します！

第15話 ダークライ（前書き）

今更かもしれませんが、この小説の略称を神氷空^{かみそら}にしようと思います。

今回は、バトル中心になってます。

第15話 ダークライ

「なんだあ、あの真っ黒な奴」

銀時は現れたダークライをじっと見つめた。

「気を付けて下さい。あれは、ダークライ。眠らせて、悪夢を見せるポケモンです」

「ここから、立ち去れ。おまえ達のような者が来ていい所ではない」

ダークライが警告をする。

「そーはいかねエよ。ディアルガとパルキアぶっ飛ばすんだから」

銀時が言うと、ダークライは表情を変える。

「ディアルガ様とパルキア様をぶっ飛ばすだど…！？ならば、ここで排除する！！」

ダークライはあくのはどうを放つ。

4匹は、それぞれ避ける。

「食らえ！」

銀時は10まんボルトを、桂はつばめがえしを出す。

2つの技は、どちらもダークライに命中する。

「ちっ…！この先には、行かせん！！」

あやしいかぜで、吹き飛ばそうとする。

「俺には、利かん！」

ゴースト技であるあやしいかぜは、ノーマルタイプには利かない為桂は、ダークライに突っ込み、ひっかいた。

「そこを退きやがれ！てめーの相手をしてる暇はねえんだよ！！」

銀時が叫ぶと、ダークライは立ちはだかるように両脚を出す。

「ディアルガ様とパールキア様を護るのが、私の役目。誰であろうと通す訳にはいかない！！」

両手から、黒い球を幾つも放つ。

「ダークホールです！あれに当たったら、眠ってしまいます！！」

背負っている袋を投げ捨て、刹那はかわす。

「じゃあ、当たらないようにするしかねえってことか！？」

ほうでんを使い、ダークホールを消しつつ銀時は攻撃をする。

「銀時！だから、ほうでんは止める！！」

あちこちに電撃が飛び、桂が避けながら叫ぶ。

「かき消されたか。なら、これならどうだ!」

ダークライはここえるかぜを放つ。

ここえるかぜは、刹那に当たってしまい、動きが鈍くなる。

「うゝ冷たい…」

「刹那…!」

高杉は、思わず刹那に駆け寄る。

「よそ見をしていていいのか?」

でんこうせつかで、ダークライが間近に迫っていた。

「よそ見してんのは、てめーだアアツ!」

銀時がダークライの頭上に現れ、そのままいわくだきを打ち込む。

「ぐあツツ!」

ダークライは地面に叩きつけられる。

「おまえ…」

着地した銀時を、何か言いたそうに高杉が見る。

「最初に言っただろ。てめーを斬るのは、人間に戻ってからだって…刹那も、元に戻るまで協力しようって言ってたじゃねーか」

「そうですけど…」

「それを、てめエは勝手に破りやがっ」

「みんな避ける!!」

桂の声に振り返った時、ダークライがダークホールを放っていた。

「ちっ…!!」

銀時と高杉は避けられたが、刹那は避けることが出来なかった。

「刹っ」

「刹那アッ!!」

刹那の前に銀時が飛び出す。

刹那を庇った為、銀時はダークホールを受けてしまう。

「銀時!!」

「銀時さん!!」

黒い光に包まれてすぐ、銀時は倒れる。

「よそ見をしたな」

ダークライが不敵に笑う。

「銀時、しっかりしろ!!」

「起きて下さい！」

眠った銀時は、目を覚ます気配がない。

「そうだ。アロマセラピー！」

刹那はアロマセラピーを使うが、銀時は目覚めない。

「そんな…！どうして？どうして、アロマセラピーが利かないの！？」

「私のダークホールは、そんな技で解くことは出来ん。そいつは、永遠に悪夢を見続ける…！」

ダークライが言った瞬間に、銀時は呻き声を上げる。

「…ぐッ…。…れ、だ……」

「貴様アアツ…！」

桂はダークライに飛びかかり、エナジーボールを放つ。

「何っ！？」

透かさず、10まんボルトを出し、刹那達の近くに行く。

「おまえ、あんな技使えたのか？」

本来使うことの出来ない技も使った為、高杉が不思議そうに見た。

「ねこのてを使って出したただだ。何が出るか、博打のような技だ」

刹那の足下に眠る銀時を見下ろす。

うなされているせいか、呼吸が荒く、汗が滲んでいる。

「とにかく、奴を倒すことが先決だな」

「ダークホールが厄介です。だから……」

刹那は、桂と高杉にある事を言った。

「…なら、問題ねエな！」

「アロマセラピーが利かなかったんです。上手くいくか、わかりませんけど」

「それでもいい。一か八か、その手でいくぞ」

走り出そうとする桂に、刹那が呼び止める。

「その前に、銀時さんに攻撃がいかないように移動させましょう」

刹那だけでは引きずってしまふ為、高杉と桂も一緒に運ぶ。

「先に行く」

銀時を移動させてすぐ、高杉はダークライの元に向かう。

「私も！」

「あ、おい待て！」

「ま…て…」

銀時の声がし、桂は見る。

起きた訳ではなく、寝言のようだ。

「どうした？銀時」

聞こえていないと分かっているけど、桂は声を掛けてみる。

「…れだ。だ…れだ…よ。おい………」

「誰？」

「誰…なんだ…よ。…くっ…」

「何の夢を見ているんだ…？」

「食らえ…ッ！」

高杉はダーククライにひっかくを繰り返す。
が、避けられる。

「エナジーボール！」

避けてすぐ、エナジーボールが当たる。

「ぐッ…!!」

ダークライは、技を直接受けたが、大したダメージにはなっていない。

「技にキレが無いな。さっきのピカチュウが心配か？」

「そうさせたのは、あなたでしょう!」

「天パー鼠がどうなろうと、知ったこっちゃねエ!!」

そう叫ぶと、高杉はダークライに飛びかかる。

「ほう。だがゾロア、おまえはピカチュウが気になってしょうがない、とゆう顔をしているぞ」

「いい加減なこと言ってんじゃねエよ」

だましうちを出そうとするが、前脚を掴まれる。

「気になっているからこそ、隙が出来る!」

ダークライは、高杉を掴んだままゼロ距離でダークホールを放った。

「晋助さんっ!」

ぐったりとうなだれた高杉を、ダークライは後方に投げ捨てる。

「さて、残るはおまえ達だ…」

刹那と桂を見て、手を伸ばす。
その時。

「ナイトバースト…！」

背後から声が聞こえ、それと同時にナイトバーストが炸裂する。

「何…！？」

振り返ると、ダークホールで眠った筈の高杉が立っていた。

「ゾロア…！？何故、起きている…！」

「変わったからだ。俺の特性が」

「特性…！？」

「そう…。私のなやみのタネによって、特性が『イリュージョン』から『ふみん』に変わったんです…！」

「これでめーのダークホールは、もう通用しねーぞ」

「ダークホールを破った程度で、勝ったと思うな…！」

右腕を上げ発光させると、光る刃を出し、打ち出す。

「きゃっ…！」

避けることは出来たが、刃の一部が当たった崖は、その部分だけ消

え失せていた。

「今の、あくう…せつだん…？」

「知っているのか？」

感心したようにダークライが呟く。

「パルキアの専用技…。どうして…」

「何故私が使えるのか不思議か？」

言いながら、両手を上げて青紫の光を集める。

「それは…。私がお二人を護っているからだ！！」

ダークライは光を放つ。

「伏せて！！」

刹那は咄嗟に叫び、高杉は身を低くする。
その直後に、青紫の光線が頭上を通過した。

「今度は、ディアルガのときのほうこう…」

技の反動か、ダークライは息が上がっている。

「今です！」

刹那はダークライに向かって行き、高杉も反対側から近づく。

「まだまだっ!!」

あくのはどうを刹那に向かって放つ。

命中したように見えたが、刹那の姿が花びらのような光に変わる。

（みがわり!?!なら、本物は…!?!）

「シードフレアーツ!!」

あくのはどうによって出来た砂煙の中から、刹那がシードフレアを放った。

「な…!?!うわアアツ!!」

強い衝撃波に飛ばされ、ダークライはそのまま崖下に落ちていった。

「やりましたね」

「ああ。おまえが、あの時なやみのタネを出したおかげでな」

相談をした時に、刹那は高杉になやみのタネを付け、特性を変えることを提案した。

賭に近かったが、上手くいった。

「ダークライは倒しました。銀時さんも、目を覚ますと思います」

2匹は、桂の近くに行く。

「ッラ、銀時目エ覚ましたか？」

桂は答えず、2匹は銀時を見る。

「な……」

「どうして……？」

「……くっ……。う………」

そこには、未だにうなされている銀時の姿があった。

第15話 ダークライ（後書き）

ダークライによつて、眠り続ける銀時。
一体何の夢を見ているのか…。

第16話 目覚めぬ銀時（前書き）

前回の特殊な技を使うダークライも、配信されたポケモンです。さて今回。

サブタイ通り、銀時が目を覚ましません。

13話と逆な感じのサブタイです。

第16話 目覚めぬ銀時

「ダークライは倒したのに…」

「なんで起きねえんだ」

刹那と高杉は眠ったままの銀時を見つめる。

「ずっとうなされている…。それに、何度も『誰?』と言ってる」

桂は2匹に言った。

「誰?」

「知らない人物が夢に出てきているのかもしれない」

「とりあえず、移動した方がいいと思います。もう暗くなってきましたし」

「移動ってどこ行くんだ?」

「ちょっと待って下さい」

刹那は波導で辺りを見る。

「少し上に、平らな空き地があります。そこに行きましょう」

投げ捨てていた袋を拾う。

「ゾロアークがくれた袋に、何か入ってないか？」

桂が訊き、刹那は中身を出す。

袋の中には、塗り薬と木の実、大きめの葉っぱが数枚と火打ち石、古そうな紙切れが入っていた。

「寝てるだけだから、塗り薬は使えませんか」

「何に使うんだ？この葉っぱ……」

桂は葉っぱを手に取り、高杉は火打ち石を見る。

「これは……？」

古そうな紙切れを取り、広げてみる。

「これ、この島の地図……？」

「地図！？」

「きっとそうです！ほら、この岩……あそこにあります」

山の下側だが、描かれた岩が海の近くにある。

「この上の空き地、何か書いてありますけど、星しるべだから読めません……」

「役に立ちそうで、立たない物ばかりよこしたなゾロアークは……」

眩きながら、火打ち石を手取る。

「俺の手では、使えんな。この火打ち石」

「私も無理かもしれないです。でも、頑張れば出来そう」

刹那は出した物を袋の中に戻し、背負った。

「何があるか、わかりませんが、上まで行きましょう」

「そうだな」

「その前に、誰が銀時を連れて行くんだ？」

高杉が言つと、2匹の視線が同時に来る。

「な、なんだ…？」

「おまえしかいないだろう。背が高いのは、おまえだけだからな」

「晋助さん、お願いします！」

「断る！なんで俺が連れて行くんだ！！ツラ、てめーが連れてけ！」

「そうしたいが、ニヤースの体重はピカチュウより軽いんだ。ソロアなら、ピカチュウの倍は体重があるから平気だろう」

「理屈訊いてんじゃねエんだよ！！」

「いいから、早く乗せろ」

桂は銀時を抱き起こすと、高杉の背中に無理やり乗せる。

「てめっ、勝手に乗せて」

乗せた際に、桂の前脚が高杉のたてがみに触れる。

「高杉…！なんだ、このたてがみ…。ふわふわじゃないか…！」

「そうなんですよ。これ、肌触りがすごくいんです」

何時の間にか、刹那まで来て、たてがみに頬擦りをする。

「てめえら…！何時までやってんだ…！！」

3匹が同時にくつついてきた為、流石の高杉もキレる。

「……お」

「ん？」

銀時が何かを言い、3匹は耳を澄ます。

「お、お…れが、……で…る」

「うわああアッ…！」

ダークホールを受けた銀時の意識は、暗闇に落ちていった。

「ぐあッ！」

地面に叩き付けられる。

「いてて…」

立ち上がろうと、手を伸ばす。

すると、腕が人間の物になっていることに気付く。

「あれ？ピカチュウ…じゃねえ」

恐る恐る立ち上がり、体を見る。
いつもの着物姿で、当然人間だ。

「時空の霊峰じゃねえな」

山道だが、先程とは景色が違い、空が夕焼け空になっている。
が、空の色は血を思わせる程赤かった。

「ここは…。…ここって！」

崖に走り寄り、下を見下ろす。

色づいた田園風景に、遠くに見える学舎。

「な…んで」

もう見ることは無いと思っていた風景を見て、驚きと懐かしさが同時にこみ上げてくる。

「あそこ…に」

呟いた時、山道から声が聞こえてくる。
見ると、子供が3人歩いている。

「な…！？」

銀時は目を見開く。

歩いていたのは、子供の頃の自分と同じく子供の桂と高杉だった。

「お、俺！？ガキの頃の…」

子供の頃の自分達が、銀時の近くに来る。

「おい、おまえら…」

手を伸ばし、声を掛ける。

しかし、声は届かず、手もすり抜けた。

「さわれねーのか？声も…聞こえてねえし」

子供の自分達は、そのまま通り過ぎて行く。

銀時は、そのあとをいついてみる。

「花…持つてるな」

幼少の銀時達は、両手一杯の花を持っていた。

だが、高杉は右手に怪我をしているようで、左手で花を抱えている。

「あれ？この花、どつかで…」

持っている花に、見覚えがあった。

赤とも濃いピンクとも言える花弁のついた花。

「！グラシデアの花…」

刹那がフォルムチェンジした時に言っていた花だ。

花の形が、シェイミの側頭部に付いている花とよく似ている。

「これだけあれば、先生喜んでくれるな！」

花を抱えて銀時が言った。

「そうだな！」

高杉が答えると、桂も頷く。

「先生に…やるのか？」

呟いた瞬間、ある出来事が銀時の脳裏に蘇る。

「もうすぐ、先生の誕生日だよな！」

銀時が桂と高杉に言う。

「プレゼントどうするか…。何あげたら、喜ぶかな？」

「その前に、おまえ金あるのか？」

高杉が訊くと、銀時は硬直する。

「そこまで考えてなかった…」

「普通そこからだろ」

「まあ何も、金のかかる物じゃなくてもいいんじゃないのか？」

「それもそうか」

桂が言うと、銀時はその手があった、と納得する。

「確か、山に綺麗な花が咲いてたな。あれにしよう！」

「あ！じゃあ、俺も行く。おまえばかりいいカッコさせるか！」

「俺も行くぞ」

高杉と桂も一緒に行くと言った。

「えー。俺が一杯花あげようと思ったのに…」

「別にいいじゃないか銀時。俺達で、先生に沢山の花を贈るってことにすれば」

「なら、俺が花全部摘んでいく！」

「ふざけんな、俺が先に摘んでやる！！」

「あー止めろ、おまえら」

銀時と高杉のやり取りを桂がなだめた。

「そうだ…。これは…あの時の……」

この光景は、今は亡き師、吉田松陽に花を贈る為に山へ出掛けた時のものだ。

「ダークライは、俺を眠らせた。なら、これは悪夢か…?」

忘れかけていたが、これは大切な思い出だ。

何故、この光景が悪夢となっているのだろう。

「…のおかげだな!」

「は…?」

桂の言葉の一部が聞き取れなかった。

「ああ。……見つけてくれたからな」

同じように、高杉の言葉も聞き取れない。

「何…言ってた?」

「…は、まだ来ないな」

幼少の銀時が言いながら、振り向く。

銀時は思わず立ち止まる。

「おい、俺。何が来ないんだ!？」

振り向いて見たが、誰もいない。

「待て…誰だ?誰だよ、おい!誰なんだよ!？」

子供の頃の自分達は、誰かのことを話している。
だが、その誰かが分からない。

「あ、…が来た」

桂が振り返り、歩いてきた道を走り出す。

銀時は見たが、やはり誰もいない。
その時だった。

「銀時、高杉!逃げろ!!」

桂が叫んだ。

山の上から、岩が幾つも落ちてきた。
少し離れていた桂にも、岩がくる。

「うわっ…!」

咄嗟に腕を前に出すが、銀時には岩は勿論、砂さえ当たらない。
やがて、岩は全て落ち、辺りは砂埃が舞う。

「俺達は…どうなったんだ…?」

銀時は、岩が幾つもある山道を見回す。
すると、離れた所に桂が倒れているのを見つけた。

「ッラ！」

思わず駆け寄り、抱き起こそうとするが、触れることが出来ない。

「おい、ッラ！しっかりしろ！！」

「う……」

声は聞こえていないが、桂は目を覚ます。

「いたっ……！！」

起き上がってすぐ、左腕を押さえる。

「折れてるみたいだ……」

立ち上がって周りを見る。

「銀時……、高杉……。どこだーっ！！」

震えながら、桂は叫ぶ。

すると、小さな声が聞こえた。

「ッラーっ！こっちだ……」

山の斜面と岩の隙間から、高杉の声がする。

桂は腕を押さえて、近くに行く。

「高杉！大丈夫か！？」

隙間から覗くと、高杉は頭から少し血が出ている。

「岩、少し動かすぞ」

右腕だけを使い、桂は岩を押す。
岩は、少し動き、隙間が広がる。

「よし、高杉早く出る」

「…足が動かねえ」

「折れたのか？」

違うと言って、高杉は首を振る。

「感覚がねえ。打ち所が悪かったみてーだ…」

桂は歯を食いしばり、隙間の中に入ると、折れた左腕も使い、高杉を引っ張り出す。

「ツラ…ありが」

「うつ…ぐあアッ!!」

腕に激痛が走り、桂はうずくまる。

「ツラ、腕折れてんのか…？」

「ああ…。それより、銀時を探すぞ」

「そうだ。俺、どこにいるんだ？」

銀時は子供の自分を探した。

「おまえは、そこにいろ。銀時は俺と…で…す」

再び言葉が聞き取れなくなる。

「な…！？」

突然、桂は離れた所を見て絶句した。
視線の先を見て、銀時はその場へ駆け出す。

「待てよ…。嘘だ…」

その場へ来て、銀時はそれを見下ろす。

「嘘だろ…」

岩の下敷きになって血を流し、微動だにしない銀髪の子供……。

「銀時ーっ！！」

桂の声が後ろから、だが遠くに聞こえた。
その場に銀時は、崩れるように座り込んだ。

「お、お…れが、死ん…で…る」

第16話 目覚めぬ銀時（後書き）

銀時殺しちゃった…。

高杉も大怪我させちゃった。

これを書くかどうか、悩みました。

第17話 欠けた悪夢（前書き）

重すぎて、途中からなんの話を書いているのか分からなくなってきた。

第17話 欠けた悪夢

4匹、いや3匹は山道を登り続ける。

刹那が前を歩き、時折後ろを見る。

「あともう少しです。頑張ってください」

高杉は銀時を背負って歩き、その隣に桂が歩いた。
銀時はまだ目を覚まさず、うなされている。

「いつになったら、目エ覚ますんだ」

歩きながら高杉が呟く。

「うなされ続けているな、銀時は」

「いてっ」

「どうした？」

立ち止まった為、桂は声を掛ける。

「俺のたてがみ引っ張ってる…」

「なんだ、そんなことか」

「高杉…」

銀時が呟く。

「寝言か」

「もう…いい」

「え？」

「俺なん…か、ほっとけ…」

「そうか。なら、置いていこう」

高杉は銀時を降ろそうとする。

「寝言だ！本当に降ろすな！」

その時、高杉に冷たい物が当たった。

「なんだ？」

見ると、銀時が涙を流している。

「銀時？」

「何故…泣いているんだ？」

「はや…く…け。おまえ…して…るのに」

「銀時！おい、しっかりしろ、銀時！！」

岩の下敷きになった銀時を桂は、必死に叫んだ。

「すぐ、助けてやるからな！」

岩を退かそうとするが、子供一人では、動きそうも無い大きさだ。

「ッラ…いい」

座り込んだまま銀時は呟く。

当然、桂にその声は届かない。

「俺は…死んでる。早く、行け」

「このっ…！」

左腕まで使い、岩を押し続ける。

「もう止める…！」

思わず叫んだ。

すると、後ろで物音がした。

「ぎ、銀時…？」

振り向くと、高杉が這いながら来ていた。

「おまえ、あそこにいろって言っただろ！」

「うるせーよ。それより、早く銀時を助けるぞ」

なんとか上半身を起こし、高杉は岩に手を掛ける。

「せーのー!!」

同時に力を入れ、岩を押す。

「おまえら、もう止めろ！そんな体で、おまえらまで倒れちまうぞ
!!」

銀時は必死に叫ぶが、2人には届かない。

「このっつ!!」

2人で押したからか、岩が動き倒れた。

「よし!!」

「銀時!!」

すぐに桂が、銀時を抱き起こす。

だが、銀時はぐったりとしており、だんだん冷たくなっていく。

「い、息…してない」

目に涙を浮かべ、桂は高杉を見る。

「た、高杉…っ！銀時が…しっ」

「んな訳ねえだろ!!」

桂の言葉を遮り、高杉は叫ぶ。

握り締めた手が震えているのが、自分でも分かった。

「銀時はまだ…死んでねえ。まだ…生きてる！」

自分に言い聞かすかのように言った。

桂は目をこすり、頷いた。

「そう…だよな。まだ…生きてる…よな」

「死んでるよ…。俺はもう、死んでんだよ！」

やり切れない気持ちで、銀時は叫んだ。

「俺…、先生呼んでくる」

桂は立ち上がる。

「…そこにいろよ。すぐ戻るから」

走り出し、桂は山道を下りて行く。

高杉は、それを見送った後、口を動かす。

だが、今度は一言も聞き取ることが出来なかった。

「今…何だった？なんて言っただよ、おい！？」

「……行くぞ。銀時」

呟くと、高杉は銀時を背負い、そのまま這い始めた。

「何…して」

「また何時、岩が落ちてくるか分かんねえから、安全なところまで行くぞ」

「おい、よせ…」

這いながら進む高杉は、その度に顔や腕を岩にぶつけ、傷が出来ていく。

「もう…少しだから…」

「止める…。そんな傷だらけで…」

「銀時、聞こえてんだろ…？この前、おまえが…食っちゃったこと、もう怒ってないから…」

「え…？」

「チビとか言っても、白髪とか言わないから…」

「おい、何言つて…」

「だから…、死ぬなよ……。銀時…っ！」

泣きじゃくる高杉を見て、銀時は立ち上がる。

「高杉…もついい…」

泣きながら、高杉は銀時を背負って這い続ける。

「俺なんか、ほっとけ……。早く……置いていけ。おまえ、大怪我してる……のに……」

「着きました！」

前を歩いていた刹那が立ち止まる。

そこは、草花が茂る小さな野原だった。

「とりあえず、ここで休みましょう」

「銀時は、ずっと泣いていたな」

「ああ。俺のこと、何度も呼んでたしな」

話しながら、桂は銀時を降ろし、草の上に横たえる。

「私、もう一度アロマセラピーを使ってみます」

刹那は銀時に、手を翳す。

「さっきは、使えなかっただろ」

「今度は、やり方を変えて、しんぴのまもりを使いながらやってみます！」

そう言うと、刹那の両前脚が白く光り輝いた。

「どうだ？」

光が消え、桂が訊いた。

「……あ？」

うつすらと、銀時は目を開けた。

「銀時！気がついたか！？」

「良かった、成功した！」

銀時は、3匹の顔を見回す。

「ヅラ…高杉…。ポケモンの……？」

起き上がり、自分が泣いていることに気付いた。

「あれ…？泣いてるのか、俺。あっちじゃ泣いてなかったのに…」

涙を手で拭った。

「銀時さん、どんな夢を見てたんですか？」

気になっていたことを、刹那が訊いた。

「言いたくなかったら、無理には訊きませんけど…」

「それより…。誰が俺をここまで連れてきたんだ？ヅラか？」

「いや、俺だ」

高杉が答えると、銀時は目を見開く。

「お、おまえ…が！？どうして……」

「俺が一番、背高かったからだ。おまえ寝ながら、俺のたてがみ引っ張ったり、何度も呼んだりして」

「何やってんだよ！おまえ、ボロボロなのに、また俺を背負ったのか！？」

たてがみを掴み、銀時は怒鳴った。

夢と現実がごっちゃになってしまっている。

「ボロボロって何がだ！それに、てめーを背負ったのはさっきが初めてだ！！」

「あ…そうか。あれは、夢か…」

そこで漸く、夢と現実の区別が出来た。

「悪いな高杉、背負わせて。……ありがとう」

どこか苦しそうに、銀時は高杉に礼を言った。

「さっき見た夢…話すよ」

「え…でも」

口ごもる刹那を見ながら、銀時は続ける。

「おまえは知らないからいいけど、ツラと高杉にも訊きたいことあるし」

「訊きたいこと、とは何だ？」

桂が訊いてくる。

「その話の前に、俺が見た夢からだ。……俺が、ガキの頃の俺が……死んでた夢から……な」

第17話 欠けた悪夢（後書き）

銀時が語る悪夢…。

だが、それには違和感が…！？

第18話 矛盾した思い出（前書き）

銀時が見た悪夢についての矛盾点を上げていきます。

第18話 矛盾した思い出

「……で、高杉が泣きながら俺を背負って這ってた。その後で、目が覚めた訳だ」

一通り、銀時は自分が見た悪夢を話した。

刹那は勿論、桂と高杉も驚いた表情をしている。

「ただの夢…だったら良かったけど、岩が落ちるまでは実際にあったことだよな…」

「ちよつと待て…」

高杉が呟いた。

「おまえ、俺が右手怪我してたって言っただけど、怪我なんかしてねえぞ」

「え…？」

「あの時、俺もおまえらと同じ位、花抱えてた。はつきり覚えてる」

「それに、花を摘みに行ったのは俺達3人だけだった筈だ。なのに、もう一人いたのは誰なんだ？」

桂も訊いた。

「知らねーよ。姿も声もなかった。まるで、透明人間とやり取りし

「てるみてえだった」

「ダークライが…」

刹那が呟き、3匹は刹那を見た。

「ダークライが、夢を改竄したのかもしれませんが。ダークライには、ちからそういう能力があると聞いたことがあります」

「ダークライのせい…か。にしちゃあ、やけにリアルだったな」

死んだ自分、大怪我をした桂と高杉、そして見えない人物…。どれも、現実にあつたことのように鮮明だった。

「先生にあげたのって、グラシデアの花…だよな」

持っていた花を思い出し、銀時が言った。
すると、意外な反応が返ってくる。

「グラシデアの花？あつたか…？」

桂は、そのまま高杉に振った。

「赤っぽい花だったのは覚えてる。でも、名前は知らねえ花だった」

「名前は知らねえ花…か。確か、あの時は綺麗な花、としか思わなかった。けど、持ってた花はグラシデアの花だった…。夢だと」

「夢の話だろ。それだって、改竄されたことかもしれねーし」

高杉が言つと、銀時は「まあ、そうだけど」と続ける。

「でも、あの花を見つけたの俺だし」

「そう言えばそうだな。あの花は、銀時が最初に見つけたから、摘みに行ったんだ」

思い出したのか、桂が言った。

「どれが本当にあつたことが、分かんなくなってきた…」

思い出が曖昧になってしまい、銀時は頭を掻く。

「あの、こんな時にあれなんですけど、木の実食べます？もう夜ですし」

空を見ると何時の間にか、月が高く登っており、辺りは少し明るかった。

「明日も結構歩きますし、早めに休んだ方がいいと思います」

「それもそうだな。まだ、半分も登ってないようだ」

山頂と自分達がいる所を桂が見比べる。

刹那は袋から、木の実を出す。

「じゃあ、食べましょう」

木の実はい、それ程多くはなかった為、食事はすぐに終わった。

「寝る時は、この葉っぱを布団変わりに使いませんか？」

刹那は、袋に入っている葉っぱを出す。

「布団変わりになんのか？それ…」

葉っぱを指差し、銀時が言った。

「でもこれ、結構あったかいですよ」

差し出した葉っぱを、銀時は触ってみる。
確かに、温かった。

「あ、ほんとにあったかい」

「使いますか？」

「そうする」

葉っぱを銀時に渡したあと、刹那は桂と高杉にも葉っぱを渡す。

「なんか寝る気しない」

銀時は座ったまま呟く。

「あれだけ寝てれば、眠れねーだろ」

そう言いながら高杉は、猫のように後ろ脚を使って耳を掻く。

「それもあるかもしれないけど、また悪夢見そうなんだよ。…っ」

か、おまえ何やってんの？ますますポケモンに近づいてんじゃね？」

「こうしなきゃ搔けねーんだよ！」

そんなやり取りを見ながら、桂は刹那に話し掛ける。

「刹那、おまえは寝相が悪いと言ってたな。なるべく、危険の無い所で寝た方がいいぞ」

「そうですね。じゃあ、小太郎さんの近くで寝ます。…蹴っちゃうかもしれませんけど」

「別に構わん。とりあえず、気をつける」

「あー。やっぱり、寝る気しねー」

他の3匹は寝る用意をしているが、銀時は寝ることが出来ない。

「銀時さんも早く寝た方がいいですよ」

刹那に言われ、一応横になる。

寝る気がしないと言っておきながら、すぐに眠れた。

悪夢ではないが、夢を見た。

「なんだ？ここ…」

窓の無い、石造りの室内に銀時はおり、明かりは部屋の四方に焚かれた篝火だけで、薄暗かった。

「見たことねーな、ここ。また人間に戻ってるし」

ふと、足元に誰かがいることに気づく。

屈んで見ると、そこには人間の姿の高杉が横たわっていた。

「おい、高杉！なんででめーがいんだ！？…てゆうか起きろ！！」

高杉の頭を蹴ったが、起きる気配は無い。

「ん…？」

部屋の入口に、4〜5歳位の子供がいる。

金色の髪に、子供らしくない険しい表情をして、白い布を体に纏っている。

薄暗いせいもあってか、性別が分からない。

「なんだ？おまえ…」

声は聞こえていないようで、銀時の近くにある大きめな台に向かう。台は低く、その上に傷だらけになった少女が寝かされている。

「ひでー傷だな。おまえが手当てするのか？」

銀時は金髪の子供を見下ろした。

すると、目を閉じ、手を胸の前で合わせた。

「何…する気だ？」

合わせた手を離し、そのまま少女の体に翳した。

その瞬間、白い光が輝いた。

「な……！？」

光が収まった時、少女の体にあつた傷が消えていた。

「おい、降りろ……！」

高杉の声で、銀時は目を覚ます。

何故か、高杉の上に乗って寝ていた。

「あれ？今のつて……夢？」

「何寝ぼけてんだ！人の上に乗リやがって……！」

「あー悪い、悪い。おまえが夢に出てきて、魔法使いがなんやかんやしてて……」

「訳分かんねー夢見てんじゃねえよ……！」

怒鳴った後、高杉は葉っぱにくるまるようにして、寝た。

「なんだったんだ、あれ……？」

見たこともない風景と子供に疑問を感じながらも、銀時は眠ることにした。

第18話 矛盾した思い出（後書き）

話が変な方向に行きそうです。
次、ちゃんと書けるかな…。

第19話 過去の夢（前書き）

最後がかなり重いです。

ちよつとグダグダみたいです…。

第19話 過去の夢

不思議な夢を見て二度寝になってしまった銀時だが、次の朝は普通に起きることが出来た。

「本当に、なんだったんだ？あの夢…」

二度寝はしたが、夢の続きは見なかった。

「寝ぼけて俺の上に乗ってくるって、どんな夢だ」

不機嫌そうに、高杉が言った。

「だから、言っただろ。夢中でおまえが寝てて、金髪の魔法使いだか錬金術師だかわかんないガキがなんかやってたって」

「なんかって何だよ。あと、どんなガキだったんだ？」

「暗くて、男か女かわかんなかった。で、傷だらけの女の子の怪我治してた。一瞬で」

「一瞬…！？ありえねえだろ、そんなこと」

「だから、魔法使いだか錬金術師みたいだった、って言ったんだよ」

いくら夢の話でも、突然そんなことを言われても解釈が出来ない。高杉は半分呆れた顔をする。

「おまえが何の夢見ようが、知ったこつちやねえ。ようは、そういつたもんしか考えてねーんだろ」

「ちげーよ！なんで、こんな時にファンタジーなこと考えなきゃなんねえんだ！！そんなん考えてる暇あったら、元に戻る方法考えるつての！！」

「おい、うるさいぞ！静かに出来んのか！？」

2匹の声で、桂は目を覚ます。

「まったく、朝から騒がしい連中だ」

そう言いながら、桂はまた横になる。
しかも、刹那を枕にして。

「ゾラ、刹那が枕になってるぞ」

銀時に言われ、桂は起き上がって見てみる。
確かに、刹那だった。

枕にされていても、刹那は気づかずに眠っている。

「すまん、刹那！おまえの背中が、あまりにもふわふわだったから……！」

「似たようなこと、俺にも言ってたな」

桂の言い回しを聞き、高杉は呟いた。

背中を撫でられたせいかな、刹那も目を覚ました。

「…あれ？あ、おはようございます」

刹那は、周りを少し見て言った。

「変わった夢見てました…」

「夢？」

「はい。死体があちこちにあって、その中で白い髪の男の子がいたんです」

「え……？」

白い髪の男の子とゆう単語に、銀時が反応する。
刹那は続けた。

「その子、死体の上に座っておにぎり食べてたんです。それから」

「それ…俺だ…」

無意識に銀時は言った。

「あの子が銀時さん？うそ…」

「いや、本当だ。それで、その後どうなった？」

「声は聞こえなかったんですけど、その後、髪の長い男の人が来て、頭を撫でてました」

「やっぱり、そうか」

刹那が見た夢は、間違いなく銀時の過去だ。

「じゃあ、刹那は銀時の過去を見たとういうことか？」

「そう…なるな。おまえらは、なんか夢見たのか？俺は魔法だか錬金術だか使ってるガキが出てきたけど」

「てめえのせいで、二度寝して何も見てねーよ」

高杉が言つと、「まだ根に持ってるのか！」と銀時が言い返す。

「俺は何も見なかった。…おまえが見たのは、刹那の過去なんじゃないのか？おまえの過去を刹那が見たのと同じように」

「あれが刹那か？おい、おまえ髪の色何色だ？」

「髪の色ですか？黒です。長さは、背中位まであつて…」

「黒！？じゃあ、違うか…。あのガキは何だったんだ」

「一体、どんな子が出てきたんですか？」

「金髪で、男か女がよくわかんないガキ。で、魔法だか錬金術だかで傷を一瞬で治してた」

信じられない話のせいか、刹那はじつと銀時を見る。

「銀時さん…。何ですか…それ？」

「信じられねーかもしれないけど、そうゆつのを見たんだよ」

「そうなんですか…」

少し下を向き、刹那は息をつく。

「ここで夢の話をしても何にもなりませんし、出発しませんか？」

話題を変え、出発しようと刹那が言う。

何か不自然な態度を見て、高杉が声を掛ける。

「待て」

「え？」

「おまえ、金髪のカギのこと知ってるんじゃないのか？」

「なんでですか？」

落ち着いているように見えるが、刹那は動揺していた。

「銀時が、カギの特徴を言った時、おまえの様子は明らかにおかしかった。まるで、知ってる奴のことを言われてるみたいにな」

刹那は答えず、高杉を見つめている。

「そのカギとなんか関係があるんだろ。忘れたくなるようなこと、…とか」

「忘れたくなるようなこと…か」

刹那は小さく呟いた。

「関係なんか、ありませんよ。私が銀時さんの話を聞いて驚いたのは、その金髪の子が銀時さんの夢にも出てきたことです」

「俺の夢にも!？」

「そうです。金髪の子は、昨日私の夢にも出てきたんです。…言い訳っぽいかもしれませんが」

「刹那。俺達は、人間の姿のおまえを知らない。良かったら、話してくれないか？」

他人の詮索は、あまりしたくないが、刹那とは会って数日しかたっていない。

自分のことをほとんど話さない為、桂は気になった。

「話す気はあります…。私は有名人ではありませんし、時空を観測する仕事をしているって言ったじゃないですか」

言いかけたことを取り消し、最初に会った時に話したことをもう一度言う。

「そうゆうことではない。どんな人物かを訊いている」

「今は…話せません」

今度は、はっきりと言った。

「今は？」

刹那は頷いた。

「ディアルガとパルキアを何とかしたら、全てお話します」

「今話せない理由はなんだ？」

高杉が訊くと、刹那は小さく、寂しそうに笑う。

「言っても、わかんないから……。ここで言っても、あなた達には分からないから。でも…後で必ず話しますから……」

つらく、苦しそうに答えた。

「必ず話すんだな？」

銀時が訊くと、刹那は頷く。

それを見て、銀時は山道を歩き出す。

「なら、さっさと行くぞ。おまえの話、色々訊きてーし」

立ち止まり、振り返る。

「それに、早く元に戻りてエシな。つか、それが目的だけど」

「ごめんなさい。すぐに話せなくて……」

「後で話すと言っただろう。その時、ちゃんと話せばいいだけのことだ」

桂がそつと言った。

「そうですけど。この話をしたら、晋助さんとのやり取り…出来な
いかもしれないです」

「おまえ、昨日のことを…！」

刹那は、答えずに歩き始める。

「行きましょう」

振り返ったその目に光は無く、やるせない表情をしていた。

第19話 過去の夢（後書き）

刹那について、色々出てきましたが、まだキャラが掴みきれてません。
オリキャラなのに…。

第20話 険しい山道（前書き）

遂に20話！

来月の頭には、完結とか言っただけ、終わりそうに無いです。
この進み具合だと。

第20話 険しい山道

そのあとは、4匹共あまり会話をしないで山道を歩き続けた。その途中、木の実を取って食べ、朝食変わりにした。

「幾つか、袋に入れておきますね」

刹那は木の実を袋に入れていく。声に少し覇気が戻っている。

「気持ちの整理は、まだついていないようだな」

明るく見える刹那を、桂は見ながら歩いた。

「あ、グラシデアの花…」

道端に咲いたグラシデアの花に触れ、刹那はスカイフォームになる。

「夢に出てきたのは、やっぱりこれだったな…」

花を見つめ、銀時は呟く。

「この上、雨が降ってます。道が滑りやすくなるから、気をつけて下さい」

少し飛んで、上の方を見た刹那は3匹に言った。道を曲がってすぐ、ポツポツと雨が降り始める。

「なんか…バチバチしてる……」

雨が銀時の体に当たり始めてすぐ、火花が散った。

「危ねえな！」

高杉と桂は、火花を避ける。

火花は最初だけで、少しすると出なくなった。

「足元、気をつけて下さいーい！」

飛びながら、刹那が言った。

「おまえだけ、ずるくね？……あれ？」

空を見ると、雨が止み、変わりに霧が出てくる。

「今度は霧か」

刹那は霧が立ち込める前に、3匹の近くに着地する。
霧はあつという間に広がり、数メートル先も見えなくなった。

「この中を歩くのは、危険ですね」

「刹那、きりばらいで何とか出来ないのか？」

桂が言うと、刹那は首を振る。

「そんな技出来ません」

「ツラ、シェイミはスカイフォームになっても、ひこう技一つしか覚えねーんだ。しかも、技マシンでも覚ええないし秘伝マシンに至っては、一つも覚ええないってゆう移動には、使えないポケモンで」

「それ、私に言ってるんですか？それとも、シェイミ単品に対して言ってるんですか？」

銀時を見て、不機嫌そうに刹那が言う。

「いや、ゲーム。リークに対して」

「何を言っている！技など関係ない、シェイミは可愛ければそれでいいと、俺は思っているぞ！！」

桂が言うと、刹那は呆れ顔になる。

「なんか馬鹿にされてる気分です」

「おまえのこと言ってるねーって。ゲームフ。ークのことだから」

「伏せ字が揃ってないです。あと、何時までこの話をしてるんですか」

「霧が晴れるまで？」

周りを見るが、霧は深く、晴れる気配は無い。

「わかりました！ちよつと頑張ってみます」

そう言って刹那は、飛んでエアスラッシュを放つ。

エアスラッシュで霧が吹き飛ばされて、見通しが少し良くなる。

「お、霧が吹き飛んだ」

「このまま進んで下さい！」

刹那は前を飛びながら、エアスラッシュで霧を吹き飛ばしていく。しばらくして、刹那はエアスラッシュを使うのを止める。

「ん？どうし」

銀時は言いかけて止める。
目の前は霧が晴れており、山道が見渡せた。

「霧を抜けたようだな……」

後ろを見て桂が呟く。

「でも、やっと半分位は来れましたよ」

崖から下を見下ろし、山頂を見上げる。
確かに半分位まで来ていた。

「この上は、もっと天気が悪そうですね……」

山頂付近は、厚い雲に覆われている。

「行くしかねえだろ」

山頂を見上げ、高杉が言った。

「……そうだな」

銀時と桂も答え、頷くと歩き出す。

それからしばらく歩くと、冷たい物が顔や体に当たり始めた。

「なんだ？風花か？」

上の方を銀時は見た。

冷たい物に当たったせいかな、刹那はランドフォームに戻った。

「あ…。雪……」

山道の先が一面、雪景色になっている。

「真っ白ですね」

「刹那。おまえは、寒さに弱いから、葉っぱを被った方がいいと思うぞ」

桂が言うと、刹那は「そうですね」と答え、葉っぱを出して被った。

「雪道は、更に危険が多いです。明るいうちに登りましょう」

「そうだな。今は晴れているが、吹雪いてきたら遭難するな」

歩きながら、桂が言う。

雪で覆われた山は、広く、迷いそうだった。

「さみいな……」

くしゃみをし、銀時は震える。

と、前を歩く高杉に目が止まり、おもむろに飛びつく。

「て、てめえ！何しやがる！？」

「いいだろ。それあつたかそうだし」

銀時の言う『それ』とは、高杉の首にあるたてがみのことだ。

「やつばいいなー。これ……」

たてがみに顔をうずめる。

「離れろ！気持ちわりイ……」

「俺がゾロアになりたかった……」

この寒さの中、銀時は半ば本気でそう思ってしまう。

「離れろッ……！！」

高杉は銀時を投げ飛ばすと、前脚で地面を叩く。

すると、落下した銀時の上に大量の雪が落ち、そのまま埋もれてしまふ。

「銀時！今助けるぞ……！！」

桂は銀時を助ける為に、雪を掻き出す。

「晋助さん…、これ…幻影ですよね」

「何？幻影！？」

桂は手を止め、高杉を見た。

「バレたか…」

前脚を動かすと、銀時の上に乗っていた雪が消える。

「なんで分かった？」

「目が一瞬、光っていました。だから、これは幻影だって思ったんです」

「てめえ、高杉！殺す気か！？」

雪（本物）を頭に乗せ、銀時は高杉に詰め寄る。

「幻影で死ぬか」

「こっちは凍死するかと思ったぞ！！」

「俺が知るか。乗ってきたてめえが悪い」

「てめえエエツ！！」

飛びかかりそうになる銀時を刹那が押さえる。

「体力を消耗しちゃいますよー！こんな雪山だとーっ！！」

刹那が叫んだ時、ちらほらと雪が降ってくる。

「降ってきたか…」

桂は空を見上げ、白い息を吐く。

「葉っぱ被っていた方がいいですよ。降ってきましたし」

袋から葉っぱを出し、刹那は3匹に渡した。

「早く行きましょう。吹雪く前に」

地図を出し、見ながら歩き続ける。

上に行けば行く程、雪は強くなり、やがて吹雪となった。

「刹那ア！今、どこだ！？」

銀時は怒鳴るように訊いた。

風の音が強く、会話も自然と大きくなる。

「えーっと。……ここは？」

「どこだ！？」

「……どこでしょう？」

一瞬、沈黙が流れた。

「どっ？」

「迷っちゃったみたい…です」

雪山で迷ったとゆうことは、すなわち……。

「まさか…遭難したのか!？」

最悪の言葉を桂が言った。

刹那は力無く頷いた。

「遭難しちゃいました。私達……」

第20話 険しい山道（後書き）

次回、4匹が遭難して、なんやかんやしていきます。

第21話 遭難（前書き）

タイトル通り、遭難しています。

第21話 遭難

「どうすんだ！ホントに遭難して！！」

慌てながら銀時は、叫ぶ。

「待って下さい。波導で見ます！」

刹那は目を閉じ、辺りを探る。

しかし、いつもは青白く見える景色が雪と同じ位白く見えた。

（これは…磁場？）

「磁場が強いみたいで、波導でも見つらいです……」

「波導でも分からないのか…？」

桂が訊くと、刹那は頷く。

「波導は、全ての人や物質が放つオーラのような物。磁場が強いと殆ど見えないんです」

「じゃあ、どうやってここを抜けるんだ？」

「慎重に行くしかないです」

「慎重に行くって……」

辺りは吹雪いており、視界も悪い。

慎重に行くのは当然だが、かなり時間が掛かりそうだ。

「まっすぐ行ってみますか？とりあえず…」

刹那は地図を広げて見る。

直線的に行けば、湖に出られる筈だ。

「行くか…」

立ち止ったままとゆう訳にはいかず、4匹は進む。

「何時になったら、着くんだ…」

雪に足を取られそうになりながら、銀時が呟く。

刹那は再び波導で辺りを見る。

今度は、先程より景色が青白く見えた。

「道がずれちゃってます！こっちに行って下さい！！」

左側を指し、叫ぶ。

磁場が弱まっているのか、刹那は目を閉じ、波導を見ながら歩く。

「こっちですーッ！！」

「おまえ、草タイプなのにやけに元気だな。こっちは、今白くないのにもっと以上に真っ白だし……」

雪にまみれて真っ白になっているのは、銀時だけではないが、何故か刹那が元気に見える。

「おい銀時。おまえ、雪兔みたいになってるぞ」

薄笑いを浮かべながら、高杉が言った。

葉っぱから出ている長い耳は雪で覆われ、兎の耳のようになっていた。

しかも、体中雪が付いている為、余計にそう見える。

「本当だ。鼠じゃなくて兎になっているな」

露骨に笑いをこらえながら、桂も言った。

目を開け、刹那も銀時を見た。

「電気兎ですね」

「何この言われ方！？天パーって言われるより屈辱的なんだけど！」

首を振り、銀時は頭や耳に乗った雪を落とす。

「銀時さんの方が元気じゃないですか。……あ」

波導で辺りを見ていた刹那は、何かを見つける。

「何かあったのか？」

「この先が湖です！あと少しですよ！！」

湖が近くだと分かり、若干足取りが軽くなる。
その時。

「おわっ！」

「な、何…！？」

吹雪が突然強まり、更に視界が悪くなる。

「なんでいきなり強くなるんだアアッ…！」

「このまま、湖に行くのは危険ですっ…！」

叫びながらも、刹那は波導で辺りを見続ける。

「あつ、あそこ…」

視線の先に、刹那は走り出す。

「どこ行くだよ！」

3匹は、刹那のあとを追う。

少し走ると立ち止まり、山の斜面を掘る。
すると、空洞が現れる。

「洞穴か？」

「吹雪が弱まるまで、この中にいましょう…」

4匹は、洞穴の中に入る。

中は少し狭かったが、4匹が入るには、十分の広さだった。

「さみいー、疲れた」

「そのまま寝たら、凍死しますよ」

そう言いながら刹那は、袋から火打ち石を取り出し、洞穴の中にあつた枯れ葉を集める。

「付けられるのか？」

火打ち石を持つ刹那を見て、桂が訊いた。

「多分、出来ます」

石を打ち合わせ、枯れ葉に火を付けた。

「良かった。ちゃんと出来た！」

小さな手で、石も打つことが出来るか心配だったが、上手くいったので安心する。

4匹は濡れた体を温めようと、焚き火を囲む。

「さっき波導で見た時、湖の周囲に雪は降っていませんでした」

「そっちは降ってねーのか…。あとちよつとなのになア……」

銀時はうなだれた。

それを見て刹那は、励ますように言った。

「ここまで来たんです。休憩だと思えばいいじゃないですか」

「そうだぞ。結構歩いてきたんだ。吹雪もすぐ止むだろう」

そう言つて桂は、葉っぱを乾かす。

「まだ止みません」

洞穴から外を見て、刹那が言つた。

あれから数時間経つたが、吹雪は弱まるどころか強くなつていた。

「刹那、木の実ない？」

葉っぱの上に座つて、銀時が訊いた。

「ありますけど、みんなで食べたら無くなつちゃいますよ」

「別にいいだろ？朝しか食つてないんだし。時間だつてわかんねーし」

「そうですけど…。じゃあ、今食べちゃいましょう」

袋から木の実を出し、配つた。

「……足りねー」

木の実の数が少なかったせいか、銀時が不満を漏らす。
食べ終わると、することが無くなる。

「寝よ…」

「寝るのか？」

桂が訊くと銀時は頷き、葉っぱを被り横になる。

「私も寝ようかな…。早いけど」

焚き火の近くに葉っぱを敷き、その上にうずくまる。
数分もしないうちに、2匹の寝息が聞こえてくる。

「もう寝たのか」

銀時と刹那を見て、高杉は呟く。
桂を見ると、いつの間にか桂も寝ていた。

「……なんで、てめーまで寝てんだ」

「また、あのガキの夢か…?」

銀時は見知らぬ地に立っていた。
昨日は、寝ていたとは言え高杉がいたが、今日は誰もいない。

「外…だよな」

緑の山と草原の広がる大地。
後ろを見ると、白い大きな建物があった。

「神殿っぽいな。なんか…」

建物の近くに行くと、中から誰かが飛び出してくる。
白い裾の長い服を着た、少女だった。

「おまえ、昨日のガキか!？」

昨日より、少し成長しており、金髪も身長も伸びていた。

少女は、どこかへ走って行く。

銀時は少女の後を追ってみる。

「おまえ、刹那なのか?それとも、刹那となんか関係があんのか!？」

走りながら少女に訊くが、声は聞こえておらず、最初に見た時と同じ険しい表情で走り続ける。

しばらくして、少女は立ち止まる。

「な、なんだ。あれ……」

空中に白い大型の生物がいた。

「ちょっと待て。こいつって……」

その姿を実際に見たことは無いが、見覚えのある生き物だった。とゆうより、ポケモンだった。

「ア、アルセウス……!？」

アルセウスは世界の全てを生み出した、神と呼ばれるポケモンだ。少女の前に、アルセウスは降り立つ。

見つめ合った後、少女は胸の前で手を組み、口を動かした。

声は、やはり聞こえなかった。

「はっ……」

銀時は目を覚ます。

焚き火は消えており、洞穴の出入り口からは、太陽の光が見えた。

「あのガキ。アルセウスと何やってたんだ……？」

起き上がり、呟く。

少女とアルセウスのやり取りが気になった。

第21話 遭難（後書き）

神と呼ばれるポケモン、ついに登場！
夢だけど。

第22話 戦いの行方（前書き）

神と呼ばれるポケモンが、結構出ます。

第22話 戦いの行方

「ふあゝ。朝か…」

丸くなっていた刹那が起きた。
起きてすぐ、銀時に気付く。

「あ、おはようございます。あのまま、ずっと寝ちゃいました」

刹那を見つめ、銀時は無意識に訊いた。

「アルセウスと何してたんだ？」

「え……？」

突然訊かれ、刹那はきよんとする。

「悪い、金髪のカキのことだった」

「また見たんですか？」

「ああ」

「ん？おまえ達、早いな」

桂も目を覚まし、2匹を見た。

「金髪の小さな少女が、夢に出てきた…」

「おまえも見たのか!？」

桂は頷き、続けた。

「声は聞こえなかったが、白い大きなポケモンと話していた」

「それ、アルセウスだよ。多分」

言った後、銀時は高杉がまだ寝ていることに気付く。

「あいつ、まだ寝てんのか…」

「俺より後に寝た筈だ」

桂が言ったことを聞き流し、銀時は洞穴の出入り口に向かう。

「起こすか…。高杉、起きろ!」

「晋助さん、起きて下さ」

「おまえら、黙ってる」

桂と刹那が振り返ると、雪を持った銀時がいた。

「おまえ、まさか……」

「昨日のお返しだ!」

そのまま雪を高杉に、投げつける。

雪は、高杉の顔や背中に落ちる。

「冷てっ!!」

突然の冷たさに、飛び起きる。

「っしゃ!!」

予想通りの反応に、銀時は嬉しそうにする。

「てめえの仕業か!!」

頭の雪を振り払い、銀時に大量の雪を落とす。
勿論、幻影だが。

「幻影って分かってりゃ、怖かねーんだよ!」

雪を被りながら、でんきショックを出す。

「こんな所で、何をしている!戦うなら、外でやれ!!」

桂が怒鳴り、銀時と高杉は渋々戦いを止める。

「晴れているみたいですし、そろそろ行きましょう」

言いながら、刹那は外に出る。

桂も一緒に出て行く。

「そっぴゃ、おまえ。金髪のカキ、夢に出てきたか?ツラは出てきたって言ってたけど」

怒りながら、銀時は訊いた。

「出てきた。でけえ建物から、走って来てた」

「それで？アルセウスいたか？」

「知らね。走り出してすぐ、起きちまったからな」

おまえのせいでな、とゆうように高杉は睨む。

「あー悪かった。雪投げるんじゃないくて、蹴飛ばせば良かった。夢の時みたいに」

「おい、てめー夢の中で俺を蹴飛ばしたのか！？」

「ああ。最初にガキの夢見た時、足元で寝てたから」

「ふざけんな！てめえ、まだそんなことしてんのか！！」

「まだってなんだ！まだって！」

「ガキの時、何度も俺の頭蹴飛ばしてただろ！」

「……忘れた」

少し間を置いてから答えると、銀時は外に出る。

「待て、こらー！」

銀時を追い掛け、外に出る。
すると、冷たい物が顔に当たる。

「まだ降ってんのか…？」

雪で反射した朝日に目を細め、光に慣れてすぐ辺りを見る。

「雪じゃねえな」

雪よりも小さく、細かい氷の粒が風に舞っていた。

「これ…。ダイヤモンドダストです。空気中の水分が凍って、見える現象で」

氷の粒は、朝日を受け輝いている。

「綺麗…。初めて見た……」

刹那は幻想的なダイヤモンドダストを、ずっと見ていたいと思った。

（でも、駄目……）

「湖は、すぐそこです。行きましょう」

名残惜しくも、刹那は歩き出す。

「俺、雪見ると食いたくなるんだよね」

「おまえは、雪が積もる度にシロップをかけて、かき氷みたいにして食べていたな」

「それ、ガキの頃だけだった」

（もう、台無し……）

後ろを歩く銀時と桂の会話を聞き、刹那は呆れる。
樹氷で覆われた森を進むと、視界が開けてくる。

「湖が見えました！」

湖に向かって歩いて行くと、近づくにつれて雪が少なくなっていく、
気温も高くなっていった。

「この湖、雪ねーぞ」

湖の前に来ると、雪は少しも無く、寒さもなかった。

「この湖の先を行けば、山の頂上です！」

刹那は地図を広げて、指を差す。

「なら、さっさと行くか」

湖の端を歩き始めた時だった。

「なんだあれ……？」

湖の中心に、黒い渦が出来る。

「次元の渦か!？」

「違います。あれは、恐らく」

刹那が言った瞬間、渦から何かが飛び出してくる。

「キシヤアアッ!!」

「ギラティナ……! 反転世界の主……」

飛び立ったギラティナを刹那は見上げる。

ギラティナは4匹に気付き、近くに降りてくる。

「何だ? おまえ達は……」

「わ、私達は」

「ディアルガとパルキアを倒しに行くんだよ!!」

刹那が言う前に銀時が叫ぶ。

「何? なんの為にだ?」

「あいつらが戦って、時空をメチャクチャにしてるからに決まってるんだろ!!」

それを聞き、ギラティナは不思議そうに4匹を見た。

「戦い? あいつらの争いは、300年前に終結した筈だが……」

「終結したと!?」

「それも、300年前に……」

高杉と桂は、驚きの声を上げる。

「あいつらは、もう戦っていない。だが、時空が乱れているは事実だ」

ギラティナは山の頂上を見つめた後、4匹に向き直る。

「少し、その話をしてやろうか」

静かにギラティナは、話し始めた。

「ディアルガとパルキアは、500年前互いの領地を巡り、争いを始めた。時と空間はもつれ、捻れた。そのせいで、この世界は異常気象や時の停止、空間の消滅が起こった」

「空間の消滅とは、何だ？」

聞き慣れない言葉に、桂が訊いた。

「空間の消滅は、その場にある物…例えば、山だとすると、山が消え失せるとゆうことだ」

「時の停止とゆうのは、時が止まるとゆうことか？」

「そうだ。一定の地の時間が止まり、その場は風も吹かず、雨も降らず、朝もこなくなる」

「今より、深刻そうじゃねーか」

銀時は呟いた。

この世界に来てから、争いはあったが、時の停止や空間の消滅はこれまでなかったからだ。

ギラティナは続ける。

「争ったことにより、この世界は勿論、私の住む反転世界も汚れてしまった…。」

我は、そいつらを止めようと戦った。だが、なかなか止まらず20年がたった時だ」

息を切らせながら、ギラティナはおにびを2匹に放つ。

が、どちらも避けた。

「もう止める！おまえ達が争えば、時空が乱れると、何度言えば分かる！！」

「黙れ、私の住む空間を先に狙ってきたのは、こいつだと言っている！！」

ディアルガはパルキアを指して言った。

「何言ってるんだ！おまえこそ、俺の空間を狙ってるくせに！！」

「おまえ達が争っているから、私の空間は汚れ、時空も乱れ、他の者達も争い続けている……。もう、いい加減にしろ！！」

「うるせえ！なら、おまえから片付けてやる！！」

パルキアがギラティナに飛びかかるとした時。

「止める！！」

声と共に光弾が大量に降ってくる。

「これは……」

空を見上げると、そこには白い大型のポケモン……アルセウスがいた。

「おまえ達……何故争う？ギラティナの言う通り、おまえ達がしていることは、世界を巻き込み、この地を混乱させている」

アルセウスはディアルガとパルキアに言った。

「おまえ達には、おまえ達の空間を与えた。それを何故取り合う？」

アルセウスの問いに、ディアルガとパルキアは沈黙する。

「争ったことにより、時空が乱れてしまった……。200年もの間、おまえ達がしたことは決して軽いことではない」

辺りを見て、アルセウスは言った。

「時空を戻せ。この先、数百年経とうともな。それが、おまえ達の役目だ」

「そう言つて、アルセウスは去り、ディアルガとパルキアは今も時空の乱れを修復している」

「随時、素直だな。おまえの説得は聞かなかったくせに」

荒々しい2匹が従つたことを不思議そうに思い、銀時が言つた。

「アルセウスは我らを生み出した、絶対的な存在だ。その者に従うのは当然だ」

ギラティナは山頂を見つめる。

「話は終わりだ。我は、そろそろ行かねばならない所がある」

「あ、おい……！」

声を掛けようとしたが、ギラティナは飛び立ってしまう。

「乗せてつてもらいたかったな……」

「ディアルガとパルキアは、原因じゃなかったのか……？」

ギラティナの話を聞いて、桂は呟いた。

「時空は修復してるって言つてたな。原因は別か？」

時空の乱れが原因ではないかもしれない、と高杉は思った。

「行くしかねエんじゃねーか？ここまで来たら」

銀時は歩き出し、言う。

「さっきの話聞いて、山の上に行ったら元に戻るかどうかもわからなくなってきた。けど、行ってみなきゃそれもわかんねーだろ？」

「そうだな……」

当然かもしれない、とゆうように桂が答え、歩く。

刹那と高杉も、歩き始めた。

ここまで来た以上、進むしかなかった。

どんな結果が待っているとも……。

第22話 戦いの行方（後書き）

遂に、山頂へ…！

そこにあるのは、果たして！？

第23話 山頂（前書き）

短いです。

しかも、駆け足っぽいです。

第23話 山頂

黒く、厚い雲に覆われた空の下、強い風が吹き荒れている何も無い、殺風景な場所。

「ここが山頂のようです……」

山道を登りきり、4匹は山頂へたどり着いた。

「何もねーな。ディアルガもパルキアもいねえし」

銀時は、辺りを見回した。

ディアルガとパルキアが住む空間があるとゾロアークが言っていたが、それらしい物は見当たらない。

「とりあえず、行ってみましょう」

山頂の中心部に歩き出した時だった。

「な……！？」

風が止み、黒く厚い雲が消え、空の色が混沌とした色となり、赤い稲妻が鳴り響く。

「これは、一体……！？」

突然の変化に、桂は空を見上げる。

「おい、あれ！」

銀時が差した先には、ディアルガとパルキアがいた。
ディアルガはときのほうこうを放ち、パルキアは自分の能力で何かをしている。

「何してんだ？」

「時空の乱れを、修復してるんじゃないですか？」

ギラティナが言っていたことを思い出す。

「おまえ達！何故、こんな所にいる！？」

突如ギラティナが現れ、4匹の前に来る。
だが、湖で見た時と姿が違っており、アナザーフォルムからオリジナルになった。いた。

「ギラティナ！？」

「さっきと姿が違うぞ！」

不思議そうに桂が言うと、「そこかよ！」と銀時がツツコンだ。

「ここは、時空の狭間だ。どうやって、来た！？」

「どうやってって…。普通に山を登ってきたら、ここに着いて……」

「何！？」

銀時が言ったことを聞き、ギラティナは驚く。

（時空の狭間には、我々がアルセウスしか行くことが出来ない。だが、それ以前に）

「おまえ達は、平気なのか？」

「何がだ？」

言っていることが分からず、桂が訊いた。

「時空の狭間は、時と空間が複雑に混じり合う空間。何かしらの影響がある筈だが……。なんとも無いのか？」

ギラティナに言われ、自分達の体を見回す。
変わった所は、見当たらない。

「なんとも無いな……」

「どうなっている……？生身の者がそのまま狭間へ来たら、若返るか、老いるかの現象が起きる筈だが……」

「ギラティナ！こつちを頼む！！」

ディアルガが呼ぶ。

ギラティナはディアルガの方を向く。

「後僅かで、時空の乱れの修復が終わる。終われば、この空間から出してやるっ」

翼を広げ、ギリティナは飛んで行く。

「修復は、終わるのか……」

高杉は呟く。

ディアルガとパルキアの争いは、300年前に終わっており、今は時空の乱れを修復している……。

なら、何故自分達はこんな姿になった？

ディアルガとパルキアが今も争っていたら、自分達がポケモンになったことも、この世界に来たことも説明がつくと刹那が言っていたが。

「刹那」

高杉は刹那に声を掛ける。

刹那は高杉が何を言いたいか、すぐにわかった。それでも、聞き返す。

「何ですか？晋助さん」

「話してもらうぞ。おまえのことを」

「わかってます。約束ですからね」

目を少し伏せ、息を付く。

「私は……」

言いかけた時だった。

「どうなっている!？」

「分からねえ!」

「我でも、支えきれん……」

突然、上空で3匹が言い合う。

「どうした!？」

桂が叫ぶと、パルキアが答える。

「空間が崩壊し始めた!このままいけば、おまえ達は勿論、俺達も時空の狭間に飲まれて消える!」

「そんな……!」

「おまえ、なんとか出来ねーのか!？空間の神だろ!」

パルキアに向かって、銀時は叫ぶ。

「無理だ。元に戻っていた物が、突然崩壊することなど、本来ありえない……。悔しいが、俺の能力ちからでも出来ん……」

山頂の端が、徐々に消えていくのが見えた。

「はあっ!」

ディアルガは、青い光を出し、時間を遅くしようとする。が、効果がなかった。

「出来ないか…！」

「反転世界へも、行くことが出来ないのか……」

黒い渦を作ろうとするが、時空の狭間では不可能だった。
出来ないということは、わかっていたが。

「消えるって、死ぬのか…俺達？」

銀時は呟いた。

それを聞き、桂は重く頷いた。

「そうなるな…」

どうすることも出来ず、狭間に消えるのを待つだけだと思った時だった。

「あれは…！」

混沌とした空が歪み、そこから何かが現れた。
それは、大型の白いポケモンだった。

「アルセウス…！？」

第23話 山頂（後書き）

夢の中ではなく、今度は現実にあるセウスが登場しました。

第24話 アルセウス光臨（前書き）

アルセウス活躍！

…にしては、短い……。

第24話 アルセウス光臨

消えゆく空間の中で、その場にいる者達は皆、上空を見上げていた。

「アルセウス…来てくれたのか!？」

ディアルガは呟いた。

アルセウスは、上空からポケモン達を見下ろす。
すると、僅かに目を見開いた。

(何故ここに……!?)

そう思いながらも、アルセウスはディアルガ達の近くに行く。

「空間が崩壊し始め、止めることが出来ない!」

「時も止められない……」

「狭間ニッチから出ることも……」

3匹はそれぞれ言うと、アルセウスは頷く。

「時空の乱れは、修復出来たようだな。これは、時空の流れが正常になった際に起きたようだ」

見ているうちに、辺りは消えていく。

「おまえ達。そこから、動くな」

そう言いながら、アルセウスは体から、光り輝く16枚のプレートを出した。

「あれは、プレートか？」

「あのプレートを使って、アルセウスはタイプを変えられるんだよ」

輝くプレートを見つめ、銀時は桂に言った。
プレートは、次第に金色に光り始める。

「はあっ……！」

アルセウスから放たれた光は、空間全体を包み込み、強く輝いた。

「ここは……！！？」

光が収まり、辺りを見回すと、山の山頂に戻っていた。

「戻ったのか？」

桂は上空を見上げると、雲の隙間から太陽の光が差し込むのが見えた。

ディアルガとパルキアは、アルセウスの前に行く。

「時空の乱れを修復しても、おまえ達にはまだやることが残っている」

アルセウスが言うと、2匹は頷いた。

「この世界で争いを続ける者達を止めよ。そして、破壊された物をおまえ達の能力で戻せば、全てが元に戻る」

晴れてきた空を見上げた後、アルセウスは続ける。

「おまえ達があと100年争っていたら、この世界だけではなく、別の世界の時空も崩壊していただろう」

「おい、待てよ！」

アルセウスが言ったことに違和感を感じ、銀時が叫ぶ。

「別の世界の時空も崩壊していたって、今はまだ崩壊してねえってことか!？」

「ああ。崩壊以前に、時空は乱れてすらいない」

「な…、どうゆうことだ!？」

「時空が乱れているから、俺達はポケモンになって、この世界に来たのではないのか!？」

銀時達は、刹那に詰め寄った。

「断定は、出来ないって言ったじゃないですか」

刹那は、目を逸らす。

そんな様子を、アルセウスは一瞥してからディアルガ達を見る。

「分かっていると思うが、おまえ達のしたことは本来、許されぬことだ」

ディアルガとパルキアは黙って聞いている。

「強大な力は、使い方を見誤れば大変な脅威となる。おまえ達の場合は、時と空間だ。どちらかが消えても、増えても崩壊へと繋がってしまう……。このことを決して忘れるな」

アルセウスは静かに、だが強く諭した。

「…今思えば、愚かなことをしたと思っている」

ディアルガはパルキアの方を見た。

パルキアもディアルガの方を向き、頷いた。

「俺もだ。目先のことしか考えず、事態を大きくしちまった……」

パルキアは、陸地も見えない海を見つめた。

「海の方こうは、争っているんだっ たな」

背中の翼を大きく広げ、前に出る。

「争いは、俺が止める。破壊された物の修復は、ディアルガがやってくれ！」

「いいだろう……」

ディアルガが答えてすぐ、パルキアは陸地に向かって飛び去った。

それを見た後、ディアルガも飛んで行く。

「行ったか……。ギリティナ。おまえは、これまで通り世界を支え続ける」

「分かっている。やっと静かになるな……」

ギリティナは飛び立ち、4匹とアルセウスを見てから、湖へ飛んで行った。

「行っちゃったな。あいつら……」

ため息をつきながら、銀時が言った。

「時空の乱れが原因じゃねえなら、俺達はこの後どうなる……」

高杉は呟くように言う。

だが、疑問を言ったのではなく、焦燥を口にしたと言った方がいい。

「この世界で……、一生ポケモンとして生きるしかない……。とゆうことになるな」

流星の桂も、この状況に焦りの色を隠せなかった。

「どうすりゃいいんだ……」

元の世界に帰ることも、人間に戻る方法も手がかりも無くなり、絶望感だけが広がる。

「……気になっていたが、おまえ達は人間だな」

突然、アルセウスが言ってきた。

「ああ。元人間だ……」

投げやりな感じに、銀時は答えた。

「そうか……。やはり、おまえ達は、あの時の……」

「あの時？」

「おまえ、俺達のこと知ってんのか？」

高杉と銀時が不思議そうに聞き返したが、アルセウスは答えず、逆に訊いてきた。

「何故、魔獣の姿になっている？」

「魔獣？」

「ポケモンのことだと思います」

小声で刹那が言った。

銀時は、叫ぶように答えた。

「何日か前、朝起きたらこうなってた！それで、この世界に来ちまっただよー！」

「…そうか、そうゆうことか……」

アルセウスは、何かに納得した様子を見せる。

「過ぎ去った日々を思い出し、この者達を魔獣にしたか……」

「は!？」

「何を言っている……!？」

「だが、魔獣に変えようと、仮に人の姿に戻ったとしても、この者達の中におまえはいない」

話しながら、アルセウスの視線が動く。
視線の先を見て、振り返る。

「刹那……!」

アルセウスは刹那を見据えており、刹那は少し俯いている。

「それは、おまえがよく分かっている筈だろう。イヴよ……」

第24話 アルセウス光臨（後書き）

刹那の過去が明らかに！
ちゃんと書けるかな…。

第25話 刹那の過去（前書き）

ついに、刹那の過去が明らかになります！
彼女は、一体何者なのか…。

第25話 刹那の過去

「イヴ……？」

アルセウスが刹那を呼んだ名を、銀時が呟く。

「分かっています。アルセウス」

顔を上げ、刹那は答える。

どこか、悲しそうな表情をしている。

「刹那！さっき、アルセウスが言ったことは本当か！？おまえが…、俺達をポケモンにしたとゆうのは……」

困惑した様子で、桂は刹那に詰め寄る。

「本当です。私が、あなた達をその姿に変えました」

「何の目的で、俺達をこんな姿にした？アルセウスの口振りから、てめエの名は偽名のようなのだが…」

殺気立たせて、高杉は理由を訊く。

「偽名じゃありませんよ。及川刹那とゆう名は、あなた達の世界で
の名。イヴは、私があなた達の世界に来る前の名。だから、どちら
も私の名前です」

「俺達の世界に来る前って、おまえ何者だ！？やっぱり、あの金髪

のガキなのか!？」

夢で見た少女が脳裏に浮かび、銀時は疑問をぶつける。

「あれが、イヴだった頃の私です。私の目的はただ一つ。…あなた達に会うこと」

「俺達に会うこと……?」

「そう。私が何者、と訊きましたよね。私は」

「イヴ。話している所悪いが、ここを離れた方がいい」

話しの途中で、アルセウスが割り込んでくる。

「人間が…、それも魔獣になった者が長くこの場にいれば、その者達は二度と人間に戻る事が出来なくなる」

「は!?! 戻れなくなる!?!」

「そうだ。この山頂は、時空の力が溢れている。人間や普通の魔獣が長くいれば、その身に影響が出てくる」

アルセウスは、空中に次元の渦を発生させる。

「おまえの空間でいいか? イヴ…」

刹那は、首を振った。

「いいえ。まだ、話が終わっていません。行くのは、その後にして

下さい」

それから、と続ける。

「彼らの前では、及川刹那でいさせて下さい」

「分かった。では、私の空間に行くぞ」

次元の渦が消え、アルセウスの目が輝くと、その場にいた者が全員消える。

やって来た場所は、宇宙空間にも似た所だった。

紅や蒼、紫といった様々な色が混ざり合い、その中にガラスのような小さな欠片が無数にある不思議な空間だ。

「ここが……アルセウスの空間か」

桂は、空間を見回す。

空間の中に、全員浮いた状態で立っている。

「この場なら、時空の影響は受けない。刹那、続けていいぞ」

そう言うと、アルセウスは少し下がる。

「さて……。私が何者、とゆう所からでしたね」

刹那は、銀時達の前に出る。

「本当は話すつもりは、ありませんでした。あなた達の中に、私は

いないから……」

「アルセウスも言っていたな。俺達の中に、おまえがいないとは、どうゆう意味だ？」

気になっていたことを桂が訊くと、刹那は寂しそうに微笑む。

「言った通りの意味です。私は、あなた達を知っている。でも、あなた達は私のことを忘れ、いいえ、知らないとゆうことです」

「忘れた？」

銀時は、言い直した所を口にした。

「正確には、『存在が消えた』んです。だから、私はあなた達の中にいない……」

「存在が……消えた？」

怪訝そうに高杉が言うと、刹那は頷く。

「何者か、と訊かれたら、私はこう答えます。『咎人』と」

「咎人……？」

「そう……。私はイヴの時、そして、及川刹那の時に大きな罪を犯したんです」

刹那は、自分の過去を話し始めると、空間に漂う欠片が白く輝き、全員を包み込んだ。

刹那、いやイヴが生まれた世界は、古代ギリシャ風の世界だった。その世界の、ある国の神殿に赤子の頃捨てられ、そこで育てられたと聞く。

イヴは生まれつき、波導を感じることができ、ポケモン…魔獣との会話が出来た。

「えーっと、こっちは……」

イヴは外に出て目を閉じると、辺りを見回す。目で見えるより、波導で見た方がよく見えるからだ。

「うん。周りには、悪い人はいない」

そんなイヴの様子を、神殿から見る者が何人かいる。

「まだ3つなのに、あそこまで波導が使えるとは……」

「『超克くわくの力』を使わず、魔獣と会話が出来るらしい」

「末恐ろしい子だ」

イヴは、幼い頃からこのようなことを陰で言われていた。それでもイヴは、気にしなかったが。

「じつとして……」

怪我をしたニドラン♀に、イヴは手を翳す。

すると、傷が消え、ニドラン♀は森へ戻って行く。

「早く出来るようになった……」

5歳になったイヴは、傷や病を癒やす力が使えるようになっていた。

「イヴ！怪我人だ、すぐに来い！！」

神官に呼ばれ、イヴは神殿に戻る。

「落石で、何人もの怪我人がある。傷の酷い者を治せ、いいな」

「はい……」

歩きながら、答える。

表情が険しくなり、近くにあった白い布を体に巻くと、イヴは怪我人の治療を始める。

「治りましたよ」

何人目かの傷を治した時、別の部屋へ運ばれる少女が見えた。

「あの人は……？」

「もう、手遅れだ。助からない」

イヴは、運ばれていく少女を見つめ、その後について行く。

少女が運び込まれたのは、銀時が夢で見た石造りの部屋だった。

「あの人は、まだ生きてる」

感情表現の乏しいイヴだが、人を助けたい、役に立ちたい、とゆう
思いは強い。

青緑色の目が鋭くなり、台の上に寝かされている少女の前に行き、
口元に手を当てる。

（息をしてない…！でも、まだ間に合う……！）

目を閉じ、胸の前で両手を合わせ、その手を少女に翳した。
すると、白い光が輝き、暗い室内が明るくなる。

光が消えると、少女の傷が無くなり、目を覚ました。

「あ…。怪我、治りましたよ」

「あなたが…私を？……ありがとう」

イヴは一瞬、何を言われたのか分からなかったが、僅かに微笑んだ。

「ど、どういたしまして！」

少女に、深く頭を下げた。

今まで、ありがとうと言われたことがなかったイヴは、その言葉が
とても嬉しかった。

「今日は、ちょっと疲れちゃった…」

怪我人の治療が終わった夜、イヴは神殿の外に出る。

「良かった。怪我が治せて」

自分の両手を見ていると、周囲が暗くなった。

辺りを見回し、上を見上げると、そこには、アルセウスがいた。

「アル…セウス…？」

アルセウスは、イヴの前に降り立った。

「おまえ…、人の命運を変える力があるようだな」

「え…？」

「死した者を、蘇らせただろう」

その言葉に、イヴは目を見開く。

（あの人…死んでいたの…！？）

「どうやら、知らずに使ってしまったのだな」

アルセウスは、イヴを静かに見つめた。

「名は、何とゆう？」

「イヴです…」

「イヴ。その力は、神の力に等しい物。そして、おまえの感情で、生かすことも殺すことも出来る多大な力だ。使い方を見誤ってしまわないようにな」

「はい…！」

この力を、沢山の人を助ける為に使おうと、この時のイヴはそう考
えていた。

第25話 刹那の過去（後書き）

次の話から、銀時達が出てきません。
当然かもしれませんが。

過去の話は、しばらく続きます。

第26話 禁忌（前書き）

イヴの罪…。

ハガレンや地獄少女を参考にしたので、知っている方はこれは、あそこだ、と思う所が多々あると思います。

第26話 禁忌

イヴがアルセウスに出会ってから、2年が経った。

「超克せよ、時空のさだめを」

胸の前で手を組み、目を閉じた。

波導を使っている時より、澄んだ青い空間の中で、イヴは目の前にいるカイリユーと対峙する。

（あなたの仲間のミニリユウは、無事です。暴れないで下さい）

組んだ手を離すと、イヴは怪我をしたミニリユウを連れてくる。

「すぐに、怪我を治しますから」

両手を怪我の部分に翳し、傷を治す。

「さあ、これで大丈夫です」

ミニリユウを抱き、カイリユーに差し出した。

カイリユーはミニリユウを受け取ると、一声鳴き、海の方こうへ飛んで行った。

「カイリユーの怒りは、収まりました。もう大丈夫です」

イヴが後ろを向くと、歓声が上がった。

「さすがです！イヴ様」

「イヴ様のおかげです！」

集まった人が、口々に言った。

この2年間、イヴはアルセウスの言った力と癒やしの力を使い、多くの人や魔獣を救ってきた。

その為イヴは、国中の人々から敬われ、慕われた。

「困ったことがあったら、何時でも呼んで下さい」

イヴは微笑み、歩き出した時。

「うつ……！」

胸が突然、苦しくなり、その場にうずくまる。

「イヴ様！？どうされました！？」

人々が駆け寄ってくる。

なんとか立ち上がり、イヴは「大丈夫」と言い神殿へ戻って行った。

「昨日の胸の痛みは、何だったんだろう……」

翌朝。起きてすぐ、自分の胸を触れてイヴは考える。

（もしかして、この力のせい……？）

そう思っていると、

キイイイン

高い、金属のような音が聞こえた。

「これは……」

目を閉じ、波導で見る。

空間が裂け、何かが出てくる。

「間違いない！」

イヴは寝巻き姿で神殿の外に飛び出し、見えた方向へ走り出す。
胸が少し痛み、顔をしかめた。

（苦しい……。でも、あと少し）

走り続け、崖の近くで立ち止まり、上空を見た。
そこには、アルセウスがいた。

アルセウスは、イヴに気付き、降りてくる。

「イヴ。神の力を、どう使っている……？」

アルセウスの問いに、イヴは手を胸の前で組み、目を閉じた。

「超克せよ、時空のさだめを」

イヴは、2年の間、救ってきた者達の姿を見せた。

「大勢の者達を救ってきたのだな」

「はい！」

組んでいた手を下げ、頷いた。

「その力を使っていて、自身の身に違和感はないか？」

訊かれたことに、少し俯きながら答える。

「昨日、胸が苦しくなりました……」

「そうか……。どうやら、その力は、おまえの命を削って発動しているようだ」

「私の命を……？」

「そうだ。生命を操る力は、使用者に大きな代償を伴う」

これまで自分は、命を削って人や魔獣を救ってきたのか……。イヴは、胸に手をやった。

「つまり、使えば使う程、私の命が減っていくのですか？」

「そうなる」

命。つまり、寿命が減っていくとゆうことは、それだけ死期が近くなることを示す。

衝撃的だが、考えたことが無い訳ではなかった。

「それでも……」

イヴは顔を上げ、アルセウスを見据えた。

「私は、この命が尽きるまで、沢山の人や魔獣を救いたいです」

アルセウスは、イヴの覚悟を秘めた強い目を見る。

「誰かを救えば、自身の命はいらぬとゆうことが……」

「はい……！」

大きく頷くイヴを見て、アルセウスは後ろを向く。

「おまえの好きなようにするがよい」

肩越しに振り返り、言った。

「それと、もう一つ。神の力は、生かす力と殺す力の他に、まだある」

「どんな力ですか？」

「消す力……。存在そのものを滅する力だ。これは恐らく、生涯に一度しか使えぬ技。そして、禁術だ」

「禁術？」

「存在を消してしまえば、それまでいた生き物は『いなかった』ことになり、物質は『なかった』ことになってしまう。故に、その力は決して使ってはいけないよ」

「分かりました。約束します」

アルセウスは前を向き、上空へ飛ぶと、自身の空間へ帰って行った。

それから、8年後。

15歳になったイヴは、以前と同じように人々や魔獣を救い続けていた。

だが、それは彼女の命を確実に削っており、時折倒れそうになることもあった。

（私の命が尽きるのも…、あと僅かかもしれない……）

「でも、死ぬのは…この伝染病を無くしてから…！」

今、この国では伝染病が猛威を振るっており、大勢の人が死んでいた。

イヴの力が追いつかない程に。

「イヴ様、こちらです！」

寝かされている人々にイヴは、駆け寄る。

息のある者には、癒やしの力を、息絶えた者は蘇生をした。

「くっ…！」

蘇生をする度に、胸が苦しくなる。

苦しみの間隔は、その都度短くなっていく。

「はっ…はっ…う……」

数人を蘇生させた後、イヴは苦しみのあまり、とうとう倒れてしま
う。

「イヴ様！しっかりして下さい！！」

周りにいる者達は、すぐにイヴを連れて、別の部屋に運び、ベッド
に寝かせた。

「イヴ様が、倒れたらしい…」

「大丈夫だろうか…」

イヴが倒れたことは、国中に知れ渡った。

国民の全てがイヴを心配する中、ただ一人心配をしない者がいた。
この国の王だ。

王は、イヴが幼い頃から彼女のことを目の敵にしていた。

いつか、この国を滅ぼすのではないかと……。

「イヴが倒れたらしいな」

王は、冷たく吐き捨てる。

「このまま、あの小娘が死ねば、我が国の長年の不安は消える」

だが、王の思いとは裏腹にイヴは死なず、苦しみながらも、人々や
魔獣を救い続けていた。

「何故死まない！！」

苛立ちを隠せず、王は叫ぶ。

「あの娘は、必ず災いを呼ぶ！何故、何時まで経っても死なない！
！」

全て、王の思い込みだが、イヴが災いを呼ぶと王は確信していた。

（早く死ね…！どうしたら、すぐに死ぬ…）

「そうだ…。簡単なことではないか」

自分の手でイヴを殺す。

これしか方法はない。でなければ、国が滅びてしまう。
被害妄想にとりつかれた王は、すぐにイヴの処刑を命じた。

「何故、イヴ様を！？」

「あの方は、国民や魔獣を救っているのに…」

側近達は皆、イヴの処刑に驚き、困惑した。

「あの娘は、悪魔だ。今まで、我々を惑わせていたのだ！この伝染病も、あの娘が自分で広め、あたかも己が治したかのように振る舞っているに違いない！！」

「しかし…」

「さつさと処刑しろ。おまえ達や国民は、悪魔の娘に惑わされているんだぞ」

口ごもる側近に、すれ違いざまに王は言った。

「やらなければ、おまえ達も悪魔の仲間として、処刑するぞ」

脅しではなく、王は本気だった。

側近達は、仕方なく弱ったイヴを神殿から連れ出して行った。

「止めて、離して！」

後ろ手に縛られ、イヴは必死に叫ぶが、聞き入れてもらえなかった。

「きゃあっ！！！」

深夜の神殿裏に連れて来られ、イヴが見たのは、松明に照らされた大きく掘られた穴だった。

「これより、この悪魔の娘が二度と悪さが出来ないよう、生き埋めにし、封印する！！！」

王の言葉に、イヴは目を見開き驚く。

「待って下さい！私は、悪魔なんかじゃない！！言いがかりです！！！」

「悪魔の声に、耳を傾けるな！」

王はイヴの言葉を無視して、言い放つ。

「だ、誰か…。助けて！私は、苦しむ人達をまだ助けたいのに…！！！」

助けを求めるイヴを国民達は、ただ見ている。
皆、王の報復が恐ろしいからだ。

「助けて……っ!!」

叫ぶイヴを側近達は、穴の中に突き落とした。

（どうして……？）

地面に落ち、痛みと土の冷たさが同時に感じられた。

（私は、あなた達をずっと助けていたのに……）

「土を掛けるーっ!!」

その声に、はっとして、再び叫んだ。

「止めて、お願い！助けて!!」

もがき、後ろ手に縛られていた縄を解き、立ち上がる。
その直後に、頭上から大量の土が降ってくる。

「いや…、止めて!!」

降ってくる土を払いのけるが、大きめな石が頭に当たり、倒れてしまふ。

「な……」

倒れたまま、上を見た。

そこには、つい先程、イヴが治療をした者達が土をかぶせる姿があった。

（どうして…。私は、沢山の人や魔獣を救いたかっただけなのに…）

埋められながら、イヴの心は悲しみと絶望で溢れかえった。

「ゆ…るさ……ない」

無意識に呟いた言葉と共に、悲しみと絶望が別の感情に変わっていった。

「イヴ…？」

自身の空間の中にいたアルセウスは、イヴの声が聞こえた気がした。それも、憎悪に満ちた。

（何かあったのか…？）

胸騒ぎがし、アルセウスは空間から出て、イヴの住む国へ向かった。

「さあ、これで悪魔の娘は封印され、この国は救われた！」

穴は完全に埋められ、王は穴があった場所の前に立つ。

「悪魔が広めた伝染病も、これで消える」

言いかけた時、突然、後ろから大きな音と土煙が上がった。

「何だ…！？」

周りにいた者達は、穴を見る。

イヴの上に乗っていた土や石が、全て吹き飛んだ。
ゆっくりと、イヴは立ち上がった。

その目は鋭く、怒りと憎しみに満ちていた。

「イヴ……！」

「蘇ったぞ……」

イヴの姿を見た者達は、口々に言った。
王は、イヴを見て恐れおののく。

「悪魔はまだ、死んでいない！殺せ、すぐに殺せ！！」

「……私は死なない」

手を前に出し、そこから血のように赤い、禍々しい光がほとばしる。
アルセウスが言った禁術、消す力だ。

「おまえ達などに、殺されたりはしない！！」

「イヴ！その力を使えば、おまえは……！！」

駆けつけてきたアルセウスは叫ぶが、怒りと憎しみに支配されたイヴには届かない。

次の瞬間、赤い光が強く輝き、国全体を包み込んだ。

「これ程の物とは……！」

光が消えると、神殿や街は勿論、イヴを除き、人間が一人残らず消え去っていた。

アルセウスはイヴの犯した、禁忌にして重すぎる罪を呆然と見つめた。

第26話 禁忌（後書き）

前書きで、ハガレンがって言いましたが、正確には、ハガレンのゲーム、『神を継ぐ少女』が参考です。

第27話 消せない罪（前書き）

ハガレン第1期のED!?

と、ゆうようなサブタイですが、これ以外思い付きませんでした。
ちよつと直しました。

第27話 消せない罪

「……そして、私は禁術とされた力を使い、国の存在そのもの消し去ったんです」

イヴとしての過去と罪を、刹那は一通り話し終えた。話し終わると、欠片の光は消えた。

「おまえ……。そんな理不尽な目にあつたのか……」

悪魔呼ばわりされ、助けた者達に裏切られたイヴを見て、銀時は刹那を苦しそうに見つめた。

「話だけじゃなくて、あの欠片の力で、私の過去が見えたようですね。……だからあの時、私は衝動的に禁忌とされた力を使うことに、躊躇いはありませんでした」

「話しの規模が大きすぎて、ついていけんな……」

国の存在を消してしまった過去を持つ、刹那の話に桂は困惑気味になる。

「全て消え去って欲しい。殺したり、壊したりしたら、その跡が残ってしまうから」

そう話しながら、高杉を見る。

「私が一昨日、『壊してどうするの』と訊いたのは、国を消した私

に、壊すとゆう概念がよく分からなかったからです」

「分からなかった？」

「そう。今まで、治すか戻すかのどちらかと、消すとゆう2つしかしたことがなかったから……」

「…そういや、おまえ、俺達のこと知ってるって言ってたな。何時会ったんだ？」

刹那が自分達のことを知っている、と言ったのを思い出し、銀時が訊いた。

「会ったとゆうより、一緒に過ごしていたんですよ。……松陽先生と」

最後の一言に、3匹は目を見開き、驚いた。

「な……！？」

「一緒に過ごしていた……！？」

「何で、おまえが先生のことを……！？」

一緒に過ごしていたという、予想外のことにとただ驚愕するばかりだった。

刹那は、話を続ける。

「順番に話します。また欠片が、私の過去を映すと思いますけど」

再び過去を話したすと、欠片が白く輝いた。

「イヴ……」

朝日の登った、神殿の跡地にアルセウスは降り立ち、声を掛ける。
イヴは振り返り、アルセウスの前に来る。

「アルセウス……」

「おまえ……」

言いかけた時、イヴは頭を前に出した。

「何のつもりだ……？」

「私を裁いて下さい」

この言い回しに、アルセウスは驚いた。

自分の感情に任せて、大罪を犯した者がこのようなことを言うとは。

「私は、あなたとの約束を破り、禁じられた力を使いました。そして、国中の人間の存在を消し去った。裁きを受けて当然の身です」

アルセウスは何も言わず、イヴをじっと見下ろしている。
イヴは顔を上げた。

「この身を、切り刻むなり、焼くなり好きにして下さい」

「裁きを受ける……。つまり、殺して欲しいとゆうことか？」

「はい……」

「そうか。なら、おまえを裁こう」

イヴは静かに目を閉じ、裁きを待った。

が、痛みのような物は、何時まで経ってもこなかった。
恐る恐る目を開けると、アルセウスは意外なことを言った。

「おまえを殺すことは、出来ない」

「何故ですか！？私は、禁忌を犯したんですよ！！」

「だからこそだ」

アルセウスが何を言っているのか、よく分からない。

「おまえの言う通り、おまえは禁忌を犯し、大勢の人間の存在を消した……。裁くには、罪が重すぎるのだ」

「そんな……」

「おまえへの罰は……生きることだ」

「生きることが罰……！？そんなの、裁きじゃありません！あなたが殺さないのなら、自分で命を絶ちます！！」

近くに落ちていた尖った石を拾い、胸に突き刺す。

しかし、痛みも出血も無く、石を持った感触しかなかった。

「どうして…、死ねないの……っ！」

「生きることが罰だと言っただろう。おまえへの裁きは、もう始まっている」

生きることが罰……つまり、死ぬことが出来ないという 것인가。石が手から滑り落ち、イヴは崩れるように座り込む。

「私は……もう死ねないんですか？」

俯きながら訊いた。

ずっと生き続けることだけは、嫌だった。

「いや。気の遠くなる月日を生きることが、おまえの罰……。その日が来れば、おまえは死ぬ」

本当は、今すぐに殺して欲しかった。

生きることが罰だと、どうしても思えなかったからだ。

「さて、おまえが生きるのは、この世界ではない」

アルセウスはそう言うと、目が輝き、イヴと共に消えた。

「ここは……？」

やって来たのは、見知らぬ土地。

立っているのは、山の上らしく、眼下に畑や集落が見えた。

「おまえは今日から、この世界で生きろ」

アルセウスが言った瞬間に突風が吹き、イヴは目を閉じる。
再び目を開けると、イヴの体に異変があった。

「え…。髪が……」

身長が低くなって、金色のややウェーブ掛かった長い髪が、黒のストレートになっており、服装も橙色の着物姿に変わっていた。

「罰の一つとして、おまえの名と姿を剥奪する。今より、おまえの名は及川刹那だ……」

「せつ…な…?」

（何…その名前……）

「名と姿が変わっても、おまえの声と瞳の色、そして…罪は消えることはない」

「この世界でも、神の力は使えるんですか？」

変わった自分の姿を見ながら、イヴは訊いた。

「消す力は、もう使えない。だが、生かす力は使える。…が、その力をこの世界では使えない」

「使ったら、どうなりますか……?」

「罪は更に重くなり、この世界で出会った者達の記憶からおまえは消え去り、次は…人の姿を剥奪することになる」

人の姿…。次に罪を犯せば、人間ですらなくなるとゆうことが。
アルセウスは飛び立つ。

「消えることのない罪を見つめ、生き続ける。刹那よ」

自身の空間へ帰って行ったアルセウスを見た後、イヴはしばらくその場に立ち尽くしていた。

第27話 消せない罪（後書き）

刹那となったイヴ。

次回のサブタイは『扉の向こうへ』で。

……なんてね。

第28話 悲しみのキズ（前書き）

2話連続で北出菜奈の歌かよ！
な、サブタイです。

今度は『 神を継ぐ少女』の主題歌…。
小説の内容は、短くて完成度は低いです。

第28話 悲しみのキズ

アルセウスが去った後、イヴはとりあえず、山を下りることにした。何時までも、そこにいる訳にもいかないから。

「この世界って、魔獣はいないみたい……」

波導で周りを見て呟く。

姿が変わっても、波導は使えるようだ。

「えっと、新しい名前は……何刹那だっけ……」

アルセウスが付けた名を口にするが、名字が出てこない。

「あいかわ……？違う、おいかわか……」

（変な名前付けたなあ、アルセウス……）

付けられた名をイヴは、気に入らなかった。

（名前を剥奪しておいて、新しく付けるなんて……）

考えながら、山道を歩く。

気付かなかったが、この世界も朝のようだ。

「お腹すいたな……。死なないって言ってたから、飢え死にはしないと思うけど」

山や周りの景色を見る。

先程、生き埋めにされる直前までいた世界は、荒れ地や砂漠の多い、森などの緑が少ない世界だった。

この世界は、ほぼ逆と言つていい所だ。

「あ、池がある」

道から少し逸れた林の中に、小さな池があつた。

水を飲もうと思い、小走りで池の前に行く。

水面に、自分の姿が映つた。

「本当に、目の色は変わってない……」

アルセウスが言った通り、イヴの目はいつもと変わらない青緑色をしていた。

「綺麗な水……。飲んでも平気みたい」

両手で水をすくい、飲んだ。

「あ、美味しい」

元の世界で飲んできた、どの水よりも美味しいと思えた。数回飲んでから道に戻り、再び歩き出す。

『消えることのない罪を見つめ、生き続ける。刹那よ』

アルセウスの言葉を思い出す。

自分の罪が、どんなに重いかをイヴは分かっていた。だからこそ、生かすのではなく殺して欲しかった。

（いつそのこと、近くにいる人とかに力を使おうか…）

神の力を使い、魔獣になってしまふとゆうのを考えたが、辺りには誰もいない。

「あの辺まで歩くしかないか……」

遠くに見える集落を見つめ、イヴはただ歩き続ける。

「やっと下りてこられた……」

体が小さくなったせいか、山道を下りるのにかなりの時間が掛かった。

「少し休もう」

石の上に座り、一息つく。

すると、薄いピンクの花びらが飛んできて、手に取ってみる。

「これ…何の花だろう」

花びらを見ながら上を見ると、薄いピンクの花が一杯咲いていた。

「きれい。こんな花、あの世界には無かったな」

初めて見る花や景色を、もっと見てみたいと思った。

（生き続けろって言ってたから、どう生きてもいいのかな……）

罪を見つめ、と言われた為、そんなことをしてもいいのか、とゆう考えがよぎる。

私は大罪を犯した咎人……。

許される筈がない、許されるつもりもない。

何故、殺してくれなかったの？アルセウス……。

イヴの胸に、悲しみとも憂いともつく感情が湧き上がる。

「罪は…、見つめていきますよ。アルセウス……」

眩き、イヴは歩き始めた。

生き続けるとゆう、罰を受ける為に。

（誰かと会っても、上辺だけのやり取りをしよう。…癒やしの力は、何も言っただけでなかったから、使っても平気かな……）

「ま、使うつもりは無いけど」

付け加えた後は、ひたすら歩き続けた。

体力が続く限り、遠くまで歩いた。

数時間後、空腹と疲労で倒れるまで。

「もう、歩けない……」

今どこにいるかは、当然分からない。

死ぬことは無い為、疲れが無くなったら、また歩こうと考えていた。

「おい、誰か倒れてるぞ！」

「しっかりしろ！」

数人の足音と、子供の声が遠くに聞こえたのを最後に、イヴは意識を投げ出した。

第28話 悲しみのキズ（後書き）

次から、イヴ（刹那）と3人の出会いです。

第29話 出会い（前書き）

タイトル通り、刹那と3人の本当の出会いです。

第29話 出会い

「ん……。ここは…？」

イヴが目覚めたのは、どこかの和室。
布団から起き上がり、部屋を見回す。

「誰かの家…？」

呟いた時、部屋の襖が開き、黒くイヴと同じ位の長さの髪をポニテールにした子と、銀色の跳ねた髪をした子が入ってくる。

「お、気が付いたか！」

銀髪の、今の自分より少し年上位の少年が声を掛けた。

「おまえ、塾の近くで倒れていたんだぞ」

黒髪の子が言いながら、近くに来る。

少女かと思っただが、声を聞いて男だと分かった。

「先生ーっ、あいつ目え覚ましたよーっ！」

銀髪の子が、外に出て叫ぶ。

イヴは、少しビクつく。

「銀時！そんな言い方はするな」

黒髪の子が銀髪の子を咎めた。
少年はイヴのそばに座った。

「驚かして悪かったな。俺は、桂小太郎。さっきのは、坂田銀時つて言っんだ。おまえは？」

「い…じゃなくて、及川…刹那……」

名前を訊かれ、イヴと名乗りそうになったが、すぐに言い直した。

「ふーん、刹那か。よろしくな！」

手を出され、とりあえず握手をした。

「おい、ツラ！さっきのつて言い方はねーだろ！！」

自分を紹介した際のやり取りを聞いて、銀時は怒る。

「ツラじゃない、桂だ！その場にいなかった貴様が悪い！！」

銀時と桂が騒いでいると、灰色掛かった長髪の男性とその後ろから紫の髪をした、イヴとあまり変わらない身長少年が入ってくる。

「あ、先生。と…高杉」

銀時が入ってきた2人に気付く。

「俺はついでかよ！」

高杉と呼ばれた少年は、何かを載せた盆を持っただま言い返す。

「3人共、静かにしなさい。あの子は、起きたばかりなんですよ」

男性に言われ、少年達はすぐに大人しくなった。

「気分はどうですか？」

イヴの近くに座り、男性が訊いた。

「あ…、大丈夫…です」

怯えたように、ぎこちなく答えた。

（早めに、ここから出て行こう…）

「この子達が、あなたを連れてきた時は驚きましたよ。かなり、衰弱していましたから」

（え…。そんなに…？）

空腹と疲労だけだと思っていた為、少し驚いた。
尤も、死ぬことは無いのだが。

「挨拶がまだでしたね。私は、この学舎で講師をしている吉田松陽と言います。あなたの名前は？」

やっぱり訊かれたか…。

イヴは、再び名乗った。

「…及川刹那…です」

「刹那…ですか。どこから来たんですか？」

「遠い所から、です」

それしか言いようがなかった。

別の世界から来たと言っても、信じられないだろうし。

「遠い所、ですか。じゃあ、家族は？」

「いません。私は…捨て子だと、言われていました」

何で、そんなことを訊いてくるんだろうと思いつながらも、イヴは答えた。

「他に行く所は、ありますか？」

その問いに首を振ると、思いもしない言葉が返ってきた。

「良かったら、ここにいませんか？」

「え？」

突然の申し出に、イヴは困惑した。

「無理に、とは言いません。刹那の好きにしていいいですよ」

行く所は無い、でもここに居たいとゆう気持ちは、あまり無い。罪を見つめて、生きていくつもりなんだから。

「ここにいればいいじゃん」

横から、銀時が言ってくる。

「刹那が決めることだろう。おまえは、口出しするな」

そう言うと、桂は銀時を軽く叩いた。

「私は……」

迷いながら呟くと、高杉と少し目があう。

高杉はすぐに、目を逸らした。

（私と似たような目の色してる……）

「ここにいようかな……」

何の気まぐれだったのだろう。

理由は、自分でもよく分からない。

口が、勝手に動いたような感じだった。

「そうですか、分かりました。では、明日からの用意をしておきま
すね」

松陽は、そう言うと部屋から出ていく。

イヴはその様子を見ていた。

「高杉、それ刹那に出すんじゃないのか？」

桂は高杉が持っている盆を、指差した。

「あ、そうだった!」

ほらよ、と言うように盆をイヴに渡す。

盆には、温かい緑茶と大福が載っていた。

(何これ…?)

初めて見る食べ物を、不思議そうに見ながら盆を受け取る。

出された以上食べた方がいい、その前に空腹だ、などと考えながら、大福にかぶりつく。

(甘い…。それに、美味しい……)

初めて食べた大福に、口元を綻ばせ、イヴは食べた。
食べ終わった後に飲んだお茶も、美味しく感じられた。

「ごちそうさま」

盆を布団の外に置いた。

と、3人の視線が自分に向いているのに気付く。

「あ…、えつと……」

何を話していいか分からず、口ごもってしまう。

「刹那…だっけ。おまえ見つけたの俺ね」

銀時が自分を指差して言った。
その隣で、桂も言う。

「背負って来たのは、俺だけだな」

「そう…なんですか？ありがとうございます」

「堅苦しいな。敬語じゃなくていいぜ」

銀時が言うと、イヴはいいえ、と言って首を振る。

「私の方が年下みたいですし…」

「真面目だなア」

「おまえも、見習ったらどうだ！」

興味なさげに言う銀時に、桂が横目で見る。

「年下を見習いたくない」

私の方が年上かもしれないけど、とイヴが思っていると、高杉とまた目があう。

「そう言えば、あなたの名前まだ訊いてなかったんですけど…」

「そうだったけ？…俺は、高杉晋助ってゆうんだ。よろしくな、及川」
下の名前ではなく、名字で呼ばれたが、イヴも「よろしく」と答えた。

「刹那。おまえは、遠い所から来たと言っていたな。分からないこ

とがあつたら、すぐに言えよ」

イヴに向き直り、桂が言った。

「あ…、はい…」

具体的に何をするのかは分からないが、松陽が明日の用意をすると言っていた。

ここにいる、と答えた為今日からこの場で、及川刹那として生きていくのか、とイヴは思った。

第29話 出会い（後書き）

これから、どう書くか悩みそうです……。

第30話 変化する心（前書き）

イヴ（刹那）との交流…。
書くのが、難しかったです。

第30話 変化する心

次の朝、イヴは松陽に連れられ、学舎の教室に案内された。

前の日。

あの後、銀時達と夕食を食べたが、やはり初めて食べる物ばかりだった。

まずくは、なかったのだが。

食事の後、桂と高杉は自宅に帰って行った。

「刹那。銀時と同じ部屋で寝てくれませんか？」

「え……！？」

寝る時に、銀時と同じ部屋に寝るよう松陽に言われた時は驚いた。今まで、誰かと同じ部屋で寝ることなどなかったからだ。

「眠れない……」

なかなか寝付けず、イヴは部屋から出ると縁側に座った。

部屋では、銀時が物凄い寝相で寝ており、離れて寝ていても、こちらに来そうな程だった。

（月…綺麗だな）

昨日の今頃、自分は悪魔と言われ、生き埋めにされた。そして、大罪を犯した……。

「はあ…。あれが無ければ、私は…」

「刹那？」

声に驚き、振り返ると、松陽が近くに立っていた。

「せ、先生…？」

「眠れないんですか？」

そう言いながら、イヴの隣に座る。

「怖い目にあっただんですか…？」

「え…？」

イヴは、思わず松陽の顔を見上げる。

「最初に会った時、あなたはとても怖がって、怯えていましたから」
確かにそうかもしれない、とイヴは思った。

埋められる際に、大勢の人に土を掛けられた時、強い恐怖を覚えた。

「そう…です…」

答えながら、涙が出てきた。

あまり気づかなかった、心に大きな傷があることを……。

「刹那が来る少し前に、銀時を拾いました。あの子は、『屍を食ら

「鬼』と呼ばれていたんです」

「おに…?」

聞いたことが無い為、不思議そうに呟く。

「周りの者達が、勝手にそう呼んでいただけなんですけどね。銀時はただ怯えて、自分を護っていたに過ぎないんです」

「それだけで…?」

鬼の意味は、よく分からなかったが、決断していい呼び名ではないのは確かだ。

「銀時さん…ちょっと私に似てるかも…」

「どうしてですか?」

「私は…、悪魔と呼ばれて、生き埋めにされたから……」

言っと思わず、はっとする。

（何話してるんだろう私。人との付き合いは、上辺だけにしようっと思っていたのに）

「生き埋めに…!?!」

最後の言葉に松陽は、とても驚いた。

（埋められたのに、何で生きてるんだ、とか言うのかな…）

だが、イヴの想像とは裏腹に松陽はイヴの頭に手を置いて、思いも
しなかったことを言った。

「よく、生きていましたね」

「!？」

「生きているから、あなたは今、ここにいるんですよ」

「悪魔だと…思わないんですか!？」

その問いに、松陽は微笑んだ。

「あなたは、刹那でしょう。銀時も、鬼ではなく人間です。勿論、
刹那も」

（何だろう…これ。安心…する感じ？）

「いい名前を持っているのに、悪魔だなんて言わないで下さい」

「いい…名前？」

「ええ。刹那とゆうのは、一瞬と同じ意味の言葉です。あなたも、
名前の通り一瞬、一瞬を大切に生きて下さい」

この人は、不思議な人だ…。

付けられた名を気に入らず、変な名前だと思っていたのに、この名
前を大切にしようと思う自分がいる。

「はい…！」

涙を拭き、イヴは頷いた。

「さあ、もう遅いですし、早く寝なさい」

松陽は、イヴを部屋の中に入れた。

銀時は相変わらず、凄い寝相で寝ている。

「銀時にぶつからないようにして、寝た方がいいですね」

そう言いながら、松陽は銀時をちゃんと寝かせ、イヴの布団を離れた場所に移す。

「明日の朝、教室に案内しますね」

部屋から松陽は出て行き、イヴは布団に入った。

「いい名前か…」と呟いて、眠った。

「刹那、入りますよ」

イヴは、朝渡された教本を持って、松陽と共に教室の中に入った。

「今日から、皆さんと勉強する及川刹那ちゃんです。仲良くして下さいね」

「よ、よろしく願います！」

松陽に紹介され、イヴは頭を下げた。

「じゃあ席は、一番後ろの真ん中で」

空いている席を指され、イヴはその席に行き、座った。

「では、昨日の続きから始めます」

教本を開く音と共に、数人がイヴを振り返って見る。

（何で見てるの…？そんなに珍しい？）

視線がやや気になったが、教本を開いき、部屋を見回す。

（小太郎さん、真面目だなあ。しっかり聞いている）

視線を左に移し、高杉の方を見る。

（晋助さん、ずっと先生のこと見てる。好きなのかな…）

少し横を向き、銀時を見た。

（ね、寝てる…！あんなに寝てたのに、もう寝てるの！？）

「では、今日はここまでにします」

（え？もう…！？）

銀時達を見ていたせいか、授業は殆ど聴いていなかった。

「昨日話したと思いますが、この後、お花見に行きます。皆さん、

行く用意をしておくんですよ」

「お花見？」

昼食の後、近くの山に花見に行くらしい。

イヴは、花見を知らない為、どんなものなのか楽しみだった。

「皆さん、集まりましたね。出発します」

歩き始めてすぐ、イヴの近くに桂が来る。

「刹那、花見は初めてか？」

「あ…、はい」

「そうか。山の上だから、桜が綺麗だぞ」

「えっと…、桜？花の名前…ですか？」

桜が分からず、イヴは訊いた。

「あのピンクの花だよ」

銀時が歩いてきて、遠くに見える薄いピンクの木を指差す。

「昨日見た花…。桜ってあれだったんだ……」

「一杯咲いてるぞ、桜」

「本当ですか？楽しみです」

しばらく歩き、近くの山、と言っても小高い丘のような所に着く。

「あまり遠くに、行かないようにするんですよ」

松陽が一言注意を言った後、子供達はそれぞれ遊びだす。

イヴは、桜の木に登り、枝の上から花を見た。

「及川く、そんなとこで何やってんだ？」

木の下に、高杉が来てこちらを見上げている。

「ここなら、花がよく見えるかなーって思ったんです」

「落っこちるなよー！」

「何してんだ？」

銀時が桂と一緒に来て、訊いた。

「及川が木に登ってんの見てんだよ」

「俺も登るか」

そう言うと、銀時も木に登り始めた。

桂は登らず、見ていた。

「あ、銀時さんも来たんですか？」

「ああ。眺めよさそうだし」

「眺めが目当てですか？花じゃなくて…」

呆れたように言った時だった。

バキッ！

子供2人の重さに耐えられず、枝が折れた。
銀時は、そのまま桂の上に落ちた。

「いてて…」

「痛いのは、こっちだ！早く降りろ！！」

イヴは折れた枝にしがみついている。

「及川！そのままではいられよ、すぐ先生呼んでくるから！！」
走り出そうとする高杉は、イヴに叫ぶ。

「でも、晋助さん…。もう…限界です………」

しがみついていた枝から、イヴはずり落ちる。

「あ………」

「及川！」

走ったが、間に合わなかった。

落ちたイヴは、痛そうに足を押さえている。

「痛い……」

「刹那！大丈夫ですか？」

松陽は、すぐに駆けつけ、様子を訊いた。

「ちょっと、足が痛いです。……ごめんなさい」

俯くイヴに、松陽は微笑んだ。

「謝らないで下さい。大した怪我ではないですし、これから、気を付けるんですよ」

「はい……」

「皆さん、刹那が怪我をしたので、そろそろ帰ります！」

子供達を集めた後、松陽はイヴを背負った。

「……刹那、悪かったな。俺が登ったから、枝が折れたんだ」

少し負い目を感じているのか、銀時がそつと言った。

「銀時さんのせいじゃないです。私が、木に登ったのがいけなかったんです」

「でも、ごめん……」

銀時は、それでも謝っていた。

（もついいのに…）

帰り道、イヴは松陽に背負われている。

他の子供達から、心配そうに声を掛けられる。

（背負われるのって初めてかも…）

遠くの景色を眺めながら、ふと思った。

『いい名前』、『一瞬、一瞬を大切に生きて下さい』 昨日の松陽の言葉を思い出す。

名前を褒められたのは、初めてだ。

少し、好きになった。

及川刹那とゆう名前が。

第30話 変化する心（後書き）

今まで、ずっとイヴと書いてましたが、次から刹那になります。

第31話 穏やかな日々（前書き）

過去を書くのって本当に大変だ…。

他の方々は、よく書けたなあと思うつくづく思います。

第31話 穏やかな日々

名前が少し好きになってから、イヴは刹那でいようと決めた。
理由は、松陽に名前を褒められたことや、銀時達に自分個人を見て
もらえたからだ。

「小太郎さん、もうすぐ誕生日なんですか？」

刹那が、この世界に来て約2ヶ月が経ったある日のこと。
教室で、銀時と高杉の話を聞いて、刹那が言った。

「声がでけーよ」

「ヅラには、言うなよ」

「え？どうしてですか？」

言っている意味がよく分からず、首を傾げる。

「内緒にして、驚かそうと思ってんだ！」

銀時が言い、なんとなく事情が見えた。

「お祝いするんですね」

「だから、声がでけーって！」

「おまえの声がでけーよ」

そう言いながら、高杉は銀時の頭を殴る。

「おまえ達、何をしているんだ？」

桂が来て、3人に声を掛ける。

当然かもしれないが、3人はビクついた。

「あ、えーっと、今日、高杉んちでおやつご馳走になりに行こうって言ってたんだ！」

銀時が咄嗟に言った。

高杉は、「勝手に何言ってたんだ！」とゆう顔をする。

「そうなのか？じゃあ、俺も行く。…刹那もこいよ」

「え？はい…」

「さてと、先生の所に行くんだった」

呟くと、桂は教室から出て行く。

「てめエ、勝手なこと言いやがって…！！」

「もついいだろ。言っちゃったモンはしょうがないし」

「言っちゃった、って他にごまかし方色々あるだろ！」

「刹那。この後は、おやつ食い放題だぞ」

高杉を無視して、銀時は刹那に言う。

「話聞けコラーツ!!」

キレた高杉の聲が、学舎中に響いた。

「何時来ても、晋助さんの家って大きいですね」

授業の後、銀時と刹那は先に高杉の家に来ていた。

「で、刹那。ツラには、何やるんだ？」

「やるって、贈り物ですか？うーん…。お花あげます！」

「花？女らしいな」

「銀時さんは、何あげるんですか？」

「プレゼントは値段じゃねえ。込めた気持ちが大事なんだよ」

足元に落ちている小石を拾う。

「だから、この石ころでもいいだろ」

「喜びませんよ！こんなの貰っても！」

「おーい、刹那ーっ！銀時ーっ！」

遠くから、桂が手を振り、刹那も手を振った。

「ヅラも来たことだし、先入ってよーぜ」

言いながら、刹那の腕を引っ張って家の中に入って行く。

「引っ張らないで下さいよ」

「やっぱり来たの……か!？」

家から出て来た高杉は、驚きの光景を目にし、硬直する。

「ん?どうした」

銀時は刹那の腕を掴んだまま訊いた。

「おまえ…、及川の手…!」

「あ?…悪い刹那、ずっと腕掴んでた」

腕を放しても、高杉は何やらブツブツ言っており、そのまま家に入って行く。

「どうしたんだ?あいつ」

「さあ…?」

落胆しているような高杉の様子を見て、何があったのか皆目見当のつかない2人だった。

「おい、高杉」

「……」

「聞いてるー？」

「……」

「チビ杉ー、ねえドチビ」

「……」

「どうなってるんだ……」

「こっちが訊きたい。何で禁句を言っても、無反応なんだ？」

先程から悪口を言う銀時を見て、桂が疑問を口にする。

「お手洗いに行つてきますね」

刹那は、そう言つと部屋から出て行く。

「そついや、俺が刹那の腕掴んでたの見てから、様子がおかしくなつたな」

「それが原因じゃないのか？」

一瞬の沈黙。

銀時は、ニヤリと笑い高杉に言つた。

「高杉、おまえさー」

「……」

「刹那のこと好きだろ」

その瞬間、これまで無言だった高杉は、顔を真っ赤にして振り返る。凶星のようだ。

「やっぱり好きなんだ」

「ち、ちげーよ！及川のことは、嫌いじゃねえけど、好きとかそうゆう感情は……！！」

「顔真っ赤だぞ」

「好きじゃなかったら、大好きか？」

更に顔を真っ赤にする高杉を見て、銀時と桂は面白いと思っていた。すると、刹那が戻ってくる。

「あれ？どうしたんですか？」

「あ、刹那」

「え？及川！？」

「刹那、高杉がな」

銀時は、刹那に話しかける。

後ろから「止める！」と高杉が叫ぶ。

「おまえのことが、大好きだったさ」

「え……？」

いきなり何？とゆうように刹那は高杉を見る。
高杉はすぐに、目を逸らした。

「私のことが好き…なんですか？」

「あーだから、それは…」

「…嬉しい」

「え？」

小声で呟いた一言を聞き、3人が同時に言う。

「誰かに好き、って言われたの初めて。すっごく嬉しい！」

頬を少し赤く染め、刹那は微笑んだ。

「お、俺が言ったんじゃないくて、銀時が勝手に…」

「嬉しいって言ったんだから、良かったじゃねーか」

余計なことを！とばかりに高杉は銀時をどつく。

「晋助さん、私のどこが好きになったの？」

余程嬉しかったからか、敬語が抜けていることに気づいていない。

「どっつて……」

「全部ひっくるめて好きなんだろう？」

銀時が言うと、高杉は無意識に「うん」と頷いていた。

「何言わせんだ！」

「ありがとう！好きになってくれて」

「だから、好きって直接言ってねーだろ！」

「今言ったよ」

「これは、関係ねえよ！」

「もう好きだってこと認めちまえよ、チビ杉」

「誰がチビ杉だ！二度も言いやがって！！」

禁句を言った銀時を怒鳴る。

「聞いてたんじゃん、おまえ」

銀時と高杉は、しばらく言い争い、桂と刹那はそれを見ていた。

（こんなに楽しいのは、初めてだな……）

この人達と会えて良かったな、と思った。

それから数日後、桂の誕生日当日、刹那は桂に摘んできた花をあげた。

次の高杉の誕生日の時も、花をあげた。

「そっぴゃ、おまえは誕生日何時なんだ？」

銀時は誕生日の時、刹那から花を貰って訊いた。

「私の誕生日？確か、年が終わる前の日だったかな……」

「12月30日か。忙しそうなに生まれたな」

そっぴゃの？と刹那は呟いた。

この頃になると、銀時達との会話で敬語を使うことは殆どなくなつた。

「刹那はここに来て、初めての誕生日だからな。今から、楽しみにしてろよ」

まだ2ヶ月も先のことを、桂は自分のことのように楽しみに言った。

「及川って、誕生日祝ってもらったこと無いのか？」

「無いよ。誰かのを祝ったことはあつても、自分のは一度もね」

刹那の話聞き、高杉は誕生日に何を渡そうか、考えた。

2ヶ月が経ち、刹那の誕生日がやってきた。

この日は朝から雪が降っており、昼過ぎには、かなり積もっていた。

「一杯降ってるなー。小太郎さん達、来れるかな」

縁側から外を見てみると、銀時が何かを食べている。

「銀時さん何食べてるの？」

「天然のかき氷。刹那も食う？」

銀時は雪を皿に載せ、シロップを掛けて食べている。

「お腹壊すよ！そんなの食べて」

「壊れるまで食わせとけ」

声に振り返ると、桂と高杉が来ていた。

「おー来たのか」

「刹那。誕生日おめでとう」

桂は持っていた小さな箱を、刹那に渡した。

「開けていい？」

「その前に、先に俺のから開けろよ」

高杉が割り込んで、小さな箱を渡す。

「おい、割り込むな！」

刹那はとりあえず、高杉のから開けた。

中には、赤い花の形をした髪飾りが入っていた。

「わあ……。綺麗」

嬉しそうに笑う刹那を見て、高杉は照れ隠しに下を向く。

「晋助さん、ありがとう！大事にするね！」

「あ、そ…。そうか。良かった」

礼を言われて、顔を赤くして口ごもる。

刹那は次に、桂の箱を開けた。

中には、和菓子が幾つも入っていた。

「美味しそう。みんなで食べようよ！」

「え？俺が持ってきたのを…？」

「みんなで食べた方が美味しいでしょ」

「そうだな。じゃあ、早速」

銀時が来て、箱に手を伸ばす。

「何、おまえが先に食べようとしているんだ！これは、刹那にやつたんだから刹那から取れ」

桂が言うと、高杉も言ってくる。

「つか、おまえはずっと雪食ってる」

「なんだとーっ！！」

「あー、みんな止めてよ。私は、これとこれを食べるから、あとは3人で選んで」

刹那は箱から、自分の食べたい菓子を取ると、箱を3人に渡す。渡された箱から、3人は遠慮がちに菓子を取り、4人で一緒に食べた。

「ねえ、外で遊ぼうよ！こんなに雪が積もってるし」

食べ終わった刹那が、外を指差す。

「えーいいよ。寒いし」

「雪を食べていた奴が言うな」

桂が言った瞬間、銀時に雪が当たる。見ると、何時の間にか高杉が外に出ている。

「てめエ、何しやる！」

銀時は外に飛び出すと、雪を掴み、高杉に投げつける。

「当たるか！」

雪をかわし、再び銀時に雪を投げる。

「楽しそう…。小太郎さんもやろうよ！」

「…そうだな。じゃあ、やるか」

桂と刹那も外に出て、雪合戦に加わる。

4人共、雪まみれになっても止めようとはしなかった。
その様子を部屋から、松陽は微笑んで見ていた。

（楽しい…。この人達とずっと一緒にいたいな）

罪を忘れた訳ではないが、刹那はここでずっと生きていたいと思っ
た。

この生活が何時までも続くと、刹那は勿論、銀時達も思っていた。

第31話 穏やかな日々（後書き）

まもなくお別れです…。
誰とは言いませんが。

第32話 別れ（前書き）

誰とは言いません。

別れるのが、誰とは…。

第32話 別れ

刹那がこの世界に来て、一年半が過ぎようとしていたある日。

「え？先生に？」

教室で、刹那は銀時達と話していた。

頭の左側には、去年の誕生日に高杉から貰った花の髪飾りを付けている。

「もうすぐ、先生の誕生日なんだ。だから、今年は俺達で花あげようと思ってるんだ！」

「おまえ、よく花摘んでるだろう？だから、どんな花がいいかと思っ
てな」

「…わかった。探してみるね」

授業が終わった後、刹那は近くの山まで行ってみた。

「先生にあげるんだから、この前銀時さんにあげたコスモスじゃ駄目かな…」

目を閉じて、波導で山の周辺を見る。

「あ、向こうに何か咲いてそう」

目を開け、見えた先に向かった。

「これって……」

まだ殆ど咲いていなかったが、辺り一面花畑になっている場所があった。

しかも、この世界で見れると思っていなかった花だ。

「グラシデアの…花。この世界にも、あつたんだ……」

グラシデアの花は、人に感謝の気持ちを込めて贈る物だと聞いたことがある。

松陽へのプレゼントにしては、ちょっとなと思ったが、感謝の気持ちも込めて渡そうと考えた。

「綺麗だな……」

咲いていた花を一輪摘み、見つめた後、頭の右側に付けた。

「全部咲くのは、もうちょっと先かな……」

花畑を一通り見てから、帰ることにした。

「結構高いな……。ここ」

崖の近くから、視線を落とし、景色を見た。
遠くに学舎が見え、早く帰った方がいいかな、と思った時だった。

「あ……」

風が吹き、髪に付けていた花が飛ばされる。

花は空高く舞い上がり、やがて見えなくなった。

それから数日。

松陽の誕生日の前日、刹那は銀時達と一緒に花畑に向かった。

「もうすぐだよ」

「何で朝早くから行くんだよ……」

眠そうに銀時は歩く。

前を歩く刹那が、振り返った。

「昨日行った時、まだ半分位しか咲いてなかったけど、今日は全部咲いてると思うの!」

楽しそうに刹那は、話した。

数分歩き、花畑に着いた。

だが、花は刹那が言った通り、半分程しか咲いていなかった。

「半分位しか咲いてねーじゃん」

「咲かなかったか……」

朝日が花畑に降り注いだ、その瞬間。

「うわぁ……」

花が一斉に開き、辺りは赤い絨毯を敷いたようになった。
朝日の中を、花は風に揺れている。

「綺麗だな」

銀時が呟くと、3人も同調し頷いた。

「早速摘もう。先生、きつと喜んでくれるよ！」

「ところで刹那。この花、なんてゆう名前だ？」

桂は花を指差した。

花の名前は、まだ言っていなかった。

「『グラシデアの花』ってゆうの！本当は、感謝の気持ちを伝える時にあげるんだけど、先生には感謝の気持ちも込めて、この花にしようと思ったの」

「感謝の気持ちを伝える時に、ねえ…」

呟いてすぐ、銀時は花畑に入っていく。

「俺が一番多く摘んでやる！」

「何！？てめエより、俺が先に摘む！」

銀時を追い掛け、高杉も花畑に入る。
そんな様子を、桂と刹那は見ている。

「朝から騒がしいな、高杉は」

「訳があるの。昨日銀時さん、晋助さん起こらせちゃって…。私も

原因があるんだけどね」

「何があつたんだ？」

「この花畑から帰った後、銀時さんと一緒に晋助さんの家に行ったの」

「それで？」

「留守だったから、待たされてただけど、その間に銀時さんと一緒に晋助さんのお菓子全部食べちゃって……」

「帰って来た高杉を怒らせたのか」

「うん……。私は、すぐ謝ったんだけど、銀時さんは謝るところか、『そこに置いてたおまえが悪い』って言って喧嘩になっちゃって」

「それが次の日になっても、続けているとゆうことが」

互いに、顔を合わせないように花を摘む銀時と高杉を見た。

「俺達も花を摘むか」

「そうだね」

桂と刹那は、花畑に入り、花を摘み始める。

「いてっ！」

不意に高杉が、声を上げた。

「どうした？」

桂が訊き、刹那と一緒に来る。

銀時は一瞬見たが、花を摘み続けている。

「葉っぱで、手エ切っちゃった」

見ると、右の手のひらに斜めに裂けた傷があり、血が出ている。

「そんなに深く切ってないみたいね」

刹那は、持っていたハンカチを高杉の手に巻いた。

「これで大丈夫だよ！」

「あ、ありがとう…」

「どういたしまして！」

顔を赤くして、高杉が礼を言うと、刹那は微笑んで言った。

「お昼前には、帰るようにしよう。でないと、先生心配するし」

刹那が言うと、桂と高杉は頷いた。

それからしばらくして沢山の花を摘み、そろそろ帰ろうかと思った頃。

「髪飾り、どっかに落としちゃった…」

花を摘むのに夢中になっていたせいで、どこに落としたか分からない。

「探すの手伝おうか？」

桂が訊くと、刹那は首を振った。

「先に行つていいよ。すぐ見つかると思うから」

「そうか？」

「見つかったら、すぐ追い掛けるよ」

桂達は、花畑から去つて行き、刹那だけが残された。

「さてと…」

目を閉じて、波導で花畑を見る。

波導を使っている所を見られなくなかった為、あえて一人になった。

「あつた」

花の中に、グラシデアの花より赤い髪飾りが落ちていた。すぐに拾い、髪に付けた。

「早く行こつと」

小走りで花畑から出ると、山道を下り始める。

花を抱え、3人は山道を歩いている。

「これだけあれば、先生喜んでくれるな！」

「そうだな！」

銀時の顔を見ずに高杉がいい、桂は頷いた。

「刹那のおかげだな！」

「ああ。及川がグラシディアの花を、見つけてくれたからな」

桂と高杉がそれぞれ言った。

「刹那は、まだ来てないな」

そう言いながら、銀時は振り向く。

銀時が前を向いた時、刹那が走って来る。

「みんなーっ！」

「あ、刹那が来た」

桂は振り返り、刹那の近くに走って行く。

「髪飾り、見つかったのか」

「うん。花の中に落ちて…危ない！」

話の途中で、刹那は上を見て叫ぶ。

桂も、刹那が見た物に驚き、銀時と高杉に叫んだ。

「銀時、高杉！逃げろ！！」

その声に驚き、上を見ると、岩が幾つも落ちてくるのが見えた。

「刹那、避ける！」

桂が刹那を庇うように、手を伸ばす。
その間に、岩が全て落ち、砂埃が舞った。

「いたた…。小太郎さん、大丈夫？」

倒れている桂に、刹那が声を掛ける。

「う…。いたつ…。」

目を覚まし、起き上がってすぐ左腕を押さえる。

「大丈夫！？」

「折れてるみたいだ…。おまえは、怪我は無いか？」

「私は平気。それより、銀時さん達は…！？」

2人は、立ち上がって周りを見る。

「銀時…、高杉…。どこだーっ！！」

「返事をしてーっ！」

震えながら、2人は叫ぶ。
すると、小さな声が聞こえた。

「刹那、ズラーっ！こっちだ…」

山の斜面と岩の隙間から、高杉の声がする。

刹那が先に走り寄り、桂は腕を押さえて、近くに行く。

「高杉！大丈夫か！？」

「血が出てるよ！」

隙間から覗くと、確かに頭から少し血が出ている。

「岩、少し動かすぞ」

桂は刹那と一緒に、岩を押す。

左腕が使えない為、右腕だけを使った。

岩は、少し動き、隙間が広がる。

「よし、高杉早く出る」

「…足が動かねえ」

「折れたのか？」

違うと言って、高杉は首を振る。

「感覚がねえ。打ち所が悪かったみてーだ…」

「そんな…」

桂は歯を食いしばり、隙間に入ると、折れた左腕も使い、高杉を引っ張り出す。

「ヅラ…ありがとう」

「うつ…ぐあアッ!!」

腕に激痛が走り、桂はうずくまる。

「小太郎さん！」

「ヅラ、腕折れてんのか…？」

「ああ…。それより、銀時を探すぞ」

腕を押さえたまま、桂は立ち上がる。

「おまえは、そこにいろ。銀時は俺と刹那で、探す」

「はっ…！小太郎さん…あれ………」

「な……！？」

刹那が指差した所を見て、桂は絶句した。
グラシデアの花が風に舞う中、岩の下敷きになって血を流し、微動

だにしない銀髪の子供……。

「銀時ーっ!!」

桂はその場に駆け寄る。

刹那も、一緒に行く。

「おい、銀時がいたのか？」

高杉からは、銀時の様子が見えなかった。

「銀時！おい、しっかりしろ、銀時!!」

「銀時さんっ!!」

岩の下敷きになった銀時を桂と刹那は、必死に叫んだ。

「すぐ、助けてやるからな！」

桂は岩を押し始める。

刹那も一緒に押すが、子供2人では、岩はなかなか動かない。

「このっ!!」

左腕まで使い、桂は岩を押し続ける。

すると、後ろで物音がした。

「ぎ、銀時……？」

振り向くと、高杉が這いながら来ていた。

「晋助さん…。這つて来たの？」

「おまえ、あそこにいろつて言つただろ！」

「うるせーよ。それより、早く銀時を助けるぞ」

なんとか上半身を起こし、高杉は岩に手を掛ける。

「せーの！！」

同時に力を入れ、岩を押す。

「このゝつ！！」

3人で押したからか、岩が動き倒れた。

「よし！」

「銀時！」

すぐに桂が、銀時を抱き起こす。

だが、銀時はぐったりとしており、だんだん冷たくなっていく。

「い、息…。してない」

「やだ…。嫌だよ…。こんなの」

刹那は、銀時の手を取った。

目に涙を浮かべ、桂は高杉を見る。

「た、高杉…っ！銀時が…しっ」

「んな訳ねえだろ！！」

桂の言葉を遮り、高杉は叫ぶ。

握り締めた手が震えているのが、自分でも分かった。

「銀時はまだ…死んでねえ。まだ…生きてる！」

自分に言い聞かすかのように言った。

桂は目をこすり、頷いた。

「そう…だよな。まだ…生きてる…よな」

死んでるよ、その言葉を刹那は飲み込んだ。

（この子達…、まだ死を受け入れられないのね。無理も無いけど…）

「俺…、先生呼んでくる」

桂は立ち上がり、3人を見る。

「…そこにいろよ。すぐ戻るから」

走り出し、桂は山道を下りて行く。
高杉と刹那は、その姿を見送った。

「及川…。おまえ、怪我してるか？」

「小太郎さんが庇ってくれたから、怪我は無いよ。…それより、晋助さん足が」

「……行くぞ。銀時、及川」

呟くと、高杉は銀時を背負い、そのまま這い始めた。

「晋助さん何してるの！？そんな足で……」

「また何時、岩が落ちてくるか分かんねえから、安全なところまで行くぞ」

這いながら進む高杉は、その度に顔や腕を岩にぶつけ、傷が出来ていく。

「もう…少しだから…」

「晋助さん、もう止めて！」

刹那は叫ぶが、高杉は止めず、何かを言い出す。

「銀時、聞こえてんだろ…？この前、おまえが俺のお菓子食ったこと、もう怒ってないから…」

「え……」

「チビとか言っても、白髪とか言わないから…」

思わず、刹那は立ち止まった。

「だから…、死ぬなよ……。銀時…っ！」

泣きじゃくる高杉を、刹那はじっと見つめた。
考えるより先に、口が動いた。

「晋助さん。足と手、出して」

「え…？」

涙を流しながら、高杉は刹那を見る。

刹那は、銀時を下ろし、高杉の足と右手に手を翳した。

「及川…？」

すると、刹那の両手が白く光り輝いた。

「な…！？」

光が消えると、高杉の手の傷が消え、足が動くようになった。

「おまえ…！？」

驚く高杉を一瞥し、胸の前で手を合わせる。

これから何をするのかは、分かっていた。

「銀時さんを生き返らせる。私の存在と引き換えに」

「何…言ってるんだ？」

「これしか方法が無いの。あなた達の悲しむ姿は、見たくないから……」

「止める！さっきみたいな力を使うのか！？おまえの存在と引き換えって、消えちまうのかよ！？」

刹那は静かに頷いた。

「うん。あなた達に会えて良かった。この力を、大切な人に使えて」
「止める、及川！！」

叫ぶ高杉を見ずに、刹那は合わせていた手を銀時に翳した。
その瞬間、白く強い光が輝いた。

「なんだ？今の光……」

山道を下りていた桂は、強い光を見て、足を止めた。

「高杉達がいる所だ……」

眩くと、元来た道に戻る。

（嫌な予感がする……）

光が収まると同時に、銀時は目を開け、起き上がった。

「あ、あれ。俺……」

「銀時…」

高杉が呟くと、後ろから桂が走って来る。

「銀時！？生きてる…」

「及川が…銀時を生き返らせて、俺の足も治した」

「刹那が…！？」

刹那を見ると、姿が白く光っていた。

「おまえ…どうしたんだ？」

「自分の存在と引き換えに…おまえを生き返らせたんだ。刹那は…」

辛そうに、高杉は銀時に言った。
銀時は目を見開き、刹那を見た。

「やっと、私の名前呼んでくれた」

刹那は微笑み、涙を流した。

「さようなら…。ごめんなさい」

「刹那…！」

叫び、駆け寄ろうとした瞬間に、刹那は消えた。

「ここは…」

消えた筈の刹那は、まだ銀時達の前にいた。但し、刹那以外のものは全て止まっている。

「おまえ以外の時は止めた」

後ろから、アルセウスが現れる。

「再び、やってしまったな。刹那」

「後悔は…していません。私は、この後どうなるんですか？」

「ある空間に送る。そして、人の姿を剥奪する」

「先に空間へ行くんですか？」

「そうだ」

「この世界の物を、2つ持っていきたいんですが…。いいですか？」

アルセウスは頷き、刹那が持っていきたい物を出した。

「では、おまえを魔獣に変えよう…」

前脚を動かした時、刹那は髪飾りを外す。

外してすぐに、刹那の姿はシェイミに変わった。

「行くぞ」

「はい」

刹那は銀時達を見て、もう一度「さようなら」と呟き、その場から消えた。

第32話 別れ（後書き）

過去の話、漸く終わった…！
この小説も、もうすぐ完結ですけど。

第33話 氷空の花園（前書き）

言わなくてもいいかもしれませんが、念の為言います。
氷空はそらと読めます。

第33話 氷空の花園

欠片の光が消え、景色が元に戻る。

気付かなかったが、途中から刹那は喋っていなかったようだ。

「これが…私とあなた達との出会いと別れ…です」

「俺が見た、あの夢は…」

呟いた銀時に、刹那は頷く。

「本当にあつたことです。あなた達が、花を摘みに行った記憶は、アルセウスによって書き換えられた物でしょう」

「話は済んだか？」

アルセウスが訊くと、刹那は頷いた。

「では、移動する。刹那の空間へ」

目が輝き、アルセウスは4匹と共に消えた。

「ここが…刹那の空間？」

3匹は、辺りを見る。

そこは、一面グラシデアの花が咲く花畑になっており、花畑の周りには、ブナや白樺などの木々が生えた森になっている。

森と花畑の間に、小さな小川がある。

上を見ると、雲一つ無い、どこまでも澄んだ青空が広がっている。

「そう……」

声のした方を見ると、橙色の着物を着て黒く長い髪をした、青緑の目の少女がいた。

「あなた達と別れた後、私はこの『氷空の花園』にいたの」

「刹那……」

刹那の姿を見た瞬間、軽い頭痛のような痛みが3匹に起こった。

「なんだこれ……」

痛みが退き、再び刹那を見る。

すると、消えていた刹那の記憶が一気に蘇った。

「思い出した？私のこと……」

敬語が抜け、過去と同じ話し方になる。

「ここは、時空の流れが違うから、私は人間の姿になれるし、あなた達も私のことを」

「なんで……」

話しの途中で、銀時が声を震わせて言い出す。

「なんで、俺なんか助けたんだ…」

「銀時……」

「助けなければ、おまえは消える必要なかった筈だろ…!」

刹那は銀時を見つめた後、寂しそうに笑った。

「言ったでしょ。あなた達の悲しむ姿を見たくないって。…それに、銀時さんが死ななくても、私は神の力を使った筈よ……」

一息付き、刹那は言う。

「松陽先生にね……」

「おまえ、先生のこと……」

刹那が消えたのは、松陽が死ぬ前。
松陽の死を、何故知っているのか、桂は気になった。

「知ってるよ……」

頷くと、刹那は花畑の中に入り、ランドフォールのシェイミになると、一度空を仰いだ。

「私の目的が、あなた達に会うことだって言ったでしょ？あなた達を魔獣…ポケモンに変える前の日に、私はあの世界に行ったの」

刹那はずっと、花園にいたが、月日が経つうちに、時空を移動する

ことや時を止めることが出来るようになった。

「行ってみようかな……」

この空間にいろ、とは言われたが、出るな、とは言われていない。
刹那はスカイフォルムのシェイミになると、空を抜け、時空間を通り、銀時達のいる世界へ来た。

「みんな、どうしてるかな……」

空を飛び、かつて銀時達と生活をしていた学舎へ向かった。

「……何…これ」

刹那が見たのは、焼け落ちた学舎だった。

「どうして…こんな。…先生や銀時さん達は……？」

学舎の周りを飛び、焼け焦げた柱を見つめる。

「……」

しばらく見つめた後、学舎から離れた。

「何があっただろう…」

波導で辺りを見るが、知っている者の波導は見当たらない。
刹那は飛ぶと、波導を見ながら様々な場所に行ってみた。

「あ、あれって図書館かな」

眼下に、図書館らしき建物が見えた。

何か分かるかもしれない、と考え、時間を止めて中に入った。

「あの焼け跡は、ただの火事とかじゃない。何かあった筈…」

本棚から、それらしい本を片っ端から読んでいく。

「嘘……」

本に書かれていることを見て、刹那は表情を無くす。

「先生…っ!」

読んでいくうちに分かった。自分がいなくなった後のことを…。

「こんな…ことが……」

刹那がこの世界から消えた数年後、松陽は幕府によって処刑されたらしい。

その数年後の、攘夷戦争の項目を読んでいると、桂と高杉の名前を見つけた。

「…？銀時さんの名前が無い…」

（戦争には出なかったのかな。…ん？）

「白…夜叉？」

口にした瞬間、直感的に銀時だと思った。

理由は分からないが。

刹那は本を閉じ、元の場所に戻すと、図書館を後にした。

「みんなに…会わなくちゃ…！」

空を高く飛び、波導を広範囲に使って見る。

「……見つけた」

覚えのある波導を見つけ、その場に向かって飛び続けた。

「この辺り…なんだけど……」

一番近くを感じた銀時の波導を目指して来たが、かなりの時間が掛かってしまい、夕暮れになっていた。

「話したいことは、一杯ある。でも、私はもういない…。姿だつて、違う」

呟き、下を…万事屋を見る。

窓の近くに行き、中を覗いた。

「おーい、神楽。ちょっとどけ、よく見えねー」

「銀ちゃん。サトシは、シンジに勝てるアルか？」

「知らねーよ。俺だったら、リザードンとかジュカイン連れてきて戦うけどな」

オレンジ色の髪をした少女と話す、銀髪の男。

幼少の頃の面影があつた。

「銀時さん……」

名を呟いた時、涙が出てきた。
そして、無意識に呼んでいた。

「銀時さん！」

叫ぶと、銀時は窓の方を見た。

「猫か……？」

刹那の声は聞こえていたが、言葉は聞こえなかった。

「……言葉も、届かないのね……」

自分は本当に、この世界から消えた者だと思いしらされた。
それ以前にポケモンになっっている為、分かる筈も無いのだが……。

「仕方ない……。あれをするか」

話しがしたい。

自分のことが分からなくても、会って話しがしたかった。
ただ、それだけだった……。

「さてと……」

その日の深夜。

刹那は万事屋にいた。

寝ている銀時に、両前脚を翳し、呪文を唱えた。
すると、強い光が輝き、銀時はピカチュウになった。

「次は、小太郎さんかな」

万事屋を出ると、桂のアジトに行き、銀時と同じように呪文を唱え、ニヤースに変えた。

「最後に晋助さんだけど、まだ起きてる…」

深夜の町を歩く高杉を、刹那は見下ろした。

「早くやっちゃおう」

きめ細かい、速効性の眠り粉を出し、高杉に振り掛けた。

「なんだ…？」

橋の上にいた高杉は、突然睡魔に襲われ、橋に寄りかかるようにして眠ってしまう。

「やり方が乱暴だったけど…。ごめんなさい」

一応謝ってから、呪文を唱え、ゾロアに変えた。

「ここだと目立つから、橋の下に移しとこ」

ゾロアを抱え、橋の下に行くと、草村に下ろす。

「朝になったら、3人の前に行こう」

「……その後に、私はあなた達の前に出てきたの」

刹那は、3匹をポケモンにした理由と経緯を話した。

「でも、訊きたいことは私が出ていく前に聞いてちゃったけど……」

遺跡で、会話を聞いたと言ったことを思い出す。

「話しをしたら、すぐ元に戻そうと思っていたのに、次元の渦が発生するなんて予想外なことが起きて、あなた達を危険にさらしてしまった……」

「おまえが俺達をポケモンに変えたのなら、すぐに戻してくれないか？」

自分達をポケモンに変えたのは、刹那である為、桂は元に戻すように言った。

すると、刹那は首を振った。

「今は駄目」

「なんでだよ!!」

「人間に戻ったら、あなた達斬り合うんでしょ？こんな所で斬り合いされたくないし、戻ってもすぐに元の世界へは帰れないよ」

「どうゆう意味だ？」

「あなたは数日、別の世界にいたから、今帰ると時差みたいなものが発生しちゃうの。それで、アルセウスが調節しているの」

「どのくらい掛かるんだ？その調節は」

げんなりとした顔で、銀時が訊いた。

「もうちょっと、時間が掛かるかな…」

空を見上げ、刹那は呟いた。

「…それまでどうする？私に訊きたいことがあったら、全部答えるけど？」

第33話 氷空の花園（後書き）

神氷空も、あと2話で完結します。
作中で、神樂が話しているのは、シンオウリーグでのワンシーンです。

第34話 忘れないで（前書き）

いよいよ、次回で完結！
その一つ前の話です。

第34話 忘れないで

「俺達と別れた時、何か持っていたな。ありやなんだ？」

訊きたいことがあったら、訊けと言われた為、銀時はなにげなく訊いた。

「見たい？」

刹那はスカイフォームになると、花畑の近くに生えた一本の木に飛んで行き、ウロの中に入れていた物を出し、戻ってきた。

「これだよ」

持ってきた物は、深緑色の本…松陽の教本だった。

「おまえ…！」

「あと、もう一つ」

教本を開き、中に挟んでいた写真を見せた。
写っていたのは、雪にまみれた4人の子供…。

「この写真…！」

3匹は写真を見つめ、驚いた。

この写真は、刹那の誕生日の時、外で雪合戦をしていた際に松陽がこっそり撮っていた物だ。

あとで写真を見せられ、何時撮ったのか4人で言い合ったりした。

「あの世界で、最初で最後の私の誕生日の時の写真とこの本だけは置いていきたくなかったの。それと、これもね」

後ろから出したのは、赤い花の髪飾り。

「持ってたのか。まだ……」

高杉は髪飾りを見て、一瞬目を見開いた後、呟いた。

「ここに来てからも、シェイミになる時以外は、ずっと付けてるよ」
写真を教本に挟み、髪飾りを乗せた。

「俺も訊いていいか？…答えたくなければ、無理に言わなくていい」
やや迷いながら、桂が訊いてきた。

「何？言って」

「先生が死んで…殺されて、おまえは、どう思った……？」

刹那は一息付き、「決まってるでしょ」と言い、目つきが鋭くなる。

「悔しくて…、悲しくて…、それこそ、世界を消し去りたくなった」
でもね、と続けた。

「私はもう、あの世界にはいない。…分かる？大切な人が殺されて

いるのに、何もすることが出来ないのが…」

刹那の思いは、複雑だろう。

自分が消えた後に、次々と知らされた事実を突き付けられて。

「私が消えなかったら、戦争に参加してたかな。…それ以前に、先生に力を使って助けてたかも。あ、やっぱり私は、消えちゃうな…」

…」

ブツブツと、独り言を言う。

聞いていると、どんなことがあっても、刹那は消えてしまっていたらしい。

「…ところで、晋助さん。全てが終わったら、私の命は好きにしたいって言ったけど、どうする?」

「おまえ…!そのこと」

驚いて桂が言うと、刹那は銀時と桂の方を見る。

「私の身勝手に、付き合わせちゃったからね。だから」

「だからじゃねーよ!…おまえは」

「何もしねェよ」

「え?」

刹那だけでなく、銀時と桂も聞き返した。

「何もしねエって言うてんだろ。おまえを殺る理由は無くなっちまったし、それに、死なねーんだろ？おまえ」

確かに、刹那はアルセウスによって、死ぬことが出来なくなっている。

刹那は、力無く笑った。

「そう。私は死ねない。あの時は、咄嗟に出来もしないことを言っちゃって、その後、どうしようか考えてたけど、結局考えつかなかった」

3匹に背を向けて近くに流れる小川に飛ぶと、川の流れを見つめた。

「本当に駄目ね私。他人のフリして、イヴって名乗ろうとしてたのに、刹那って名乗ってたし。みんなと一緒に寝たりしたし、迷惑ばっかりかけちゃった」

「おまえ、そんなに自己嫌悪になりやすい奴だったっけ」

銀時が言うと、刹那は振り返った。

「昔のおまえは、何かと引っ張って行くような感じで、弱音を吐いたりとかしなかっただろ」

「……」

「さつきは、なんで助けたんだっつたけど、ありがとな。あん時、礼言いそこねたからな」

刹那は少し俯いた。

「私は…、あの時したことに、後悔はしてない。でも、ろくに話さないで消えたから、今、怒ってる?」

「怒ってねーよ。怒ってるとしたら、こんな姿にしたことだ」

「まっただ」

桂も言うつと、高杉も頷いた。

「その姿は、私の意思と関係無しになっちゃったの。ただ、魔獣になれって念じたただけだから」

「あと、もう一つ!一緒に寝たつて、わざとだったのか、あれ!」

「うん。嬉しくつてつい…」

笑つて答えると、空が光り、アルセウスがやって来る。

「調節は、終わった。何時でも帰れるぞ」

「やっと帰れるのか!」

「そろそろ、お別れだね」

刹那は再び、少女の姿になり、髪飾りを付けた。

「あなた達が、元の世界に帰つて、人間に戻れば、また私についての記憶は、消え去るわ」

「な……！？」

「言ったでしょ。私はもう、あの世界にはいない。存在が消えた者の記憶が、残ることは無いの……」

「刹那……」

やりきれない気持ちで、銀時は刹那を見つめた。

「私の身勝手に付き合わせて、本当にごめんなさい。あなた達にまた会えて、嬉しかった…。ありがとう！」

笑って言うと、アルセウスに「やって下さい」と言った。

「待て、刹那！」

桂が叫ぶのと同時に、白い光が辺りに広がった。

「さようなら。私のことは忘れても、これだけは覚えていて」

足元に咲いているグラシデアの花を一輪摘んだ。

「この花は、感謝の気持ちを伝える為に贈る物だと」

「刹那……」

3匹は、必死に叫んだ。

すると、光の中で刹那の姿が、少女ではなく成人した女性の姿に変わった。

「ありがとう、みんな。楽しかった……」

涙を流し、刹那は微笑んでいた。

「刹那ーっ!!」

光が更に強くなり、目を開けていられなくなっても、3匹は名前を呼び続けた。

第34話 忘れないで（後書き）

書くのに時間かった……。

ちなみに、この小説に主題歌や挿入歌があつたら、こんな感じです。

挿入歌

7話、戦いの時…修羅（DOES）

30話、花見の帰り…そこに空があるから（江崎とし子）

主題歌
嘘^{シト}

第35話 グラシデアの花（前書き）

遂に完結！

最後まで、お楽しみ下さい！

第35話 グラシデアの花

がくん、と頭が傾き、銀時は目を覚ます。

「あれ？俺……」

辺りを見回すと、見慣れた万事屋のリビングだった。
机の上で頬杖をして、寝ていたようだ。

「夢……。なんの夢見てたんだ？」

どんな夢を見ていたのか、思い出せない。
いい夢とも、悪い夢ともつくのは確かだが。

「今、夕方か？どっだけ寝てたんだ……」

頭を掻きながら、黄昏色に染まった外を見た。

「あ、銀さん、やっと起きました？」

入り口に、新八が立っている。

「新八？」

「銀さん、ずっと寝ていたんですよ。夜眠れなくなっても、知りませんからね」

ふと、机の隅に目が止まる。

赤とも濃いピンクとも言える花が、幾つも入った籠が置いてあった。

「おい、この花…、どうしたんだ？」

「え？朝から置いてあったじゃないですか。僕、そろそろ帰るんで」

そう言うと、新八は出て行った。

銀時は、花籠を見る。

「朝からあったかア？これ…」

見たことがあるような花。

初めて見た気がしなかった。

一輪取り、見つめた。

「グラシデアの…花か」

ほぼ無意識に、花の名を呟いた。

「あれ？こんな名前だっけ…。つーか、なんで知ってた…？」

花を籠に戻そうとした時、花の中に何かがあるのに気付く。

取ってみると、小さな紙切れだった。

「なんだ？」

紙には、『ありがとう』と一言だけ書かれていた。

銀時は紙を見つめ、静かに笑った。

同じ花籠は、桂と高杉の元にもあった。

銀時の籠と同じように、『ありがとう』と書かれた紙切れの入った。3人の元に、同じ花籠があるとゆうことは、ただ一匹、いや一人を除き、誰も知らない。

「届いたかな、みんなに……」

花畑の中で、赤い花の髪飾りを付けた黒髪の少女が呟いた。

「もう一つも、届いたよね……」

氷のように澄んだ、雲一つ無い空を見上げた。

焼け落ちた学舎の前に、花籠に入っていた花と同じ花…グラシデアの花が、花束として置かれていた。

風が吹き、花びらが一枚飛ばされた。

花びらは空高く飛び、やがて、夕焼けの空と同化するよう見えなくなった。

完

第35話 グラシデアの花（後書き）

最後まで読んでくれた方、ありがとうございます！
中途半端な所が多々あったかもしれませんが、なんとかやりきりました。

さて、次回の小説についてですが、この小説のオリキャラヒロイン・刹那が再び登場します。

次も、コラボですが、ポケモンコラボではないです。

何と、とは言いませんが。

次回作では、刹那本人も知り得ないことが判明する！みたいなことをする予定です。

お楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9461n/>

銀魂 神々と氷空（そら）の時空へ

2011年3月7日02時02分発行